
教えて！マクギブソン

どれる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

教えて！マクギブソン

【Nコード】

N1560C

【作者名】

どれる

【あらすじ】

ある日、マナブ君家のお母さんが教育に目覚めてしまった。家庭教師を雇う事になってしまったけど、果たして小学生に何を教えるのか？家庭教師は必要なのか？頑張れマナブ君！負けるなマナブ君！

家庭教師を追い返せ！（前書き）

初めて小説というものを投稿させてもらいましたので、見苦しい点が多々見受けられるかもしれませんが、ちよとした暇つぶしとして見て頂ければ幸いです。

家庭教師を追い返せ！

初めまして僕の名前は近藤学と申します。

突然ですがとても困っています。

母さんが教育ママと言う者になってしまったのです。

「マナブ、今日から家庭教師のマクギブソン先生がお見えになるから覚悟するザーマス」

「何だよ母さん。僕まだ小学三年生何だよ、それにマクギブソンって明らかに外人さんじゃないか、僕外国語なんて話せないよ」

僕は、さっさと学校に行く準備を済ませる為に自分の部屋に戻ると、そこには机の中からタンスの中まで、物が床にばらまかれ、ベッドの上を飛び跳ねている可愛らしい女の子がいた。

「……ナツちゃんどうしたの？」

ナツちゃんって言うのは、僕の妹なんだ。

僕とは五歳離れてて、お兄ちゃんである僕が言うのも変だけど、目がパッチリしててビー玉みたいに光ってるし、髪の毛だってサラサラで、頭を撫でてあげると喜んぶし、いつもニコニコしてるし僕によくなついててとっても可愛らしいんだ。
だけどもいつも僕の部屋を荒らすんだ。

「おにいちゃん、これみんなナツちゃんがやったんだよ、すごいでしょ」

ナツちゃんが胸を張って威張っている、これはお兄ちゃんである僕がすっかり叱ってあげないと、将来ダメな女と言う者になってしまうかもしれない、やるんだ僕！

「ナツちゃん。散らかしたらダメじゃないか、それとベッドの上を飛び跳ねるのも近所さんの迷惑になるからいけないよ」

「キヤー♪」

ナツちゃんは、キヤーキヤー言いながら、僕に向かってダイブしてきたんだ。

ナツちゃんを何とか受け止めたけど、何でこんなに喜んでるんだろう。

「ナツちゃん、僕は怒ってるんだよ」

「キヤー♪キヤー♪」

ナツちゃんは手足をジタバタさせて喜んでるんだ。
ナツちゃん遊んでる訳じゃないんだよ。

それより僕には、やらなきゃいけないことがあったんだ。
学校に行く準備をしなきゃ、転校初日から遅刻してしまう。

あれ？僕のイカす、ランドセルがない。

「ナツちゃん。僕のイカした、ランドセル知らない？」

「おにいちゃんのランドセルは、知らない」

あれえ〜？おかしいなあ。朝起きた時はあったのに。

……そうか！わかったぞ。犯人はこの中に居る。

まだ僕にしがみ付いているナツちゃんを切り離し、ブルー垂れてるナツちゃんを指差す。

「ナツちゃん。ナツちゃんのランドセルは何処にあるの？」

「ランドセルじゃないもん。ファンシーバックだもん」

くそっ、僕のランドセルに何て名前を付けてるんだ！

「ごめんね。ナツちゃんのは、ファンシーバックだよね〜。で、そのバックは何処にあるのかな〜？」

「ママにプレゼントしたの〜」

母さんに？

リビングにはそんなのなかったと思うけど。

リビングに居る母さんに、僕のランドセルを返してって言っても返してくれないんだ。
ナツちゃんには甘いくせに、僕にはとっても意地悪なんだ。ひどいよ。

「いい加減に僕のランドセル返してよ！」

「なんですか、親に向かってその言葉遣いは、恥ずかしい。そんなんじゃ、とても表に出せないわ」

僕には母さんのザーマスの方が恥ずかしかったよ。

「お願いだから、返してよ。早くしないと学校に遅れちゃうよ」

「あなたみたいな半人前を、学校に出すなんてとんでもないわ」

一人前の小学生なんて逆にやだよ。

「マナブには今日から一週間、家に引きこもってもらいます」

転校初日から休むなんて、そんな事したらシャイなボーイと噂されてしまうじゃないか！

「一週間も家で何するのさ」

「今日からマクギブソン先生がいらっしゃるから、色々教わりなさい」

勉強なんて一人で出来るよ。

「アタシも、オヤスミしたい」

ナツちゃんは、また僕にしがみ付きながら僕に言うんだ。
僕にはどうにもできないよ。

「ナツちゃんはエリートだから駄目よ」

エリートってなんだよ。僕の方がナツちゃんより頭がいいんだぞ。

「それじゃ母さんお仕事行つて来るから、ナツちゃんのお迎えお願いね。それと冷蔵庫にケーキ入ってるから、マクギブソン先生がいらっしゃったらお出しして頂戴」

「わかったよ。行つてらっしゃい」

「おにいちゃん、バイバーイ」

ナツちゃんに手を振りながら僕は考えていたんだ、マクギブソンをどうやって追い返そうか。

母さん達が出て行つてから直ぐに、家のチャイムが鳴ってしまったんだ。

僕まだ何も準備してないよ。どうしよう。

しょうがないから、チェーンを付けたままドアを開けたんだ。

「あの、どちら様でしょうか？」

ドアの隙間から覗いて見たけど、誰も居ないんだ。

「あのー、本当に誰も居ないの？」

怖かったけど、ドアチェーンを外して、外に出てしまったんだ。

「……やあ、君がマナブ君だね」

そこには長ランを着た大男が立っていた。

黒髪をオールバックして眉毛は全部剃られていて、目がライオンみたいなギラギラ鋭いし、鼻の下に沢山お髭を蓄えてるんだ。

僕、一目見て分かったよ。この人は応援団長だ。

「な、なんで、僕の名前を知ってるの？」

「君のお母さんから君の事を、お願いされたからだよ」

母さんからだって！

じゃあこの人が？

「あの、あなたは、外人さんなんですか？」

「ジャパニーズだよボーイ」

「マクギブソン先生？」

「真久木 武尊だよ。マークと呼んでくれ」

マークってなんだよ！

似合ってないよ！

初対面なのに碎け過ぎだぞ、クソ、小学生だと思って馬鹿にして、僕はエリートだよ！

こんな屈辱、初めてだ。こうなりゃ決闘だ。

僕が勝ったら追い返してやる。

「ババ抜きで勝負だ！マクギブソン」

「いいだろう、その代わり私が勝ったら、マークと呼べ！」

くっ、子供相手にムキになって卑怯だよ。

おっと、勝負の前にケーキをお出ししないと。

「あの、紅茶とコーヒー、どちらがよろしいですか」

「秘密」

教えて！マクギブソン

続く

家庭教師を追い返せ！（後書き）

こんな作品なんですけども。よろしくお願い致します。

マナブとマクギブソン!

前回から引き続き僕は、困っています。

結局マークには勝てませんでした。

だってマークが僕の事をずっと睨んでるだ。怖いよマーク。

「ねえ、マークって制服着てるけど学校どうしたの?」

「休んだよ。マナブだけの為にね」

嫌ないいかたするなあ。

「マークって高校生なの?」

「ウっす!」

いきなり叫ばないでよ。近所迷惑じゃないか。

「マークは僕に何を教えてくれるの?」

「僕の生きざまを」

僕、そんなの教わりたくないよ!

嫌だ、もう帰ってもらおう。

「あのさ、マーク、もう帰ってよ」

「煩いよ! 私は今、漫画を見てるんだ。静かにしてくれたまえ」

マークが口の前に人差し指を立てて、シイーって言ってるんだ。高校生にもなってそんなの恥ずかしいし、一々オーバーなんだよ。漫画本は貸してあげるから帰ってよ。

ハァ、もうお昼時じゃないか、何食べよう。

「あの、マークはお昼どうするの？」

「ラーメンでいいよ」

いいよってなんだよ。僕にやらせる気なの？
図々し過ぎるよ。いつもは、温厚な僕も流石に怒ったよ！

僕は、キッチンの棚からカップ麺を取り出し、そのままマークの前に置いてやったんだ。

「……お湯は？」

マークが僕を眼で殺そうとするんだ。

僕の大事な所が縮み上がったよ。僕がエリートじゃなかったら、チビってる所だね。本当に危ないよマーク。

「ご、ごめん、少し意地悪が過ぎたみたいだね」

「漢の風上にも置けねえよ。最低のゲス野郎め。おどれは鬼かあ！
この外道めぐあああ」

子供相手に言い過ぎだよ。僕だって間違える事があるんだよ。

お湯を入れて来たのに、まだグチグチ言ってるし。マークだって漢の風上にも置けないよ。

「ごっつぁんデス！」

ただのカップ麺なのに気合入れ過ぎだよ。

でも、マークの機嫌が直ってよかったよ。あのままネチネチ言わてたら、僕のマグナムパンチが炸裂する所だったよ。嘘じゃないよ、本当だよ。

「ねえ、僕まだマークから何も教わってないんだけど」

もう追い返すのは無理みたいだから、さっさと終わらせて早く帰ってもらおう。

「そうだなあ、マナブが知りたい事に何でも答えてあげよう」

何でもって言ったね！

何でもって言った事、後悔させてあげるよ。クッククック。

「ねえ、マークは何でお髭を蓄えてるの？」

まずは軽いジャブからだよ。

「それは、紳士だからだよ」

嘘付かないでよ！

マークのはただ剃り忘れただけでしょ。

「へえー、それじゃあなんで鳥は空を飛べるの？」

「それは、鳥さんが空が好きで好きで堪らなく大好きだからだよ」

なんだよ、その説明は、子供だと思って嘘付くなんて、ひどいよ。

「じゃあ、僕も空が好きなんだって言ったら飛べるの？」

これをどう返す、マクギブソン？

「半端な覚悟じゃ無理だけど、パイロットになれば飛べるんじゃないの」

なんだよ。そんなの屁理屈じゃないか。

「じゃあ、なんで海は青いの？」

これは分からないだろう。だって僕にも分からないもん。

「じゃあ逆に聞くけどなんでビールは黄色いの？」

そんなの、そうゆう成分が色々入ってるんだよ、多分。
うん、って質問してるのは僕だよ。

「知らないよ、そんな事。最初からそういう色だからじゃないの？」

「それじゃあ、海もそうだ」

ズルいよ、僕が考えたんじゃないか。

「じゃあ、サンタクロースは何処に居るの？」

さあ、マクギブソン。純真無垢な子供の夢を何と心得る。

「クリスマスの時期になると駅前でケーキを売ってるよ」

違うよ！

「プレゼントを枕元に置いて行ってくれる人の事を聞いてるんだ」

マークは何を考えてるんだよ。こっちは真剣に聞いてるのに。

「ああ、それは、本当はお……」

駄目だっ！

マークは子供達の夢を潰す気だ。そういう眼をしてる。

「本当は皆の心の中に居るんだよね。うん。僕なんて毎日、心の中でサンタさんがダンス踊ってるんだよ」

「知ってるなら聞かないでくれよ、マナブ君」

くそっ、さっきから誤魔化してばかりじゃないか。こうなったら子供の底力を見せてやる。

喰らえ！

「ねえマーク、なんで僕には父さんが居ないの？」

「うっ」

教えて！マクギブソン

続く

僕のランドセル！

今回も僕は困っています。

マークに父さんの事を聞いたのはいいけど。マークは父さんの事を知ってる訳ないし、嫌な事思いついたし、軽いトラウマなんで、僕の方がダメージ大きいんだ。

そう言えば、マークのせいですっかり忘れてたけど、僕のランドセルを探さなければいけないんだよ。

ナツちゃんを迎えに行く前に、見つけて隠しておかないと、またナツちゃんの所有物にされてしまう。

「あのさマーク、今まで黙っていたんだけど、実はお願いがあるんだ」

「マナブ。なんでそれを早く言わないんだ。おかげで暇を持て余していたよ」

何を言ってるんだよ。漫画見たり、僕をからかって十分に楽しんでたじゃないか。

「ごめんよマーク。なかなか言い出せなかったんだよ」

僕は暇じゃないんだよ。あんたを追い返すのに必死なんだ。

「僕は今、隠されてしまったランドセルを探してるんだ。僕の命より大事な物なんだよ。お願いだから一緒に探してよ」

「そんなに大事なら、離さないで持っていればいいのに」

何言ってるんだよ、命より大事なランドセルなんてある訳ないだろ。こう言った方がマークのテンションが、上がると思ったから言ったのに、僕の優しさを踏みにじるなんて。ひどいよ。

「うん。そうだね、次から気を付けるよ。取り敢えずマークはリビングを探してよ。僕は母さんの部屋を探して来るから」

マーク一人残して行くのは少し心配だけど、背に腹は替えられないよね。

母さんの部屋に着いたんだけど、母さんの部屋には鍵が掛かってたんだ。いつの間にこんなの付けたんだよ。そんなに僕にランドセルを渡したくないのかよ。

僕はドアを壊す勢いで引っ張ったんだ。勿論、僕のフルパワーでだよ。

くそっなんで開かないんだ、こんなに一生懸命にやったのに報われないなんて、世の中は間違ってるよ。

はあっ！

そう言えば母さん、このドアは、押して開けるタイプだって言ってたじゃないか。

開いたよ。

神様ありがとう。

なんていうか鍵穴がただの飾りだったんだ。

それから僕は、無我夢中でランドセルを探したんだ。ベッドの下からタンスの中まで隅々探したよ。

でも、見つける事ができたのは母さんのへそくりだけだったんだ。この家の財布のヒモは母さんが握っているのに、へそくりなんて意味ないと思うんだけど。銀行に預けた方が安心だと思うよ、僕は。大人って不思議だね。

しょうがないから、リビングに戻ったんだけど、キッチンの方から物音がするんだ。

マークが家の冷蔵庫を荒らしてたんだ。

「そんな所にランドセルがある訳ないだろ」

そこは、お昼ご飯の時に僕が調べておいたよ。

「マーク何勝手に食べてるんだよ」

「プリン」

なんだって、プリンって言ったら今日の僕のオヤツじゃないか。

「なんて事を……」

僕は急いで冷蔵庫を確認したんだ。

良かった。

僕のプリンは無事だ。取り敢えず安心。

なんで無事なのが分かるかって言うと、フタにちゃんと名前を書いておいたんだ。そうしないと全部ナツちゃんに食べられちゃうんだよ。

「よくも、ナツちゃんのプリンを」

ナツちゃん、ごめんよ。お兄ちゃんはナツちゃんのプリンを守れなかったよ、こんな情けないお兄ちゃんを許しておくれ。

「マクギブソンめ、此処で会ったが百年目、成敗してくれる！」

「そんな事言うと、もう何も教えてあげないよ」

大人気ないよ、卑怯だよ、マクギブソン。

「そんなの必要無いよ。おとなしく観念するんだ」

僕の殺人チョプをお見舞いしてあげたんだ。そしたら見事に真二つにマークのオシリが割れたんだよ。僕って凄かったんだ、初めて気付いたよ。

おっと、そろそろナツちゃんを迎えに行かないと。

そう言えば、僕ナツちゃんが通ってる保育園の場所を知らないよ。

どうしよう。

教えて！マクギブソン

続く

お迎えなんて怖くない！

僕は今、ナツちゃんが通っている保育園の前に居るんだ、此処まではなかなか険しい道のりだったよ。

マークがいなかったら僕は今頃、お墓の中に入ってる所だよ。

ありがとうマーク、君は家庭教師からボディーガードに格上げしたよ。

さっさとナツちゃんを連れて帰らないと外は危険がいっぱいだよ。

「おにいちゃん」

ナツちゃんが、僕を見つけるなり、僕に飛び付いてきたんだ。

ナツちゃんは何時までたっても、甘えん坊さんだね。

その時、光沢のある黒光りした素敵な物体が視界に入り、僕は思わず其に手を這わした。

「ナツちゃんこれは」

この無駄に光っている黒い色。この僕のほつぺたみたいに滑らかな手触り。この究極の曲線美を表したフォルム。間違いなく僕のランドセルだ！

ムっ！

僕のランドセルの背に落書きを発見。

【WE LOVE ROCK・N・ROLL】

ナツちゃんに何があったって言うんだ、まだ三歳なんだぞ。ナツちゃんには、まだ早いよ。

僕がランドセルの落書きの部分に、舐めまわす用な熱い視線を送っていると、ナツちゃんが満面の笑顔を浮かべ僕に自慢するんだ。

「いいでしょ♪ママがかいてくれたんだよ」

母さん、ナツちゃんをどうしたいんだよ。

くそつ、擦っても落ちないじゃないか。母さん、マニキュアで落書きなんてしないでよ。

「ナツちゃん、保育園にどうしてランドセルを持って来たの？」

「ハヤクおとなになりたいってゆったら、ママがくれたの」

何が大人だよ、ランドセルっていったら子供の象徴じゃないか。

「ナツちゃんのポーチは、どうしたの？」

「あさ、ママにプレゼントしたって、ゆったよ」

そういう事か！

ナツちゃんにとってポーチはランドセルだったんだ。僕とした事が迂闊だったよ、ナツちゃんはまだ三歳児なんだ、分からなかったっでしょうがないよね。僕は、これでまた一つお利口さんになったよ。

という事は、始めから母さんのせいだったんじゃないか。

そんな事より、マークを近くのコンビニに待たせてるんだった。決って暑いからって涼みに行った訳じゃないよ。マークはそんな人じゃない、マークが来ると園児達が怯えちゃうからだよ。きっとそうだよ、僕は信じてるよ、マーク。

「ごめんよナツちゃん、コンビニに人を待たせてたんだ。急いで行こう」

僕はナツちゃんの手をとり、仲良く早足でコンビニに向かう事にした。

コンビニに着いた僕達はすぐにマークを見つける事が出来た。マークって大きいから凄く目立つんだ。

「おにいちゃん、あのしと、だあれえ？」

ナツちゃん、人を指差すのは失礼なんだよ。

お兄ちゃんである僕がしっかり叱ってあげないと、このままでは将来ナツちゃんが、自分勝手に周りを観ない人間になってしまうかもしれない。

「ナツちゃん、人を指差していいのは、名探偵かコンサート中のミュージシャンだけなんだよ」

「マナブ君、それは偏見だよ。他にもいっぱい、いるはずだよ」

いつの間にか、マークが近くまで来てたんだ、気が付かなかったよ。

「お嬢ちゃん、お名前はなんて言うのかな？」

マークがナツちゃんに向かって微笑んでいたんだ、とっても不気味だよ。ナツちゃんが僕の背中に隠れてしまったじゃないか。

「ナツちゃん、マークは悪い人ではないから大丈夫だよ」

僕の言葉を聞き、ナツちゃんは僕の背中から顔だけ覗かせて絞るように声を出した。

「アタシはナツちゃんです。おじちゃんは？」

ナツちゃん、制服来てるのに、おじちゃんなんて言ったら駄目だよ。今度はマークがむくれてしまったじゃないか。

「ごめんよマーク、ナツちゃんはお髭が苦手なんだ。本当はおじちゃんだなんて思っていないよ」

マークは髭をつまみながら、僕を睨んでる。

「……マークでいいよ」

ぶすつとしながらボソボソと溢す用に言わないでよ、僕に。

「マーくん？」

ナツちゃんがつぶらな瞳で僕を見上げるんだ。違うよ、マクギブソンって言うんだよ。

それなのにマークの顔に笑顔が戻ってしまったんだ。やめてよマー

ク、またナツちゃんが怯えてしまうじゃないか。

まあ、いいんだけどね。そんな事より早く帰りたいよ。

僕は早く帰ろうとしたんだけど、マークがまだ涼みたいって駄久こねるんだ。

そんな事してたら、真面目に働いてる店員さんに申し訳ないよ。

「それじゃあマーク、作戦会議を開こう。僕達が来た道は、ナツちゃんには少し厳しいと思うんだ」

しっかり帰宅ルートを考えないと。

ナツちゃんは僕が守るとして、僕はマークが守ってくれるし。

マークはナツちゃんに守って貰おう。

少し不安だけどなんとかなるよね。

「マナブ君。実は裏技があるんだけど聞きたいかい？」

なんだって！

教えて！マクギブソン

続く

お迎えなんて怖くない！2

僕達はまだコンビニにいるんだ。マークがタクシーで帰ろうとしたんだけど、僕はお金を持ってないんだよ。しょうがないから、来た道を歩いて帰る事にしたんだ。

しばらく歩いていたんだけど、ナツちゃんが繋いでいた僕の手を軽く引く。

「どうしたの、ナツちゃん？」

振り返ると、ナツちゃんが少し渋い顔で眉をしかめながら立ち止まっており、僕にランドセルを見せている。

「おにいちゃん、これかしてあげる」

ランドセルを僕に持たせると、ナツちゃんの顔に笑顔が戻ったんだ。ナツちゃんには少し重かったんだね。

ナツちゃんは嬉しそうに繋いだ手を振り回し、すぐ近くを歩いているマークをチラリと一目盗み見ると、今度は僕に顔を向ける。

「マークくんは、オトモダチなの？」

そうか、ナツちゃんも色々と気になるお年頃という者になってしま

ったのか、ここはお兄ちゃんとしてナツちゃんの疑問にしつかり答えてあげないと、下手な事言って後でナツちゃんに恥ずかしい思いをさせてしまうかもしれない。

「違うよ、マークは僕の専属ボディガードなんだよ」

「家庭教師だよ、マナブ君」

どうしたって言うんだよマーク！

此処まで来て僕の事を裏切るなんて、信じてたのに。とても正気だなんて思えないよ。

たぶんマークは催眠術とか怪しいお薬とか、そうゆう物で洗脳されてしまったに違いない。

くそっ！

あのコンビニ店員だな、マークをこんなにしてしまったのは、絶対文句を言ってる。

僕の悔しい気持ちを握り拳を作る事で表し、虫歯一つ無い健康的な白い奥歯を、鮮やかなピンク色の歯茎をも剥き出しにしながらギシギシと噛み締めコンビニに引き返そうとしたが、ふとこのままではナツちゃんにまで危険が及ぶ可能性に気付き、この悔しい気持ちを胸の奥とズボンのポケットの中にしまい込む事にした。

「ごめんよマーク」

あんなにお世話になったのに申し訳ないよ、僕には何も出来ないんだ。

「気にする事はないよ、でも、次は無いよ」

マークの優しさに触れて、僕の胸に熱い物を感じたよ。

お返しにと、ヨゴレてしまった大人ではとても直視出来ない程の眩い笑顔で頷いて見せた。

「おにいちゃん、あれなあにい」

ナツちゃんが指差した先を見ると、其処には【トミ子の部屋】というボロボロの看板を掲げた古ぼけた駄菓子屋が建っていた。

「ああ、アレはねナツちゃん、三途の川って言って、あの店の奥にいる老婆に挨拶を返すと、あの世に引きずり込まれてしまうと言う未恐ろしい場所なんだよ」

僕はナツちゃんを迎えに行く途中でマークに教えてもらった事を自慢顔で話したんだ。

僕もマークに教えてもらわなかったら危うく老婆に挨拶する所だったよ。

僕が今日の出来事を回想してる間にナツちゃんが駄菓子屋に向かって駆けていたんだ。

僕は慌ててナツちゃんを追い、駄菓子屋の中に入り込んでしまったんだよ。

そりゃあ必死に走って行ったよ、なんてったってナツちゃんの命に関わる事だからね。まあ、お兄ちゃんとしてって言うよりも人とし

て当たり前だよね。僕って偉いよ。

駄菓子屋に入り込んだ僕は、既にナツちゃんに話しかけ、うすら寒い笑を浮かべる老婆を見てしまい、身震いして絶望した。

なんてこった！

僕には此処で見ている事しか出来ないのか。

その時、マークが串に刺さった三本の酢だこを手を持ち、僕の横を通り老婆に向かって歩きだした。

酸っぱい香りが僕の眼球と鼻孔の奥深くに染み渡るよ。

そうか、分かったよマーク！

酢だこの匂いが老婆の弱点なんだね。そうと分かれば、怖くないよ。

僕は、老婆が酢だこの匂いに怯んだ隙にナツちゃんを救出する事にした。

マークが老婆に話しかける瞬間を見計らい、ナツちゃんの手を取り急いで外に脱出し、電柱の影に身を潜める。

神様にマークの無事とかを、色々とお祈りしといたよ。

「おにいちちゃん、どうしたの？」

何を呑気な事を、もう少しで初なねんねがララバイ、ヨロシクしちゃう所だったんだよ。

「駄目だよナツちゃん。知らない人に声を掛けられたら、マネキンとかロウ人形の振りをするんだよ」

僕がナツちゃんに人生の厳しさを説明していると、マークが店から脱出し、此方の方へ歩いて来た。

「マナブ君、万引きはいけないよ」

何を言ってるんだよ！

マークはナツちゃんの命よりも世間体の方が大事だって言うのかよ。

「僕、万引きなんてしてないよ！」

「そうなのか、トミばあが驚いてたから、そうだと思ったよ」

僕が膨れていると、マークが酔だこを、僕とナツちゃんに一本づつくれたんだ。

「酔だこを上げるから許しておくれよ、ちょっとした冗談だったんだよ」

僕は酔だこを食べながら、笑って見せたんだ。冗談なら仕方ないよ、それにしても酔だこって美味しいね。

僕は歩きながら談笑していたんだけど、ナツちゃんの様子が少し可笑しいんだ。

僕達が酔だこを美味しそうに食べてるのを見ては、酔だこの匂いを嗅ぎ、酔だこの匂いを嗅いで、顔を歪ませ僕とマークを交互に見

てるんだ。

ナツちゃんが一口酢だこをかじり、舌を出しながら僕を見上げ、持っている酢だこを差し出す。

「おにいちゃん、これあげる」

ナツちゃんが僕に酢だこをくれたんだよ、こんなにも良い娘に育ってくれて、僕はとっても鼻が高いよ。

僕はお礼を言いながら、ナツちゃんの頭を優しく撫でて上げたんだ。

「ナツちゃん、止まるんだ」

僕は、足を止めて百メートルはある、色が変わったアスファルトを指差し説明して上げた。

「ナツちゃん、此処は子供が足を付けると身長が半分に縮んでしまうと言う、怪しげな所なんだよ」

僕はマークにおんぶしてもらいながら説明されたんだけど、危うくナツちゃんよりも、おチビさんになってしまう所だったんだ、お兄ちゃんとしての威厳を守れて良かったよ、ありがとうマーク。

「おにいちゃん、アタシ、あさにここ、とおったよ」

なんだって！

どうゆう事だ、ナツちゃんが始めからおチビさんだから大丈夫なのか？

ナツちゃんの時だけ偶然、効果が無くなっていたのか？
それとも別の何かがあるのか？

そうか！

だから母さんは、ナツちゃんにランドセルを渡したのか、大人のアイテムだってナツちゃんが言ってたもんね。

イヤ待て！

ランドセルは子供の物だろ、でもナツちゃんは大丈夫だったみたいだし、試してみようかな。

やっぱり駄目だ、危険過ぎるよ、もし縮んじやたら、園児の妹よりも小さい、小学生のお兄ちゃんとして、ご近所さんに有名になってしまう、そんな事になったらもう母さんが小学校に通わせてくれるかもしれない。

そんなの絶対に嫌だよ！

僕は一体どうしたらいいんだ。

教えて！マクギブソン

続く

ボブとジョージとマクギブソン！

僕達は今公園に来ています。ナツちゃんのお迎えの帰りに、家の近くに在る、公園に寄り道してるんだ。

此処は、緑が生い茂り過ぎてしまっているせいで余り広く感じないんだ。其でいて遊具の一つも無く木製の確りした屋根付きベンチしか設置されていないんだよ。

でも、風通しが良く真夏でも涼しげで案外快適な公園なんだって。

僕には雑木林にしか見えないんだけどね。

此処にはとっても毛むくじやらの黒い怪物がダンボールに巣くって居るらしいんだ。マークの話によると、此処の主である毛むくじやらと目が合ってしまったら、上納品を献上して差し上げないと噛み付かれたり追い回されたり舐め回されたりしちゃうみたいなんだ。

僕達が座っているベンチの後ろから、ガサゴソと言う何やら不穏な空気を感じてしまい、僕は頑なに下を向き黙りを決め込んでいたんだけど、ナツちゃんが、後ろに居るであろう怪物くんに気付いてしまい、ベンチから飛び降り、そちらに向かってレッツらグオオウ！だっ！

「ニャぁンちゃぁん♪」

僕は捕らえられてしまったであろう、ナツちゃんを救い出す為に覚悟を決め、マークに助けを求める。

「マナブ君、自分の事は自分でするんだ」

腕を組んで、バードウォッチングに勤しんでいたマークの邪魔をするのは、少し気が引けたので、僕、自らが重い腰を浮かべ、ベンチの上に立つ事にした。

振り返ると其処には、この夏の季節には少し辛そうな程に黒々とした短い毛を身に包み、其処だけ色の違う白いお髭を光らせ、獲物を射抜くその碧のつぶらな瞳を見開き、毛に隠された柔らかな筋肉と関節の間にある軟骨を擦り減らしてしまふ事をも物ともせず、スラリと細長くそびえるその尻尾を昔懐かしい踊る花のオモチャの用に動かしながら、そいつらはナツちゃんに、にじり寄っていたんだよ。

しまった！二匹もいたのか。

「マーク！煮干を頂戴。早くしないとナツちゃんがっ！」

「分かったよマナブ君」

のんびりしていたマークを、急かす用に揺すって上げたら、マークの顔が険しくなってしまうたんだ。

「マナブっ！大変だっ！煮干が無いよっ！ないんだよっ！」

駄目だっ！あのマークが取り乱してしまっている、取り敢えずマークを落ち着かせなければ。

「馬鹿野郎っ！あんた一体何年生きて来たんだよっ！そんな事も満足に出来ないなんて、マークなんてもうクビだよっ！」

僕の機転でマークは、なんとか自我を留めておく事が出来たんだ。

「マナブなんか私をクビにする権限なんて、ないんだよ」

マークは落ち着き払った口調で僕を安心させてくれたんだよ。

「まあ、仕方ないから家に帰って煮干を取って来て上げるよ、それまでボブとジョージの相手でもしてておくれ」

ボブとジョージって言うのは、あの毛むくじやらの事だね。

「わかったよ」

時間稼ぎは僕に任せて、マークは家に戻ってしまったんだ。二匹を相手にナツちゃんを守り通す事なんて、僕には難しいよ。頑張れ、僕っ！

いつの間にやらボブだかジョージだか分からないけど、一匹がナツちゃんに擦り寄っていたんだ。二匹ともそっくりだから僕には区別出来ないよ。

「ニャア」

慌ててナツちゃんに近寄ろうとしたんだけど、もう一匹の方が僕の

前に座り込んで通せんぼして来たんだ。

僕が動けない間に、ナツちゃんが毛むくじゃらの前にしゃがみ込み、僕のしている前で顎の辺りを無理矢理、御奉仕させられていたんだ。それだけでは飽きたらず、ナツちゃんの幼気なおててをペロペロと舐め回していやがったんだよ。

なんて破廉恥なっ！

「ニャあんちゃあん、ざらざら、するようく」

子供相手にそんな事っ！御天道様が黙っていても、御巡りさんとかPTAのマダム達が黙っちゃあいないんだよっ！

「ナツちゃん、くそっ！」

僕が自分の無力さに打ち拉がれて居ると、いつの間にやらもう一匹がナツちゃんのスカートの下に顔を潜り込ませようとしてたんだよ。

ジョージっ、貴様もかっ！

僕は通せんぼが無くなった事に気付いて、慌ててナツちゃんを抱え込み、急いでその場から離れていた。その時にナツちゃんがジョージの背後から、脇の下を両手で鷲掴みして捕獲していたんだよ。御手柄だねナツちゃん。

少し離れた場所で僕はジョージの取り調べと裁判を並行して執り行う事にしたんだ。

「ジョージ君、君は何故に幼気な少女を辱める様な事をしたのかね？」

「ニャア」

「死刑」

ジョージは僕に腹を見せ万歳する形で捕らえれており、ナツちゃんに肉球を悪戯されながら、チラチラと鋭い爪を覗かせて僕の事を脅していたんだ。

「済まない、僕とした事が、少し早計だったみたいだ」

全てに於いて公平を自負していたこの僕が、危うく身内鼯肩してしまふ所だったよ。

「ジョージ君、此方には目撃者も居るんだよ」

「……」

「今度は黙るか？」

沈黙を守るジョージに、ナツちゃんが前足を左右に振らせる。

「僕が見てたって言ってるんだよっ！」

今度は両方の前足をレバーに見立てて、前後に激しく動かす。

「ナツちゃん、それは可哀想だよ」

僕は、ジョージの弁護人として、彼への厳罰は、不当な物であると主張してあげた。

「うゝ」

検察官の異議申し立てにも軽く頷いてあげる。

「……まあ、良いだろう。検察官、証拠を提出したまえ」

僕の言葉を聞き、ナツちゃんがジョージを離し、代わりにボブを連れて来た。

「ニヤあー」

僕はボブを手に取り、ボブの体毛を摘み、じつくりと調べ上げ、開けさせた口の中を確認する為、手の中に入れようとした。だけどボブの鋭い牙が目に残まって、そう為る事を諦めるしかなかったんだ。

「宜しい」

ボブを解放し、ジョージをまた連れて来てもらう。

「おにいちちゃん、アタシ、つかれたあゝ」

「ごめんよ、もう少しだから、我慢してよ」

被害者の女性も鎮痛な面持ちで裁判の行方を見守っている。

「……それでは裁決を言い渡す……」

僕は、この場の重い空気を、さらに重くし、ジョージを見下ろしながら、鼻で笑い勝ち誇る。

「……被告人、ジョージを有罪とし、僕のルール第三条に基づき、改造手術の刑に処すっ！以上っ！コレにて閉廷っ！」

僕は、ジョージを不死身のサイボーグに改造する為に、ジョージをベンチの上に運んだ。

「ニャア」

「フツ、フツ、フツ、ジョージ君、幾等、鳴き叫んだって助けは来ないんだよ」

ジョージの悲痛な叫びを受け流し、彼の肉球を軽くプッシュした。

「待てえいっ！」

煮干の入った袋を手を持っている、マークの方に向き直る。

「誰だっ」

此処で前口上が始まるのかと思いきや、ボブとジョージの名前が、友人の名前を勝手に付けた物だと言う事を説明された。

「そいつは、ボブだよ。マナブ君」

「そんなの知らないよっ！」

既に熱くなってしまった僕には、もうボブでもジョージでも問題になら無くなっていた。

「もう僕は誰にも止められやしないよ。あと少してコイツの改造が終了するんだ」

僕はジョージの柔らかそうな鼻の頭に人差し指を置き、その場に佇むマークの事を嘲笑う。

「ソイツをジョージにしてもいいからっ！」

僕はマークに説き伏され、改心する事にしたんだ。

「スイッチっ！オンっ！」

マークから受け取った煮干を、ボブに与えていたナツちゃんが、ボブを引き連れ、僕の裾を引っ張り、何処か期待した眼で僕を見る。

「おにちゃん。このこ、かっってもいいイ？」

ナツちゃんに捕獲された、少しぐったりしたボブが僕に救いを求めている。

「駄目だよナツちゃん。彼には彼の事情があるんだ」

「やだあゝ。かうもゝん」

ナツちゃんがボブを枕でも抱く様にギュッと抱きしめ、我が家に向かってペンギンみたいにゆっくり走り行ってしまったんだ。

「マナブ君。どうしよう？」

そんなの僕が聞きたいよっ！

「煮干を持って行かれてしまったんだよ」

なんだってっ！煮干が無くなったら、ジョージがお腹を空かせてしまうじゃないかっ！

「それは、残念だったね」

僕達は急いで、公園の入り口付近で休んで居たナツちゃんを捕まえたんだ。

「ナツちゃん、ボブは今日、予定があるみたいなんだ。だから離してあげてよ」

僕はボブよりもジョージの方が良いと思うよ。

「はぁーい」

僕達はボブを離してあげ、そのまま家に帰る事にした。

「ねえ、マーク。ボブとジョージって、何者なの？」

「私には、分からないよ……」

教えて！マクギブソン

続く

親子！

僕達は家に帰って来たんだけど、マークはバイトがあるそうなので途中で別れてしまったんだ。少し寂しかったけど、そういう事なら仕方ないよね。

「じゃあ家庭教師ってなんだよ！」

——僕は今、少し遅めの夕食を家族揃って食べていたんだけど、母さんに今日の出来事を事細かく少し大袈裟に話してあげたんだ。

「——って言う訳で、僕がナツちゃんを助けて、侵略者から地球の滅亡を救ったんだ」

「あら、良くやったわね。それもこれもマクギブソン先生のお陰ね。やっぱり雇って良かったわっ」

何を言ってるんだよっ！ 全て僕の実力だよ！

「あのさ、母さん。僕、もう一人前になったから、マークなんて要らないと思うんだけど……」

だから学校行かしてよ。

「駄目よ！ マナブはまだまだ半人前なのよ。地球を救った位で調子こくんじゃありません！」

そんなの主人公なら当たり前なのよ」

ええっ！ 主人公ってそんな事をしないといけないの？ じゃあ僕、脇

役がいいや。

「母さんは僕をどうしたいんだよ！」

あぁと、僕は此処でテーブルを叩いたりしないからね。そんな事したら二人が驚いちゃうよ。

「あなたは立派な政治家に成るのよ。そして私とナツちゃんを養うの」

別に政治家じゃなくたって養えるよ。

「嫌だよ！僕は香港に行つて、アクションスターに成るんだ！」

「あなたみたいな貧弱なボディーでは無理よ。諦めなさい」

なんて事言うんだよ！この僕の輝く肋骨が見えないの？

「まったく、何の為に今まであなたに、先行投資したと思ってるの？」

「普通に育ててよ。大体母さんは、どうしちゃったんだよ。今までこんな事言わなかったじゃないか……」

僕は、母さんから渡された茶碗にご飯を装いながら、一生懸命に冷奴を箸で滅茶苦茶にしているナツちゃんを見ていた。

「マナブ。あなたには今まで内緒にしていたけど、母さんは後三年位で、ポックリ逝ってしまうかも知れないの……」

そんな事よりも、僕はナツちゃんのお行儀の方が気になって仕様が
ないんだよ。

「なんだってえ！母さんは、病気なの？」

母さんが申し訳なさ装に下を向いてるんだ。

——って言うか、あんたの真似しちゃってるんだよ！ナツちゃんは
っ！

これだからお嬢様育ちは嫌なんだよ。

「病気と言うよりは、運命よ……美人薄命って言うでしょ？」

大変だ！もしその話が本当なら世の過半数の人間がポックリ逝って
しまう事になってしまう。

「母さん、自分ではカワイイ系だと思ってたんだけど、取引先の田
中さんによると美人だったみたいなのよ」

それは、大人の会話、社交辞令と言うものではないか！
心配して損しちゃったよ。でも取り敢えず母さんを安心させてあげ
ないと。

「それは、昔の話だよ。今は医療技術が発達してるから、平均寿命
が上がったんだ。僕の見立てによると、母さんは八十歳は軽く超え
ると思うよ」

「あら、そうだったの？母さんとした事がとんだウツカリさんだっ
たわ」

ウツカリさんじゃあ、仕方がないよね。

「それなら、もう家庭教師は要らないでしょ？」

「駄目よ。あなたは政治家に成るのよ」

「どうして！」

なんで、まだ掻き混ぜてるんだよ！

「その方が母さんの鼻が高いと思うからよ。それにもう皆に自慢しちゃったのよ。マナブは母さんを嘔吐にしたいの？」

もう既に嘔吐じゃないか。

「ああ、マナブ。私もうお腹一杯だから、この冷奴をあなたにあげるわ」

「アタシのもあげるう」

なんて気立てのいい人達なんだ。

「僕も要らないよ。お腹一杯なら残せば良いじゃないか」

「マナブ。あなた何て事を言うんです。そんな事したら、大豆を作ってる御百姓さんに申し訳が立たないでしょ！
母さんに土下座なさい！」

僕は掻き回された豆腐を作ってる人達にも申し訳ないと思うよ。

「ごめんなさい」

僕はこの冷奴をどう処理すればいいんだ？

教えて！マクギブソン

続く

僕とマーク!

僕は今、マークの家に来て居るんだ。実を言うと、家出と言うものをしてるんだけど、理由は聞かないでね。

マークの家って実はお向かいさんだったんだ。築二百年のとっても立派なお屋敷で、中は何だか迷路みたいに複雑な作りをしてるんだ。マークって名家の跡取り息子なんだってさ。
笑っちゃうよね?

マークの部屋の前に来るまでに、二回もお手伝いさんに道を訪ねたんだ。マークって自分の家で迷うんだよ。
笑っちゃうよね?

此処まで、着物を着たお手伝いさんしか見かけてないんだけど、『家族は何処に居るの?』って聞いたたら、『あの世』だってさ。
笑っちゃうよね?

……マークの部屋の中ってとっても狭いんだ。元々は広かったみたいなんだけど、ダンボール箱の山積みが敷き詰められてて、他にはベッドしか見えないんだよ。

ダンボールの中身には、イヤらしい本とかが一杯入ってるんだ。マークは硬派だから、こういう物が世に出回ってるのが許せないんだよ、だから自分で管理してるんだって。ほんと、漢だね!僕、尊敬しちゃうよ。

「マークも、僕の事を政治家にしたいの?」

「マナブは、私の後継者にするんだよ」

マークは『奥さんにしたい位だ』とか言って、イヤらしい本の内容をチェックしながら、僕に答えてくれたんだ。管理するにしても処分するにしても中身を確認しない事には出来ないんだってさ。大変だね。

「マークって、政治家だったの？」

「違う！ マナブには、我がペシミズム学園の応援団長になってもらう！」

「ペシミズム学園って言ったら、僕が行く学校じゃないかあ！マークって小学生だったの？」

僕は驚きの余り、手伝いの為にチェックしていた本を破り捨てた。

「馬鹿野郎！ 私のコレクションに何するんだ！」

……いや違う、私は高校生だと言っただろ！

我がペシミズム学園は、小、中、高、更に大学までの一貫教育なんだ」

凄い！僕、そんな所に行くんだね。日本にそんな学校があったなんて知らなかったよ。

「……まあ、金に物を言わせて作ったんだよ。後、大学は、私が卒業するのと同時に出来るんだよ。だから残念な事にまだ女子大生が居ないんだ……」

悲しそうに俯いて居るマークが可哀想だったから、僕はマークの肩に手を置き慰めてあげる事にしたんだ。

「良かったね」

僕は、マークに笑顔までサービスしてあげたのに、機嫌を直してくれないんだよ。本当に困っちゃうよ。僕はこの気不味い空気を何とかする為に、マークに色々質問する事にしたんだ。場の空気を考えるなんて、僕って大人だね！

「……ねえ、なんで僕が後継者なの？

僕、小学生なんだよ」

「……マナブ君のお母さんが余りにも綺麗だったから、つい出来心で……本当は家庭教師なんてしたくなかったんだっ！

……でも断れなかったんだよ」

なんだって！

心底、僕に惚れ込んだからじゃあないのかい？

あんなにも僕に懐いてたじゃないか、それも嘘だって言うのかよっ！

僕はショックの余り、マークの参考資料を三冊程、破り捨ててあげた。

「あっ！それはお気に入りだぞ、やめるんだ！

マナブ君落ち着くんだ。……落ち着いて話し合おう」

「僕はアクションスターになるんだよっ！」

僕の真剣な決意と眼差しに、マークは感動して涙すら浮かべていた。

「君なら、なれるさ。だから、もう私のコレクションを解放してく

れ……」

「じゃあ早速、特訓開始だ！アチョー！」

僕は、マークの宝物に中国四千年の歴史を、蝶の様に舞いながら蜂の様に叩き込んだ。

あつ、これってボクシングだっけ？

「嗚呼、我が青春……」

少しか可哀想になって来たから、僕のジョークで和ませてあげる事にしたよ。

「……ごめんよ……マークは誰とも結婚出来ないよって言う、ちょっとしたジョークだったんだよ」

「なんで？意味は？」

「……もう読めないよ。……もうよめないよ。
……もう嫁無いよ……」

マークは両手を上げて僕に語り掛ける。

「分かったよ。マナブには適わないよ。私が責任を持って立派な応援団長にしてみせるよ」

えっ！僕、応援団長にならなきゃいけないの？

教えて！マクギブソン

続く

スナイパー!

心地良い朝日を一身に浴びて、僕はこの国一番のプレイボーイになる為に今、街に繰り出しているんだ。

通勤、通学途中の人達が僕達に熱い視線を投げ掛けて来るんだ。

マークったら、いつもと格好が違うんだよ。いつもどおり学ランは着てるんだけど、お髭を全部、剃ってしまったんだ。しかも、凄く濃い眉毛を油性マジックで書いて眉間に皺まで寄せてしまっているんだよ。それから特注で、アーマライトをベースにして作らせた水鉄砲まで持ち歩いてるんだよ。その水鉄砲を作るのに四時間掛かったんだけど、ちゃんと『デイズ、ありがとう……』とか言ってたから、大丈夫だよな。

「私の名は、マーク・東郷だ……」

マークが水鉄砲を構えて、渋く決めてるんだ。

なんだか、凄腕のスナイパーみたいで、とってもカッコイイよ! どうやらマークは、僕の家で読んでた漫画が大層、御気に召してたみたいなんだ。

「分かったよ、ミスター・ゴル……」

ミスター・マーク・東郷……」

獲物を見つけたマークが、無表情のまま人差し指を口に含み、その指で風を調べる。

「風速一メートルって所か……」

風を読んだマークは、地べたに這い蹲って、息を潜めながらスコップを覗き見て狙いを定めてるんだ。

えっ、あの人十メートル位しか離れて無いよ？

そうか、流石に超A級スナイパーともなると、あの距離でも風の計算に余念が無いんだね！

「うわっ!？」

マークによって股間を狙撃された道行くサラリーマンが、驚きの余りに細く甲高い悲鳴を上げる。

まるでお漏らししてしまった様に見えるサラリーマンが、股間を両手で隠しながら、がに股で此方に近づいて来たんだ。

顔を完熟トマトみたいに真っ赤にしながら怒ってるのに、とっても情けなく見えるよね！

あれって、恥ずかしがってるのかな？

「なんて事してくれたんだっ！

私は今から仕事があるん、だ、ぞ……」

「……」

立ち上がったマークに、無言の圧力を掛けられたサラリーマンは、忽ち顔を青白くさせてしまったんだ。

何処か具合でも悪かったのかな？

「す、すみませんでした！

どうやら私の勘違いだったみたいで、あははっ……それでは失礼！」

サラリーマンは股間を抑えながら、何処かに走って行ってしまった

んだ。

なるほど、トイレを我慢してたからあんな顔してたのかっ！

それからマークは、十一人もの、サラリーマンやら学生さんやらの股間を撃ち抜いたんだ。此処まで一回も玉を外してないんだよ。狙った獲物は逃さないなんて、流石プロだね。

「！」

マークがまた獲物を見つけて水鉄砲を構えたんだ。だけど、マークの右手がブルブルと小刻みに震え出してしまったんだよ。

まさか！　ギランバレー症候群と言うやつなのか？

「眩しくて見えない……」

マークが薄目で見ている方を、僕も見ると、頭から神々しい光を放ち、巧い具合に顔だけ見えない、マークと同じ学ランを着た男が此方に歩いて来てたんだよ。

「マーク、大丈夫なの……？」

僕が、マークを注意深く観察してみたら、マークは声を殺して笑ってたんだ。

冷静沈着って言うキャラで行くんじゃなかったのかよっ！

「マークじゃないか！」

近くに来たマークの知り合いらしき人は、近くに来ても、何となくしか見られないんだ。僕が分かった事は、異様に大きな鼻をしてる

って事だけだよ。

「私を失明させる気か！
このデカっ鼻っ！」

マークは有無を言わず、ワシ鼻の男を殴り飛ばしたんだ。
顎に良いのを貰い気絶してしまったワシ鼻の男の股間を狙撃した僕
達は、直ぐに走ってその場を後にしたよ。

「マーク。あの人誰だったの？」

マークは走りながら、僕に渋い顔を向けて説明してくれた。

「奴の名はジョージ……
通称、ワシ鼻のジョージだ……」

あの人ジョージなんだ、ちょっとだけガツカリしたよ。

僕達は走るのを止めて、住宅街を歩いてたんだけど、その時に後ろ
から声を掛けられたんだ。

「ちょっと、君……」

肩に手を置かれたマークは、有無を言わず後ろに居た警察官を殴
り飛ばしたんだ。一人はそれで倒したんだけど、実はもう一人居て、
その人が拳銃を抜こうとして来たんだよ。それよりも速くマークが、
水鉄砲を構えたんだけどね。

「貴様！ 本官達に向かって、何をするんだ！」

「プロの背後に簡単に忍び寄らない事だな……」

えっ！　まだやってたの？

マークに水鉄砲を向けられた警察官は、両手を上げながらも、マークの隙を伺っていた。

「銃を地面に置いてもらおうか……
話しはそれからだ……」

「貴様！　そんな事したら、本官の責任能力が問われちゃうんだぞ！
話しだけならこのままで良いじゃないか！」

マークは無表情のまま、相手を見つめる。しばらくこの膠着状態が続いたんだけど、もう一人の警察官が顎を抑えながら、何とか立ち上がったんだよ。

「ふっ、ふっ、ふっ、これで形勢逆転だな！」

マークに水鉄砲を向けられてる方の警察官がマークの事を鼻で笑うんだよ。でも、もう一人の警察官も銃に手をやろうとしたその時に、マークが身を低くして横に飛びながら、二人の股間を瞬時に撃ち抜いたんだ。

「「うっ！」」

二人が股間を抑えて怯んだ隙に、マークは僕を置いて、姿が見えない遠い所まで行ってしまったんだ。

「クソっ！　なんだったんだ、あいつは……」

其処の少年、君はあの男の知り合いなのかね？」

「いえ、まったく知らない人です」

僕は落ち着いた口調でハッキリと言って上げたんだけど、まだ僕の事を疑わし装に見てるんだよ。

「じゃあ何で一緒に居たんだ？」

本官は不審な二人組がこの近辺を徘徊していると通報を受けたんだが？」

「道を訪ねられたので、案内してあげただけです。困った人が居たら助けてあげると、母にいつも言われていましたので。」

……ああっ！ 決して、誘拐され装になってた訳ではありませんよ！ ホントですよ！」

僕は、マークのフォローをしてあげないと悪い様な気がしたから、一応マークはそうゆう事をする人じゃないと、言っとく事にしたんだ。

「なんだって!？」

君は、あの男に誘拐され装になってたのか？

あの男に脅されてそう言う様に言われたのかい？

そうなんだろう？」

僕は違うって言ってるのに、僕の肩を掴んで揺すってくるんだよ。もう嫌だ！

助けてよマーク！

「助けて……」

「分かった！」

君はおじさん達が守ってあげるから大丈夫だ！
安心するんだよ」

何を言ってるんだよっ！

止めてよっ！

僕に抱き付かないでよ！

マークっ！ 母さん！ ナツちゃん！ 僕を助けてっ！
もう離れてよっ！

僕はもう家に帰るんだよっ！

「良し！ 直ぐに野郎を追うぞ！」

坊主、今から家まで送ってあげるからな！」

「あっ！ 自分で帰れるんで大丈夫です。

もう僕の事は放っというて下さい。

それでは、さよなら」

僕は急いでその場から逃げ出したよ。マークも助けてくれなかったし、僕は少し不機嫌だよ。

その後、僕は何とか家に帰る事が出来たんだけど、玄関を開けたらいきなりナツちゃんが、涙と鼻水で顔をくしゃくしゃにして僕にしがみ付いて来たんだ。

うっ、僕のシャツが……

あっ、違った、誰だ！ 僕のカワイイ妹を泣かせた奴は！ 僕が、
やっつけてやる！

「おいしいちゃん、おいえあないでえおお！
どおにおいっちゃあだあおお！

」

なんて言ってるんだ……

教えて！マクギブソン

続く

スナイパー！（後書き）

アーマライトM-16変形銃／超A級スナイパーが主に使用していた物です。

ギランバレー症候群／筋肉を動かす運動神経に障害がおきて、四肢に力が入らなくなってしまう病気だった筈です？

トルコ巻／これの特殊ブレンドをあの人々が吸っていました。

ジョージは友達！

僕は今、マークと一緒に病院に来て居るんだ。

……実は、昨日の夜中にマークから電話があったんだけど、どうやらジョージが入院してしまったみたいなんだ。

マークの話に因ると、ジョージは謎のスナイパーに襲撃されたんだってさ。

本当に世知辛い世の中だね！ 恐ろしくって、一人でコンビニにも行けないよ。

——という訳で、ジョージのお見舞いに来て居るんだけど、ジョージが入院してる個室のベッドの上に、ミイラ男が寝転がって居るんだよ。

思いの外、重傷だったんだね？

「ねえ、マーク。あの人って本当にジョージなの？」

僕は、ミイラ男に話を聞かれない様に、マークに耳打ちした。

「勿論、本物だよ。

ジョージは私の友人と言う事で、取り分け手厚く看護して貰って居るのだよ」

僕は、尊敬の眼差しをマークに送ったよ。

マークって友達思いなんだねっ！ 僕、見直しちゃったよ！

「ふーん、ジョージって見るからに瀕死なんだけど、助かるの？」

「もし、ジョージが助からなかったら、この病院を潰して見せるよ……」

マークは哀愁を漂わせながら、ジョージを労る様に見つめて居たんだ。

「誰だ！ 其処に居るのは！ ……マークか？ もう一人は誰だ？ 知らない声の様な気がするけど……」

ジョージが室内を見渡しながら、急に話し掛けて来たんだ。

ジョージは全身、包帯でぐるぐる巻きにされてるから、起きてるのか、寝てるのか、分かんなかったよ。紛らわしいよねえ？

僕は、どうして良いのか分からず、マークに助けを求めたんだけど、微笑んでるマークにジョージの方向へと背中を押されてしまったんだ。

僕の事ちゃんと紹介してよ！ 何となく気不味いじゃないか！

「あ、あの、僕はマナブと言う者です」

僕が声を掛けた途端に、ジョージがそれまで振り回してた頭を止め、僕の方に向き直ったんだ。

ジョージは目が見えなくなるほど包帯を巻かれてるみたいなんだ。手も指の隙間が出来ない位に分厚く巻かれてるから、自分で包帯を外せる程、動かせないんだね。

「君が、マナブ君なのか？ 話はマークから聞いているよ。俺に弟子入りしたいんだろ？ これからヨロシクっ！」

ジョージはそう言うと、僕の隣に居るマークに手を差し出したんだ。可哀想に、頭を強く打ち付けたんだね。そのせいで幻聴が聞こえるみたいなんだ。

いやつ、妄想癖かな？

「違います。僕はマークの後継者です。特に、あなたから教わる事は無いと思います」

「なんだってええええ！」

マークに、差し出した手を払われたジョージは、ひっくり返されたカエルみたいな格好で仰向けになってるんだ。

「……ジョージ、悪いけど、マナブ君の方がジョージよりも格が上なんだよ」

「な、な、なんだってええええええ！」

ジョージは一度起き上がって、突き出した左手を震わせた後に、またさつきと同じポーズをとるんだ。

「……あの、見た目よりも元気装なんですけど、怪我は大丈夫なんですか？」

「……いや、目が覚めたら俺は、病院に居たんだ。」

医者は何も言ってくれないし……

俺はもう長くはないだろう……」

俯き、鼻を鳴らして居たジョージに、じゃあ大人しくしてなよ、と言ふ言葉を掛けて上げる事は出来なかつたよ。

そんなに酷い怪我なら、動ける訳無いだろっ！

「ジョージ……」

「お前の大事な鼻の、頭の皮が擦り剥けてしまったんだ……大事をとって、向こう三年間は入院して貰う事にしたよ」

「な、な、な、なんだってええええええ！」

ジョージが余りにも煩いから、若くて綺麗な看護婦さんが注意しに来てしまったんだ。

「あなた達！ 野次君は怪我人なのよ、それと他の患者さんも居るんだから、少し静かにして下さい」

野次って、ジョージの事かなあ？

「あ、あの、煩くしてるのはジョージだけですよ」

看護婦さんは首を傾げ、少し不思議そうな顔をしてただけ、作った笑顔を浮かべて僕の頭を撫でて来たんだ。

「あらゝ、僕は、お兄さんのお見舞いに来たのかなあ？
えらいねえゝ」

「い、いえ、違います。ジョージは僕の部下と言うか、手下と言うか、そんな所です」

僕に構わないでよ！
そんな事されたら、僕がマークに睨まれちゃうんだよ！

「あ、あの、僕の事は良いですから、ジョージの包帯でも取り替えてあげて下さい。

何かあのままだと居辛いみたいなんで」

「あらゝ、良く気が付く優しい子なのねえ。
えらいねえゝ」

看護婦さんは僕を放してくれるどころか、抱き着いて来たんだ。
そのせいでマークは及び、ジョージまで怒りだしたんだ。

マークは青筋を立ててたから直ぐに分かったんだけど、ジョージは両手を使って自分の感情を表現してるんだ。

それだけでは飽きたらず、プンプンって小声で言ってるんだよ。
気付いてるから止めてよそれ。気味が悪いよ。

「それじゃあ、仕様がなから包帯を替えましょうか……野次君？」

「ええ、是非ともお願いします」

看護婦さんに恥ずかしいポーズを見られたんだけど、ジョージは何事も無かった様に対応したんだ。

結構、図太いね！

唯、見られた事に気付いてないだけかも知れないけどね。

「……」

ジョージの包帯を替えてる看護婦さんに不手際がないか、マークが険しい顔付きで見張ってるんだ。

マークの視線が、看護婦さんの肉付きの良いお尻を捕えて離さないんだよ。

こんなに心配されてるなんてジョージって幸せ者だね！

包帯を巻き終えた看護婦さんが、軽く挨拶してこの部屋を出て行くとしたんだけど、マークがそれを止めたんだ。

「看護婦さん！ ジョージの体温とか、血圧とか、計って行かないのですか！？」

「そ、それは、朝に済ませましたけど？
どうかなさいましたか？」

マークはジョージの為に、看護婦さんに縋り付いて頼み込んだんだ。少しだけ妬けちゃったよ。

「点滴でも、献血でも何でも良いですから！
この際、ジョージをどうなさっても構いませんから！ 後生だから！
後生ですからっ！ お願いしますっ！」

マークは土下座までしたんだけど看護婦さんは、必要ありませんって言って怒りながら出て行ってしまったんだ。

「マナブ！ もう帰るぞ！ 私はとっても不愉快だ！」

僕達は、さっきよりも嚴重に包帯を巻かれたジョージに挨拶して帰る事にしたんだ。

息は出来てるみたいだから大丈夫だよな？

部屋を出た僕は後ろを振り向いた。

扉のプレートには……

【259】とマジックで書かれてたんだ。

そう言えば、マークがお見舞いに菊の花を持って来てたんだけど、

マークって本当にジョージの友達なの？

続く

あつ、そう言えば、ジョージの本名って『のつぎ ようじ』って言うんだってさ！

それじゃ、さよならっ！

学園天国？ 前編

今日は一日中、家で寛いであろうと思ったんだけど、僕はマークが学校に行ってる所をまだ見た事が無いんだよ。

僕の為にマークが留年してしまっただけは忍びないので、学校に行く様に勧めたんだけど、マークは、お昼寝してしまっただけ。

仕様がなから、僕がマークの替わりに、マークとして授業を受けるに行く事にしたんだ。

いつもお世話になってるから、これ位、当然だよ。僕って本当に義理堅いよ。

マークから貰った僕専用の長い学ランを着込み、なんとか学校に来る事は出来たんだけど、小等部の校舎が僕を誘惑するんだ。

くそっ！　いつか絶対通ってやるからな！

僕は、後ろ髪を引かれたけど、重い足を引き摺り、匍匐前進でマークのクラスまで行ったよ。

教室に入っただけは良いけど、僕、マークの席が何処なのか知らなかったんだ。

仕様がなから、近くの人に聞く事にしたよ。

僕がマークの偽者だって事を気付かれない様に、ちゃんと気をつけないと。どうやら僕は、少し怪しまれてるみたいなんだ。皆の視線を感じるんだよ。

「あ、あの、僕はマークなんですけど、マークの席って何処ですか？」

「っ！？」

僕がマークの名前を出した途端に皆が僕から視線を外しだすんだ。
何これ？ いじめと言うやつなの？

僕は、消す事の出来ない心の傷と言う物を胸に刻み込んだよ。

悲しいのに、涙が出ないんだ……

ホントに悲しい時って涙が出ないのかな？

それから僕は、試しに今まで体験した悲しい出来事を思い出す事にしたんだ。

……小学校、トイレに流されず残されていた特大な物——意地悪な横嶋君が僕を犯人に仕立て上げたんだ。

僕は、そんなマナー違反しないでちゃんと流すよ！

……お爺ちゃんから貰ったお年玉——いつも僕だけ名前を間違えるんだ。

僕は、“イサム”でも“ムサシ”でもないんだよ……そのまま受け取って良いのか判断が難しいんだよお爺ちゃああんっ！

……父さんが蒸発した時——溶岩の中に飛び込んだんだ。

父さんは熱い魂を持ってるから大丈夫だって言ってたじゃないか、それなのに……

父さんの嘔吐きっ！

父さんなんて嫌いだっ！

……昨日、借りて来て見た映画——グロッキーが判定で負けたんだ。
ちきしょおおおおお！

「えいどおりいうわああああんっ！」

一筋の涙が僕の頬に光り煌めく幻想的な橋を架けた。

善く善く考えてみると、僕の変装は完璧だよ。

僕はマークなんだ。

じゃあ、悲しいのは僕じゃなくてマークじゃないか！

「……ちょ、ちょっと君、もしかして真久木君の知り合いなの？」

「ちょ、ちょっと！ A子、止めときなよ……」

二匹の雌豚共が、僕、基、マークに忠誠を誓いに来たんだ。

「真久木って、誰だよっ！ 僕はマークだよっ！」

地味と言うか、眼鏡と言うか、眼鏡のお姉さんと、頭が爆発してる
独創的なお姉さんが、僕をジロジロ見て来るんだ。

ハッ！ もしかして僕の青い果実が狙われてしまっているの？

「……う、うん、棒夫君とか野次君とかが、よく真久木君の事をマ
ークと呼んでたから……」

もしかしてっ！？ と思ったんだけど……

ところで君は、どうして此処に居るの？

君は、小学生位に見えるんだけど？

迷子になったの？

それに制服が埃まみれじゃない！

と言うかなんでそんな物着てるの？」

眼鏡のお姉さんが僕にべたべたとボディータッチしながら、早口で

僕を問い詰めて来るんだけど、アフロのお姉さんが舌打して『ブってんじゃないよ』とか何とか溢してたのを聞いてしまったんだ。もしかして僕の変装がバレてしまったのか？

「ぼ、ぼ、僕は高校生だよ。」

も、もう、真久木でも何でも良いから、マークの席に案内してよ」

眼鏡のお姉さんが僕の手を取り、長い髪をそよがせながら、一つだけ作りの違う立派な装飾が施された椅子の所まで案内してくれたんだ。

凄い、これが今から僕の席になるの！？

「ところで君は、どうして真久木君の席なんか探してたの？」

「そんなの僕がマークだからに決まってるだろう！
何回も同じ事、言わせないでよ！」

僕は眼鏡のお姉さんを一喝してやったんだけど、眼鏡のお姉さんは怯むどころか左手で口元を隠し、クスクスと僕の事を馬鹿にするんだ。

流石の僕もプツンきたよ！

「何が可笑しい！」

「クスクス。そんなカワイイ顔してなにが真久木君よっ！
本物の真久木君はもっと厳つい悪人面よっ！

可笑し過ぎて私の引き締まった腹筋が更に鍛えられてしまったわ！
クスクス」

僕は悔し涙を瞳に溜めて、この教室を飛び出そうとしたんだけど、

眼鏡のお姉さんが僕の腕を掴んで離さないんだ。
この人怖いよ……

「待ちなさいっ！

私も言い過ぎてしまったみたいね。

謝るから、話を聴かせてくれる？

なんでこんな事したの？

君のお名前は？」

「ちょっと、A子！

真久木君の知り合いなら関わらない方が良いつて……」

アフロのお姉さんの制止も聴かずに、それどころか『黙らっしやっ
い』って言いながら、アフロのお姉さんの横面を張ったんだ。

「私は伊達に生徒会役員じゃないのよ！

迷える子羊を導けないで何が生徒会ですか！

真久木一派だろうとなんだだろうと、と言うか寧ろ真久木君達を更生
させないと、より快適な学園生活が送れないでしょうがぁ！」

演説を聴かされたアフロのお姉さんは『おぼえてろよ！』とか『呪
ってやるううう！』とか捨てゼリフを吐きながら、教室を後にした
んだ。

「……さあ、君は記念すべき私の更生者、第一号になるのよ。
まず、お名前を言いなさい」

「……ぼ、僕は、マークです」

「このクソガキがああああぁあ！」

教室に乾いた音が響き渡り、教室に居た人達は顔を青くさせてたよ。僕も、眼鏡のお姉さんに横顔を張られてしまったんだ。

腰の入って手首を利かせたビンタは、僕の身体に確実に恐怖と言う物を刷り込んだんだよ。人に名前を尋ねる時は、まず自分から名乗りな！

とか言える空気じゃなかったんだよ。

「す、済みませんでしたっ！

僕の名前はマナブと言います。

あ、あの、ところでお姉様のお名前はなんと申されるのでしょうか？」

「ふーん、マナブ君って言うのね？

クスクス、そんなに畏まらなくても良いわよ、マナブ君。

私の名前はA子よ。ビーでもシーでもないからね。クスクス。

……それじゃあ、マナブ君がなんで此処に居るのか教えてくれる？」

A子お姉様が怪しげに微笑みながら、僕の頭を子猫でも愛でる様に優しく撫で回してきたんだ。

僕は鳥肌を立てながらも、頷く事でしか許してもらえなかったんだ。仕様がなから、此処まで来た経緯を掻い摘んで説明してあげる事にしたよ。

「……ほ、ほんの、出来心で……」

僕、マークの役に立てたのかな？

続く

学園天国？ 後編

A子お姉様に因って囚われの身となった僕は、A子お姉様の遠大な話を延々と聴かされる羽目になったんだけど、A子お姉様の話を良く聴いて居ると、マーク達を更生させると言うのは建前で、その実、生徒会なる物を掌握したいだけみたいなんだ。

なんでも、生徒会長と言う人は『顔が良いからって、チャホヤされてるのは今だけよ』とか『家が金持ち、と言うのが気に入くない』とか『どうせ、先生達に色目使ってるだけなんだから』とか『私だって本気を出せば……』と言う事らしいのです。

「その中でも、一番ムカついたのが、生徒会長と言う権力を下に、私の大好きな副会長にチョッカイ掛けやがった事なのよ……」

A子お姉様は、唇を噛み締め、握り拳を震わせながら、憎悪を孕んだ視線で僕の同意を促すんだ。

「……分かるでしょ？」

「……え、えー、その事に関しては、僕も誠に遺憾に思っております。

えーっと、今後この様な事がない様、前向きに検討する所存であります……？」

これで良いんだよねえ？

「……ホントに分かってるの？」

マナブ君は、私が死ぬと言ったら死ななければいけないのよ」

それは嫌だなあって思ってたら、どうやらそれが顔に出てたみたいで、A子お姉様は僕の肩に手を回して、怪しい視線で僕に笑い掛けに来るんだ。

「マナブ君は、それでも私のファンクラブの名誉会員なの？
マナブ君が一番、偉いのよ？ それなのに、そんな顔してて良いと思ってるの？」

「あ、あの、僕はいつの間にそんな怪しげな宗教団体に入団したんでしょうか？」

A子お姉様は明らかに失望した、と言う顔を浮かべ、溜め息をつきながら、僕にデコピンをして来たんだよ。

僕は忙しいから、そんな事してる暇ないんだけど……

「だって、生徒会長のファンクラブが在るのに、私のファンクラブが無いなんて不公平でしょ？」

だから今、作ったのよ。

マナブ君、ちゃんと私の話を聴いてたの？

まず、外堀から埋めてくって言ったでしょ？」

ズルイよっ！ 僕、ちゃんと聴いてたけど、そんな事、言ってなかったじゃないかっ！

僕は、少しだけ気分を悪くしたけど、顔に出してしまうとまた怒られると思ったので、必死で平静を装ったんだ。

「……あ、あの、もしかして会員って、僕一人だけなんですか？」

今度は、如何にも、私、怒ってます、と言う風体を醸し出して、お尻とか何かを、色々とプリプリさせてるんだ。

「何を言ってるのよ！」

そんな見窄らしい、ファンクラブなんて在る訳無いでしょ！

何の為にマナブ君を私の配下にして上げたと思ってるの？

真久木君達、延いてはそのルートから応援団の奴らを全員、私の下に引き込むのよ！

……悪いけど、マナブ君が真久木君達の知り合いだって、下調べは済ませてるんだからね。

今更、誤魔化しても無駄よ」

僕、マークと知り合ってから、まだ三日しか経ってないのに、何処でバレたんだ？

A子お姉様が不敵に笑いながらも、身振り手振りを使って、僕に良く分かる様に説明しようとしてくれたんだ。

「クスクス。何も理解出来てないって顔してるわね？

真久木君程の曲者を取り込むのは、流石の私でも難しかったんだけど、そんな時に真久木君が、マナブ君に相当に入れ込んでるって話を小耳に挟んだ訳なのよ。

マナブ君って、真久木君の後継者なんでしょ？

そうと分かれば、マナブ君から取り込むまでよ。

後は、子供を騙すなんて、私に掛ければ朝飯前よ！

……ホントは私から会いに行く予定だったんだけど、嬉しい事にマナブ君が勝手に赴いて来たって訳なの」

A子お姉様が、余りにも楽しそうにしているので、話の腰を折るよう

な真似をしたくなかったんだけど、なんだか雲行が怪しくなってきたので、持てる勇気を全て振り絞ってA子お姉様を止める事にしたよ。このままでは、僕の頭脳が破裂しちゃうよ！

「……あ、あの、そう言う事は、僕の前とか、教室の中で言う事じゃないのでは……？」

先程から痛い程に、周りからの視線を感じるんですけども……？
このままでは、外堀を埋める前に、A子お姉様の無さそうな評判が更に悪くなってしまわれるのではないですか……？」

「なんですってっ！ ……まあ、過ぎた事は仕方ないわ。今から、屋上に行って細かい打ち合わせをしましょう」

A子お姉様の振り上げられた右手が怖かったけど、元々、此処に来た理由を忘れていなかった僕としては、今から屋上に行ってしまうと確実にサボリになってしまう訳で、サボってしまったら僕が此処に来た意味がなくなっちゃって、色々と不都合なんですけど……
とか何とか言い訳を考えてたんだけど、首根っこ掴まれて、そのまま屋上まで引き摺り込まれてしまったんだ。

ごめんよマーク、僕の所為でマークが不良みたいな事にされてしまったよ。

せめて、出席を取ってもらうまで待つて欲しかったのに。

「……作戦会議を開く前に、まずは、情報収集に駆り出してた、マスヨを呼び戻しましょう。

……話はそれからね？」

A子お姉様は、携帯電話で何処かに電話を掛け、電話が終わると、今度は、腕を組みながら空を見上げて、ほくそ笑んでるんだ。

……人を待ってるなら、まだ教室でも良かったじゃないか。

「……あ、あの、“マスヨ”って誰ですか？」

A子お姉様への質問は、一呼吸と共に片手であしらわれてしまったけど、僕は、“マスヨ”と言う人物に興味を覚えた訳でなく、特にやる事もなく暇を持て余してただけなので、そんなに返事を期待してなかったんだけど、いざ、本当に軽くあしらわれてしまうと少しだけ気分が悪くなってしまいう訳で、いっその事このまま帰ってしまうおうかと思ったんだけど、屋上の入口付近をA子お姉様が陣取って居るので、そうする事も出来ずに、自分の無力さを哀れんだりしてみたものの、僕は、まだ小学生だから仕方ないよ……と言う結論に至ったんだよ。

A子お姉様を出し抜こうにも僕の話をちっとも聴いてくれないんだよ。

……嗚呼、誰か助けてくれないかなあ？

なんて他人任せな事を考えたりしてたんだけど、世の中そんなに甘くないんだよね。

マークが助けてくれる事を少しだけ期待して居たんだけど、僕は今、マークに成り済ましてる訳だから……

あれ？ A子お姉様には、僕の正体がバレてるんだから別に大丈夫なのかな？

なんだか訳が分からなくなって来たよ。

僕は、何事に於いても頓知を利かせられる程、捻くれ者でもないの
で、溜め息をつく事で気を紛らわしてたんだ。

「……マナブ君、いくら私が神秘的な程に美し過ぎるからって、そ
う何度も熱っぽい吐息を漏らされたからと言っても、私の気持ちは
……

ハッ、駄目よ！ 私は、副会長に操を立ててるんだから……
いくら名誉会員だからってそんな役得……

あ、後、十年位は我慢しないと駄目よ！」

胸や股間の辺りを両手で隠して身体をモニョモニョさせてるA子お
姉様を見て、僕は、良い事を思い付いたんだ。

やっぱり、自分の事は自分でしないとね。

「あ、あの、僕、トイレに行きたいんですけど、其処を退いてくれ
ませんか……？」

「トイレ？」

……ふうん、分かったわ。マナブ君も、そういうお年頃なのね？
大丈夫、私はある程度、理解のある女だから。思う存分、出して来
なさい。私が許可するわ！」

A子お姉様の眼が異様に優しくなったのが気になったけど、よう
やく僕は自由を手に入れたんだ。

溢れ出る解放感から、少し小走りで廊下をスキップしてたんだけど、
気が付いたら、A子お姉様が、後ろから凄い勢いで僕を追い掛けて
来るんだ。

僕の脱走計画がバレてしまったのかっ!?

僕は、必死で逃げ回ったんだよ。捕まったらビンタされる事は分かり切ってたからね。

小学生である僕が、A子お姉様より速く走れる訳もなく、どんどん縮まって行く距離に、全てを諦めて楽になってしまおうか? とも思ったんだけど、前方からモサモサした物体と言うか、アフロのお姉さんが歩いて来てたんだ。

あれ程、口汚くA子お姉様に捨てリフを吐いて居たこのお姉さんなら、僕の事を助けてくれるかもしれないっ!

僕は、これは天恵と許りに、アフロのお姉さんの背後に隠れスカートの裾を掴み、助けを求めたんだ。

「せ、セクハラあああああっ! あっ!?!」

アフロのお姉さんは、僕を助けてくれるどころか、気の済むまで大音量で絶叫してから、僕に軽蔑の視線と少しだけ誇らしげに口元を歪めた顔を向け、スカートの裾を掴んでた手を乱暴に払ったんだ。

誰だよ、敵の敵は味方だ、なんて言ってた奴は!

その話を鵜呑みにしてた僕が馬鹿みたいじゃないかっ!

「ふん! 子供かと思って油断してたら、やっぱり真久木君達の知り合いなのね……」

僕が、アフロのお姉さんに呆気にとられてしまってる隙に、A子お姉様と、アフロのお姉さんが発した魂の叫びに呼び寄せられたギャ

ラリーの人達に囲まれてしまったんだ。

「ど、どうしたのマスヨ？」

「A子！」

ちょっと聴いてよ！

この子ったら！

私の！

健全な！

純然たる！

乙女の恥じらいを……

剩え！

公衆の面前で！

曝け出させようとしたのよっ！」

『何事か！』と騒いでたギャラリーの人達も、周囲の状況を確認した後、大袈裟に慌てふためくA子お姉様と、露骨に大きな声を揚げながら、何故か嬉し装な顔してるアフロのお姉さんを見る度に、二人を尻目に、次々とこの場を後に行っただよ。

明らかに期待をしてた顔の先生らしき人でさえ、二人を見るなり『今は授業中だ！ 早く教室に戻れ！』の言葉を吐き捨てると共に、

足早に教室に戻って行っただ。

結局、僕達三人だけしかこの場に残らなかったんだ。

僕も流れに乗って此処から立ち去ろうとしたんだけど、僕の肩は確りとA子お姉様に掴まれてたんだよ。

「……マナブ君、マナブ君は一体、何がしたいの……？」

私をその気にさせといて……

よりにも選ってマスヨとだなんて……

この裏切り者！

マナブ君にトイレの場所を教えて上げようとしてただけなのに、こんな酷い仕打ち……」

A子お姉様は、沈痛な面持ちで額に右手の甲を当てながら、その場に倒れ込み、今、正に悲劇のヒロインを気取ってるんだ。

……って言うかそんな気遣い要らないんだよ！

トイレなんて一人で行けるんだよこんちきしょおおおおおおお
おっ！

「……まあ、其処に居る眼鏡より私の方が魅力的なのは分かるんだけど。

でも、乙女心を玩具にするのは頂けないね」

アフロのお姉さんは、怒ってると言うよりも、寧ろ勝ち誇った顔でA子お姉様を見下してるんだ。

「マナブ君？」

いくらマナブ君が万年発情してる色ガキだからって、其処に居る鳥

がらアフロなんかに手を出しちゃ駄目よ。

そんな事したら、アフロの不幸がマナブ君に移っちゃうんだからね。さあ、マナブ君、其処に居るアフロに『さっきのは遊びにも満たない、只の気の迷いだった』って言うのよ。

そしたら、私もさっきの事は不問にして上げるから」

A子お姉様は徐に立ち上がり、僕に笑ってないんだけど笑い掛けて来るんだ。

「ちよっと、いくら自分に自信無いからって無理矢理言わせてんじゃないよ！

そんな事したって、眼鏡が無駄にデカイ尻してるって事は変わんないんだよ！

その子にどっちが良い女なのか、ちゃんと選ばせなさいよ」

「なに焦ってるのよ、自分に自信無いのはあんたの方じゃない。

……まあ良いわ、さあマナブ君、どっちが美人なのかアフロに確りと分かせて上げるのよ」

二人は全然、然り気なく無いんだけど、然り気ないポーズを取ってるんだ。

二人共、余裕の表情を浮かべてるんだけど、僕にはどっちが良いかなんて分からないよ。

仕様が無いからマークに聴いて来ようかな？

「……あ、あの、僕では判断付かないんで、人に聴いて来ても良いですか？」

二人は、一瞬、物凄く険しい顔をしてたんだけど、僕が不覚にも恐

れ戦いってしまったら、自分が負けてしまうとも思ったのか、ぎこちない笑顔を顔に貼り付け、無言のまま動かなくなってしまったんだ。

それを許可してもらったと判断した僕は、屋上で待っててもらおうように伝え、走ってその場を後にしたんだよ。

急いで家に帰って来た僕は、丁度良くお昼寝から目を覚ましたマークに今の僕の事情を包み隠さず全て説明したんだ。

僕は今、自由なんだけど、約束を守らないって言うのは僕のポリシーに反する事なので非常に困ってるって事までマークに伝えたよ。

「……ふうむ、分かったよ、マナブ君、仕方ないから私、自らが戦場に赴くでしょう」

助かった！

だからマークって最高なんだよ。

やっぱり困った時はマークだね。

僕達はそのままナツちゃんを迎えに行き、ついでにジョージのお見舞いを済ませ、一度、家に帰りオヤツを食べてから、またジョージのお見舞いに行った後に、その足で学校に向かったんだ。

ナツちゃんも、僕達に付いて来ちゃったんだけど、まあ、大丈夫だよね？

屋上に到着した僕達は、少し辛そうな顔しながらも、必死にポーズを取ってる二人を見て、ちょっとだけ申し訳ない気分になってしま

ったよ。

「……ま、真久木君!？」

ま、まあ良いわ、誰でも良いから、早く私達を採点してえ!」

徐に二人に近づいたマークは、右手で二人に、音だけ聞いてたら痛そうな張り手を喰らわせたんだ。

張り手を喰らわせたって言ったけど、ホントは振りだけで、マークは左手で自分の頬を叩いてたんだ。

僕の場所からだ、ホントに叩いた様に見えるんだよ。

マークの意図に気付いた二人は、大袈裟に態とらしく倒れ込み、地面を転げ回ったり、非難がましい視線を投げ掛けてみたり、好き勝手に喚き散らしたり、やりたい放題してたんだ。

「……マーク、それで、どっちが良いの?」

マークは僕に優しく笑い掛けて来て言うんだ。

「……該当者なあし!」

「「ちょ、ちよつと」」

何が不満なのか二人は、マークに抗議の声を揚げてるんだ。

そんな二人を見て、マークも、仕方がないと許りに説明を始めたんだ。

「お前らは、根本的に間違ってる!」

まず、ボンバー！

貴様からだ！

お前はその髪型になった時から『パーマ掛けんの失敗しちゃった』
とか言ってるけど、お前もう一年以上その髪型だろ？

本当は気に入ってるんだろ？

お前は言い訳がましいから駄目なんだよ……」

アフロのお姉さんは余りの驚きに目を見開き、マークの事をジロジロとだらしなく見てるんだけど、マークはそんな事、気にせずにA子お姉様の方に向き直り、言葉を続けるんだ。

「次は伊達眼鏡！

貴様だ！

お前も、丁度、高校に上がった時からか？

眼鏡を掛け始めたのは？

……お前は質が悪い、眼鏡を掛けてるだけならまだ良いんだ。

唯、自分で『眼鏡っ子、眼鏡っ子』とか公言してたのが頂けないな

……

お前は少し狙い過ぎたんだよ……」

A子お姉様は悔しそうに俯き、マークを見ないようにしてるんだ。
それを見たマークは透かさずフォローを入れたんだ。

「最初は皆も、昔から地味で目立たないお前らにあだ名が出来て喜んでたんだ。

……だけど！

お前らは、少し、増長し過ぎたみたいだな。

アフロは別に好きしろ……

眼鏡は萌えるとか燃えないとかに惑わされるな……

お前が眼鏡を掛けても、何も変わらないんだから……」

「ま、真久木君、そんなに私達の事を……」

「私達の変化に気付いて、私達の事、ちゃんと見ててくれたのって真久木君が始めてよ……」

二人のお姉さんはマークに、尊敬と羨望、それと少し媚びの入った視線を投げ掛けてるんだ。

「……小学生の頃から同じ学校なんだから、当たり前だろ。皆、見て見ぬ振りをしてただけなんだよ……」

マークの話も聴かずに、二人はマークに縋り付いてるんだよ。

「真久木君、私達これからどうすれば良いと思う？」

マークは少し嫌そうな顔をしてたんだけど、A子お姉様の問いには確り答えて上げたんだ。

マークって優しいね！

「……取り敢えず、整形しろ……」

「「あんたにだけは言われたくないんだよ！」」

二人のお姉さんはマークの股間やら、鳩尾の辺りを必要に蹴り上げてるんだ。

「……ほ、惚れたぜい……」

三十分位、蹴り続けられたマークは、口から泡とか吹いてたんだけど、マークならあれ位、平気だよな？

僕はそれよりも、ナツちゃんの教育上、余り宜しくないと思ったんで、直ぐにナツちゃんの目を両手で塞いだんだ。

用事が済んだなら、早く帰りたいんだけど、あれっていつまでやってるの？

ナツちゃんも、疲れたみたいだし先に帰ってるよ？

僕とナツちゃんは、二人のお姉さんに手を振り、この場を後にした……

続く

あっと、ジョージに聴いた話に因ると、アフロのお姉さんの名前は、『福田・ボンバー・マスヨ』って言うんだってさ。

それと、ボンバーはミドルネームじゃなくて、リングネームなんだって。

それから、A子お姉様が言った、生徒会長が副会長にチョッカイ掛けてたって話なんだけど、ジョージが言うには副会長の方が生徒会長にチョッカイ掛けてるんだって。

何処かで情報が入れ違いになっちゃってるんだけど、まあ僕には関係ないや。

あつ、後、A子お姉様に頼まれてた会員勧誘なんだけど、僕以外では、ナツちゃんとジョージが入ってくれたんだ。

ナツちゃんが、会員番号二番で、ジョージが四番なんだよ。

マークに三番を上げようとしたんだけど、『死んでも嫌!』なんだって、だから三番は欠番にしようとしたよ。

最後に、これはマスヨお姉さんに聴いた、秘密の話なんだけど、A子お姉様が副会長を好きになった理由って言うのが、副会長がA子お姉様の眼鏡を誉めてくれたからなんだってさ。

えーとつ、それじゃ、さよならっ！

ジョージい牧場！

今日、マークは用事があるみたいなんで、仕方ないから、朝からジョージのお見舞いに来て居るんだ。

「ジョージ、暇だから遊びに来たよ」

ジョージのお見舞いに来たら、まず、声を掛けないと誰が来てるか、分からないみたいなんだ。

昨日も、ナツちゃんが何も言わずにジョージの上を跳ね回ってたんだけど、ジョージは僕が跳ね回ってたと思ってるんだ。

「やあ、マナブ君。毎日、お見舞いありがとう。今日は一人なのかい？」

「うん、そうだよ。」

マークは、なんか用事があるんだってさ」

ジョージは、怪我の具合が悪いのか、動きがとってもゆっくりなんだ。だ。

ゆっくりと身体を起こしたジョージは、僕に向き直るのもゆっくりだから、僕が手伝って上げないと日が暮れちゃうかも知れないんだよ。

「ああ、ありがとう。」

……日増しに症状が悪化してるみたいなんだ。
俺も、もう長くは無いんだろうか？

そうなんだろう？

マナブ君、口止めされてるのかも知れないけど、こっそり俺にだけ教えてくれないかい？」

ジョージは、僕がお見舞いに来るたんびにこんな事、ばっかし言ってるんだ。

流石の僕もウンザリだよ。

「うん、そんな事より、ジョージってボブが何処に居るか知ってる？」

「ぼ、ボブだってえっ！」

ジョージが、どんな表情をしてるか分からないけど、声色から興奮状態にあると言う事を推察する事が出来たよ。

詰まり、ジョージは今、アドレナリンがビンビンだ！

「ボブがどうかしたの？」

「聴いてくれよ、マナブ君……」

あの野郎が、あっ！

あの野郎って言うのは、ボブの野郎の事だよ」

ジョージって意外と細かいんだよね。

それとも、僕の事、子供だと思って馬鹿にしてるのかな？

それは一先ず捨て置く事にするけど、あのジョージを此処まで怒らせるなんて、ボブって相当酷い野郎なのかなあ？

「うん、あの野郎がボブだって事は大体、予想出来てたよ。それで？」

「ボブの野郎が、あの野郎だって事はもう話したよね？」

「……あの野郎、事も有ろうに俺の鼻を馬鹿にしゃがって！」

俺の鼻はいつか文化遺産に指定されるかも知れない程の芸術品だぞ！」

ジョージは、怒りの余り言葉使いが乱暴になってしまってるんだ。

そんなに大事なんだ？

確かにカッチョイイ鼻してるんだけどね。

「うん、国宝級にカッチョイイんだけど、指定されるなら天然記念物の方にだと思ふよ。」

それで、ボブになんて馬鹿にされたの？」

「そうか、マナブ君は俺の鼻の素晴らしさを理解出来るのか。」

そうそう、ボブの野郎なんだけど……

あの野郎、俺の鼻は『ギネスブックに載る程じゃない』とかって言いやがったんだ！

違うだろっ！

「……俺は大きさを傲慢にしてる訳じゃないんだ！

俺は形で勝負してるんだよ！

ボブはなんにも分かってない！」

誰にだって譲れない事や触れられない事の一つや二つ在ると思うんだけど、ジョージにとってそれは鼻を馬鹿にされる事みたいなんだ。

僕だって、納豆にマヨネーズを入れて食べる人は許せないよ。

後、いつも勝ち誇った顔してる奴も嫌いだよ。

それから、自分を大事にしない人も許せないよ。

自分で自分に優しくして上げなくちゃあ、一体、誰が優しくしてくれるって言うんだよっ！

他にも色々と在るんだけど、それは秘密だよ。

「うん、ボブが酷い野郎だって事は、良く分かったよ。それで、ボブっていつも何処に居るの？」

「んんん？　なんでまた、ボブなんて探してるんだい？　それに、ボブは基本的に夜行性だから昼間は寝てるよ」

ジョージには、なんで僕がボブを探してるのか理解出来ないみたいなんだ。

僕も、ボブに会った事ないんだから、おっと、語弊が有ったね。

人型のボブとは面識ないんだから、実を言うと一人で会うのは少し気が引けるんだよね。

「えーっとつ、A子お姉様からの命令で……マークが会員になってくれなかったから、地道に会員を獲得して行かないといけなくなったんだ。それにしても、ボブって学校行ってないの？　マークとはクラスが違うの？」

「ああ、昨日の続きか？」

俺達三人は、小さい時から何故かずっと同じクラスだよ。

ボブは、学校には行ってるけど、放課後までずっと保健室で寝てるんだよ。

……それにしても、酷い話だなあ、マナブ君が会員を増やしていかないとビンタされちゃうんだろ？

俺が一発、ガッツンと言ってやりたいとこなんだけど、この身体じゃあそれも無理なんだ」

ジョージの気持ちは嬉しいけど、ジョージみたいな怪我人が学校に行ったら、いの一番に人質にされちゃう可能性が高いよ。

そうになったら流石の僕でも、ジョージの事を切り捨てなきゃならなくなっちゃうんだよ。

本当に本当は、僕も助けて上げたいんだけど、掟だからね……

一度、“掟だから”とかって言ってみたいんだけど、いざ本当に言うとなると少し恥ずかしいから、今は心の中だけで満足してるんだ。

別に本当にそんな掟が在る訳じゃないからね。

でも、本当にそうだったら僕の方では、ジョージを助けて上げる事は難しそうだから、ジョージが学校に行きたくなくなる様に仕向けておかなきゃ。

「駄目だよ！」

ジョージは空想でも妄想でも例え嘘だったとしても学校に行きたいなんて思っちゃ駄目なんだよ……」

「マナブ君、なんでまた……」

一体全体俺がどうしたって言うんだ。

やっぱり俺の身体はもうボロボロだからなのか……?」

ジョージったらまた変な事を考えてるんだ、学校に行きたいって言われるよりは嘛しだから、良しとして置くよ。

と言っても、ちゃんとトドメを刺して置くけどね。

「……うん、これは僕の私見なんだけど、A子お姉様って子供とか老人とか怪我人とかには容赦ないんだよ。

言う事を聴かない子供には平気な顔で暴力振るうし、説教して来る老人には逆に説教し返すんだ、それも、外国語とかを織り込んで説教するんだ。

勿論、理解とか納得出来なかった人にはお仕置きが待ってるんだよ。最後に怪我人になんだけど、一人で歩くのも辛そうな怪我人に人力車を引かせて『リハビリだ』って言い張るんだよ。

だから、今のジョージは学校に行くと危険なんだ」

殆どが僕のイメージなんだけど、ジョージの為だから仕方ないよね?

人の為にだったら、別に嘔吐いても良いんでしょ?

それから、一時間毎にジョージは『もう駄目だ』とか『俺が死んだら……』ってどうのこうの言い出すんだよ。

「マナブ君、やっぱり俺は日頃の行いが悪かったのかなあ?」

「うん、僕、一旦家に帰るよ。また直ぐ戻って来るから、それじゃ

あね」

そろそろ、ナツちゃんを迎えに行かないといけない時間になってたんだ。

まあ、ナツちゃんを迎えに行った後にまた戻って来るつもりだけど。

ジョージが寂しそうな顔してる様な気がしたけど、気のせいだよ。

ナツちゃんを迎えに来たは良いんだけど、ナツちゃんのお友達のリちゃんも付いて来ちゃったんだ。

ノリちゃんは、ナツちゃん程ではないにしろ、お人形さんみたいでとても可愛いらしいんだけど、僕としては最近ナツちゃんが僕の事を呼ぶ回数が減って来て、その代わりに“ノリちゃん”って単語が増えて来てるから、顔には出さないけど少しだけノリちゃんに嫉妬してるんだよ。

昨日、試しに回数を数えてみたんだけど、僕の事が七十二回でノリちゃんが三十五回も出て来てたんだ。

そろそろナツちゃんも兄離れしちゃうって事なのかな？

悔しいから、僕も『マーク』って千回言ってやったんだけど、ナツちゃんも負けじと『ジョージ』って一日中言ってた来たんだよ。

流石に其処までマークに心酔してる訳じゃないので、今回は仕方ないからナツちゃんに勝ちを譲ったよ。

どうやらナツちゃんは、マークよりもジョージの方が気に入ったみたいなんだ。

確かに、身体も大きくて威圧感たっぷりのマークよりも、喋るお人形さんとかクッションの感覚に似てるジョージの方が親しみやすい様な気がするけど、だからって僕はマークが駄目だって言ってる訳じゃないからね。

まあ、ノリちゃんが付いて来てしまった事は仕方ないとして、ジョーじのお見舞いに行かないと。

二人を引き連れて、ジョージの部屋、基、病室に舞い戻って来た僕は、挨拶もそこそこにナツちゃんとノリちゃんをジョージの上に乗せて上げたんだ。

「……ま、マナブ君。ぐふお、きよ、今日はいつにも増してハゲっ、激しいね?」

ジョージの上を二人が仲良く跳ね回ってるんだけど、ジョージはまた僕のせいにしてるんだ。

マークには黙ってる様に言われたんだけど、やってもいない事、僕のせいにされるのはやっぱり面白くないよ。

でも、マークが言うにはジョージはスケベだから気を付けた方が良いつて言ってたし……

まあ、その時はその時って事で、どうせジョージは一人で起き上がれないんだしね。

「何言ってるんだよジョーじ、僕は此処に居るよ」

「なふっ、なんだってええふっ、えええ！
うっ、うへっ、また、新しい症状が……」

ジョージって本当に心配症なんだね？

「……違うよ。」

ジョージの為に女の子を連れて来て上げたんだ。

『ジョージは女好きだ！』ってマークが言ってたからね」

僕がそう言った途端にジョージが卑しく笑ってたんだよ。

まあ、ジョージの表情なんて見えないから、僕の想像の産物でしかないんだけどね。

「お、女の子！？」

こ、こいつはまたずふっ、随分と過激な……」

「ナツちゃん、ノリちゃん、ジョージが喋ってる時は飛び跳ねちゃ駄目だよ。」

そうしないとジョージい人形が壊れちゃうかも知れないんだ。

やっぱり玩具は大事に扱わないと」

いい加減に聴き辛くなって来たし、ジョージも辛そうだったし、僕ってとっても優しいんだよ。

「「はぁーい」」

二人は、ジョージの上を跳ね回るのを、飽きたのか疲れたのか知らないけど、それを止めてオママゴトに切り替えたみたいなんだ。

「ジョージい、あゝん」

「……」

「ジョージい、おいしっ？」

ナツちゃんとノリちゃんは、誰が持って来たか分からないけど、置いてあるお見舞いの品——果物セットから、思い思いの品を取り出し、ジョージの鼻に押し当ててるんだ。

ジョージの事を甲斐甲斐しく世話をするナツちゃんを見て、ナツちゃんは立派に育ってくれたなあとか誇らしく思う気持ちと、僕の知らぬ間に成長して行くもんなんだなあとか寂しく思う気持ちとで、お兄ちゃんとしては少し複雑な気分だよ。

「おにいちゃん、ジョージいがこれたべたいんだってえ」

「マナブのおにいちゃん、あたしはこれがいいです」

二人から果物を受け取って見たものの、流石の僕でも果物ナイフの様な危険な代物を扱った事なんてないんだよ。

困った僕は、本当は人に物を頼むなんて好きじゃないんだけど、仕方ないからジョージに頼む事にしたんだ。

ジョージだって高校生なんだから、それ位出来るよね？

「ごめんよ、ジョージ……」

「……いや、良いんだ。子供は元気が一番だよ。」

俺から言わせてもらえば、好き勝手しない子供なんて子供じゃないよ」

えっ！？ そうだったんだ？

良い事を聴いてしまった僕としては、子供の権限を最大活用するべく、持って居た果物を置き、この前からずっと気になっていたジョージの枕元に設置してある謎のスイッチを二十回位、激しく連打させてもらったよ。

「ジョージい合身っ！ ……あれ？ フライングモードに変形だジョー！ ジー！ ……あれ？ あっ、ポチっとな？ あれ？ あれ？ あれ？ あれ？ あれ？ なんだよっ！ なんでだよっ！ 動いてよ！ 変身してよ！ くそくそくそくそくそくそくそくそくそくそくそくそくそくそくそくそく！ おおおっ！」

『どうかなさいました？』

「どうしたもこうしたもないよっ！ ジョージが動かないんだっ！」

何処からか聞こえて来た女性オペレーターの声に僕は、僕の腕が悪いと思われるのは嫌だったので、ジョージは整備不良で動かないんだと言う事を必死に伝えたんだ。

『取り敢えず落ち着いて下さい。今そちらに向かいますので、絶対に動かさないで下さいね？』

「動かすも動かさないもないよっ！ 最初から動かないのに動かせる訳ないだろっ！」

『大丈夫ですので落ち着いて下さい。無理に動かさなければ大丈夫ですから』

どうやら僕は、少し気を焦り過ぎたみたいなんだ。

なるほどね、落ち着いてやれば大丈夫って事か、僕とした事がいざと言う時のマニュアルをウツカリ忘れてたみたいだ。

「おにいちちゃん、あたしにもそれかしてえ？」

僕が再挑戦しようとした丁度その時に、声を掛けられてしまい僕の興と言う物が半分位、削がれてしまったよ。

仕様がなから謎のスイッチをナツちゃんに渡したけど、これが実戦なら僕達は確実にやられてたね。

「もしもし、ジョージい？」

「どうかしたかい？」

「ジョージいは、ここにすんでるのお？」

ナツちゃんの素朴な疑問にも、ジョージは嫌な顔一つせずって言うっても表情は分からないんだけど、懇切丁寧に返事を返してたんだ。

ノリちゃんが、ナツちゃんの事を羨まし装に見てるんだけど、声を掛けようか掛けまいか、とにかくとってももどかしいんだ。

ノリちゃんの代わりにナツちゃんに声を掛けて上げる事にしたよ。

やっぱり人生、楽しまなきゃ、我慢のし過ぎは身体に悪いよね。

「ナツちゃん、次はノリちゃんの番だよ」

「はぁーい。ノリちゃん、こうたいだよ」

謎のスイッチを受け取ったノリちゃんは、僕にお礼を言ってくれたんだけど、それがとっても可愛いらしかったんだ。

まあ、ナツちゃんまでとは言わないけれど、それでもお礼を言われるのはやっぱり気分が良いね。

「ねえ、ジョージい。」

ジョージいはなんでジョージいなの？」

えっ？ ノリちゃんはそんな事が知りたかったの？

「それは……えっと……大人の事情とか……色々あったんだよ……」

ひどいよっ！ ノリちゃんの時だけそんな曖昧にして、恥ずかしがらずにちゃんと教えて上げなきゃ不公平だよ！

「それじゃあ、ジョージいっていくらでうってるの？」

「ははは、最近の娘って随分と積極的なんだね？」

でも、駄目だよ。いつか出会う人の為に綺麗な身体をモニョモニョなんだ……

いくらマナブ君の知り合いだからって、この身体を売る事は出来ないよ……」

ジョージのせいでノリちゃんがとても悲しそうな顔をしてたんだ。

このままでは、ノリちゃんが泣き出してしまうんじゃないかと思う程に悲しそうだったので、仕方なしにジョージの尻拭いをする事にしたよ。

「……ノリちゃん。申し訳ないけど、ジョージい人形は非売品なんだ。

でも安心して、ジョージいで遊びたければいつでも此処に来たら良いんだよ。

此処なら無料でジョージいと遊びたい放題なんだ」

ノリちゃんは僕の説明を聴き、まだ少し残念そうな顔をしてたけど、一応は納得してくれたみたいなんだ。

ノリちゃんも漸く落ち着いてきたかなと思ってたら、この部屋にいつもの看護婦のお姉さんが入って来たんだ。

「あっ、お姉さん、丁度良かった。

実は、ジョージがこの果物を食べたいって我が儘を言ってるんだけど、流石の僕でも難しくて困ってたんだ」

「へ？ 野次君は大丈夫なの？」

徐にジョージに近づいた看護婦のお姉さんは、ジョージの脈とか色々調べただけど、特に問題ないと判断すると、溜め息を吐いて肩を落としてたんだ。

「……果物ね？ 分かったわ。今回はもう仕方ないけど、次からは

こんな悪戯しないでね？
分かった？」

「はぁ、済みません……？」

ぷぷぷっ、ジョージったら高校生にもなって悪戯を注意されるなんてとっても情けないね。

それにしても、ジョージはどんな悪戯をしてたんだろう？
今度、教えてもらって、マークにでも試してみよう。

看護婦のお姉さんはとても器用に果物の皮を剥いてくんだけど、なんか手品でも見てみたいに果物が別の物に変わってくんだ。

凄いね！ 果物ナイフってあんな風に使うんだ。今度、教えてもらおう。こっちの方がジョージの悪戯よりも全然、役に立ちそうだよ。

「はい、どうぞ！」

綺麗に皮を剥かれた果物を皿に添え、その皿を僕に差し出す看護婦のお姉さんに後光がさして見えるよ。

ま、眩しい！？

「凄いや！ お姉さんってなんでも出来ちゃうんだね？ 僕、尊敬しちゃうよ！」

「フッフ、これ位、一人暮らしをしてると簡単に出来るものなのよ。それじゃあ、私は忙しいからまた後でね？
此処は病院なんだからあんまり煩くしちゃ駄目よ？」

華麗に立ち去る看護婦のお姉さんを見送り、果物の入った皿をそれぞれ、ナツちゃんとノリちゃんに渡して上げた。

看護婦のお姉さんって僕の周りのお姉さんの中で一番優しいんだよ。

……って言うか、A子お姉様とかマスヨお姉さんと比べるのも申し訳ないよ。

あの二人のお姉さんは好きとか嫌い以前に、怖いんだ……

一通り果物を食べたナツちゃんとノリちゃんは、残った果物をジョージの鼻に押し当ててるんだ。

「ジョージい、おいしっ?」

必要に果物を押し当てられたせいで、鼻の辺りの包帯が果汁でべたべたになってしまったんだ。

仕方ないから僕が包帯をずらして食べさせて上げたよ。

「マナブのおにいちゃん、おててべたべたなのお?」

確かにジョージの口に無理矢理、果物を二人と違い手を使って突っ込んだせいで、僕の手がべたべたになってしまって、この手を持って余してたんだ。

そしたら、ノリちゃんが、さっきのお礼にとジョージの包帯を使って僕の手を拭いてくれたんだけど、それは気不味かったんでトイレに行こうとしたんだ。そしたら、ノリちゃんもトイレに行きたかつ

たみたいなんで一緒に連れて行く事にしたよ。

ノリちゃんが洗面台に届かないとか色々と四苦八苦してから、漸くジョージの病室に戻ったんだけど、ジョージのベッドで、ジョージと一緒にナツちゃんが眠ってたんだ。

「おかえり、マナブ君……」

「ジョージ、なんて事を……」

人の妹に、しかも幼女に手を出すなんて……

やっぱりマークが言ってた事は正しかったのか……

ジョージの事、見損なったよっ！」

「なっ!?!? ……ちょ、……」

怒りに打震える僕は、ジョージの言葉を待たずに、ジョージに毒を吐き捨て、急いでナツちゃんとノリちゃんを抱え込み、直ぐに家に帰ったんだよ。

——次の日、たまの休みにナツちゃんと遊んで上げようと意気込んでいたんだけど、ナツちゃんは朝早くからノリちゃんと一緒に遊びに行ってしまったんだ。

遊びに行かれてしまったては仕方ないので、マークと公園をぶらぶらしてたんだけど、それも飽きたので日課になってしまったジョージのお見舞いに行く事にしたんだよ。

ジョージのお見舞いに来たは良いんだけど、病室は何故かナツちゃんと同じ位の子供達で溢れてたんだ。

何があったのか気になった僕はジョージに近付こうとしたんだけど、同じくジョージのお見舞いに来ていたナツちゃんに、横入りはいけない事だと注意され、仕方なく最後尾に並んだんだ。

お兄ちゃんとしての威厳がとか思ってみたものの、これまた何故か並ばされてる看護婦のお姉さんを見てたらそんな些細な事はどうでも良くなったよ。

後ろから様子を伺ってたんだけど、どうやら順番にジョージに飛び乗ってるみたいなんだ。

いよいよ看護婦のお姉さんの順番になったんだけど、看護婦のお姉さんは一度後ろの方に下がって、助走を付けて空高く飛び上がり、空中で一回転したかと思うとそのまま膝でジョージに飛び乗ったんだ。

「安静にしてろボケええええええっ！」

嗚呼、看護婦のお姉さんも意外と怖い人だったんだ？

続く

そうそう、ノリちゃんも会員になってくれたんだよ。

ノリちゃんは五番って事だね。ついでに猫のボブとジョージも会員にしといたよ。

あの二匹はどっちがどっちだか分からないから、番号は適当にその日の気分で決めるよ。

うん、僕ってセールスマンの才能でもあるのかなあ？

それから、ジョージ経由でボブも会員になってくれたみたいなんだ。後、これもジョージ経由でボブから仕入れた情報なんだけど、どうやらこの前マークが不注意に漏らした一言のせいで、A子お姉様が自分はマークの女だとかって公言してやりたい放題やってるんだって。

皆が困ってるから、マークがなんとかしてくれて事みたいなんだけど、マークは『あの二人に関わりたくない』なんだってさ。

まあ、僕も仕方ないと思うよ。

最後にジョージの事なんだけど、なんでも肋骨を三本ばかり折ってしまったんだって。

そのせいで、ジョージに飛び乗るのは暫く禁止になっちゃったんだよ。

悲しいね？ まあ僕が気にしても仕方ないか？

そいじゃあね！

帰って来た マクギブソン!

今日は、一昨日から何故か元気がないマークを元氣付ける為に色々頑張っただけだと思っただけ、僕、マークが何を上げてあげれば元気になるかなんて知らなかったから仕様がなくて、マークの奢りで漫画喫茶に行き、漫画でも読みながらマークの相談に乗って上げる事にしてたんだ。

マークの話を要約すると『男として再起不能になったんじゃないか?』って事らしいんだ。

この前マークが言っていた用事って言うのは、“あの二人”にやられた“傷”の痛みが引かなくて、これは一大事だと言う不安からお医者さんに観てもらいに行ったんだって。

お医者さんに観てもらったなら大丈夫じゃないの? って思ったんだけど“傷”の後遺症からか再起不能になる可能性があるんだって。

マークの言うお医者さんの話では“心理的な問題”だから治るかも知れないし治らないかも知れないんだって。

肉体的には問題ないから大丈夫って言われたそうなんだけど『もしかしたらもう二度と……』って言う不安から、焦燥の思いを前面に押し出してたんだってさ。

マークって意外と繊細な心の持ち主なんだね。僕、知らなかったよ。

——って言う事なんで取り敢えずマークに自信を付けさせる方向に持っていく事に決めたよ。

一通り漫画を読み終えた僕は、マークをゲームセンターに連れて行く事にした。

「マーク、まずはこのUFOキャッチャーであのヌイグルミを取るんだ！」

「……分かったよマナブ君……私に掛ればこんなもの……出来ないよ……私には無理なんだよ。ゲーセンに初めて来た私なんかに出来っこないよ……ハハハ、でも軟弱になってしまった私にはお似合いな場所だね此処は……？」

君もそう思ったから此処に連れて来たんだろマナブ君……？」

「いいから早く、其処のハチミツが好きそうなクマのヌイグルミを取ってよ！」

つたく、マークったらとんだ俯抜けになったもんだよ。

ついでにナツちゃんのお土産をと欲気を出したんだけど、マークを此処に連れて来たのは逆効果だったみたいだね。

来ちゃったもんは仕様がなから、マークがヌイグルミを取ってくれるまで頑張ってもらおう。

「ああっ！？ 取れたよマナブ君！」

マークが僕の予想に反して一発で取ってしまったんだ。

僕の予定では、ヌイグルミが取れない苛立ちからマークを怒らせ、店員にイチャモンをつけさせてマークに元気になってもらおうって

言う算段で、あわよくばヌイグルミもと思ってなかったって言えば嘘になっちゃっただけ、取れちゃったもんは仕方ないからマークを誉めて上げる事にしたよ。

「凄いよ！ 僕、マークが此処まで凄い奴なんだって思わなかったよ！

やっぱりマークって凄かったんだね！

ホントマークには敵わないよ！」

「ふふふ、誉めてくれて有り難うマナブ君。

でも、このヌイグルミ、貧弱になってしまった私にはお似合いだね……？

君もそう思うだろマナブ君……？」

「何言ってるんだよ！

それはナツちゃんへのお土産だよ！

マークにヌイグルミが似合う訳ないだろ！

マークにはビタミン剤とかプロテインの方がお似合いなんだよ！」

マークったらさっきから薄く微笑んでるんだけど、気味が悪くって仕方ないんだよ。

こんなマークなんてマークじゃないよ。早く元に戻さないと僕まで可笑しくなってしまうよ。

「マナブ君は変わってしまったんだね……？」

初めて会った時が懐かしいよ……もつと素直で優しい子だったのに……」

マークは僕の事を懐かしむ様に見て来るんだ。ハッキリ言って居心

地悪いよ。

「マーク……人の自我って言う物は常に変化して行くんだよ。過去を振り返るなんてマークらしくもない……それに、僕が変わらない事には小学校に通えないんだよ。」

マークは僕を変える為に家庭教師になったんだろ？

まあ、会う人会う人を観て色々勉強させてもらったよ。

A子お姉様には狡猾さを……

マスヨお姉さんにはしぶとさを……

看護婦のお姉さんには営業スマイルを……

ジョージには儚さを……

ついでにトミばあには強欲さを……

最後にマークには……えーっと僕、マークと一緒に居る時はいつも遊ぶのに夢中でなんにも勉強してなかったって事に今気付いてしまったよ。

まあ、そう言う訳で明日の為に今の内からこの感じを慣らしておかないと、母さんを騙すと言うか誤魔化すのは難しいと思うんだよ……」

「はあ、分かったよマナブ君。」

私が今からお手本を見せて上げるから、あんな人達を参考にするのは止めるんだよ。

そうしないとマナブ君のお母さんに会わす顔がないよ……」

渋々だったけど、マークがやる気を出してくれて良かったよ。

でもまだ安心出来ないから色々と考えておかないと、気を抜いたらまた直ぐに俯抜けに戻っちゃう可能性が高いからね。

マークに連れられて街を適当に歩いてるんだけど、目的地が皆目見

当がつかないんだよ。

「……ねえ、マーク。一体、何をする腹積もりなの？」

「何をつて言われても……気付かないのかい？」

私達は今、パトロールをしてるのだよ。

まあ、人助けでもしようと思ってたんだけど、なかなか困ってる人が見当たらなくてね……」

何を青臭い事言ってるんだよ。マークに人助けなんて似合わない事この上ないよ……

ハハーン、解ったよマーク、人助けって言うのは建前で本音を言えば、助けて上げた事を嵩に掛けてお駄賃を鰹腹せしめようって腹なんでしょう？

僕だって本音と建前を読み取る事位出来るんだよ。まあ、これも A 子お姉様に教わったんだけどね。

でもマークったら、本当にどうしようもない極悪人なんだから。

其処まであくどい奴だと逆に惚れ惚れしちゃうね。

やっぱりマークはこうでなくちゃ。

そうと解れば僕も困ってる人（生贄）を探さないと。

「あっ！ マーク、ほら、あそこの人が困ってそうだよ！」

「うゝむ、確かに困ってるみたいだけど、あれはカツアゲされてる

だけじゃないのかい？

私が求めているのは、重そうな荷物を持ってるオネーさんとか道に迷ってるオネーさんとか取り敢えず困ってるオネーさんを探してたんだよ。

悪いけど私は野郎なんかを助けて上げる程、物好きじゃないんだ……」

何を言ってるんだよっ！

折角、僕が困ってる人を見つけて上げたのに、文句ばかり言って、そんなに都合良く困ってる人なんて居る訳ないんだよ。

あの人見つけただけでも儲けものなのに、なんとかあの人で我慢してもらわないと……

「マーク、まずはあの人の所へ行って話を聴いてみようよ？

もしかしたら、あの人の家族にお姉さんとかが居るかも知れないじゃないか？

見捨てるのはそれからでも遅くないと思うよ？」

「うーむ、そう言う考え方は浮かんでこなかったよ。

でも、助けて上げた人のオネーさんって言うのはまた、随分と繋がり薄い……」

マークがいつまでも愚図ってるから無理矢理引っ張って行く事にしたよ。

路地裏に連れて行かれたあの人を追い掛けて、僕達も奥の細道へといざ出陣だ！

僕達は一番良い瞬間に助けて上げる為に、取り敢えず影から様子を伺ってるんだ。

「……マナブ君、なんで直ぐに助けて上げないんだい？」

「……マーク、そんな事も分らないの？」

直ぐに助けちゃったら恩人の有り難みって言う物が軽くなっちゃうよ。

だからあの人が、二三発殴られてから助けて上げるんだ。

そしたら御捻りだって沢山、弾んでくれる筈だよ。

それに、ヒーローだって遅れて登場するものでしょ？

あれだって、本当は僕達みたいに影から覗いてて、此処だっ！
っ
て思った時に出て来てるんだと、僕は思うよ」

「うゝむ、そんなもんなのかね？」

私はテレビを余り見てないんで、そこんとこ良く分からのんだけど
も……」

「もう良いから、静かにしててよ。」

今、見つかったらとっても恥ずかしいんだから……」

マークに任せたら、変なところで出て行きそうだから、僕が合図を出して上げないと……

やっぱり、最初が肝心だからね。神経使わないと。

早く殴られてくれないかと、期待して待ってたんだけど、なかなか始めてくれないんだ。

それどころかあの人は、土下座しながら金品を差し出し始めたんだ

よ。

「……ま、マナブ君!？」

焦った僕は、急いであの人の所へ駆け寄ったよ。

「テメーっ! この野郎っ!

あんたのせいで僕のシナリオが台無しじゃないかっ!」

「ぐはあっ! なんで……」

僕の予定を滅茶苦茶にしてくれた輩に天罰を与えるべく、僕は正義のストンピング攻撃を喰らわせてやったんだ。

「ま、マナブ君、落ち着くんだ……」

まだまだ踏み付け足りなかったけど、マークに抑えられてしまっ
ては、僕の力で振り切る事が出来ないんだ。

「「「……だ、誰だ!」「」」

「煩い! うるさい! ウルサアアアイっ!

全部アイツが悪いんだっ!」

柄と頭の悪そうな奴らが慌てふためいてたけど、もうそんなの関係
ないよ。

僕がああの野郎を倒さない事には、腹の虫が治まらないよ!

「マナブ君、落ち着いて。」

この人は唯、其処の奴らに絡まれてただけだよ……」

「やだよっ！ 僕の思い通りにならない世界なんて滅んでしまえば良いんだっ！」

「……マナブ君、思想が随分と黒くなってしまってるじゃないか？ 世界は無理だけど、この場を好きにして良いから、落ち着いてくれ」
ふう、僕とした事が少し許り取り乱してしまっただけだね。

マークにあそこまで言わせてしまっただけは仕方ない、あの人の処分は保留にしよう。

「うん、分かったよ。」

マークの事、飛び切りカッコ良く演出して上げるからね？」

そうと決まればやる事は一つだよ。

アクション映画みたいに血湧き肉躍る、ド派手な乱痴気騒ぎに仕上げようじゃないか。

僕の将来の為の勉強にもなるし、丁度良いや。

「せんせい師匠、それでは、取り敢えず入場シーンからお願いします。

それで、君達は其処の人を何発か殴っててくれる？

そしたら僕達が流離いの旅人を装って颯爽と現れるから……
分かった？」

僕の考えた筋書――

——古くから営われてた名門道場のぐうたら跡取り息子のマークが街で遊び回っている時に、ある日道場に訪れた謎の武道家に家族を殺され、復讐する為に家族を殺した犯人を探しながら、武者修業の旅に出てるって言う物語にしたよ。

「お前ら！ 何、勝手に話しを進めてんだ！」

「止めろっ！」

……お前はあそこに居る人が見えないのか？

あの人はマクギブソンだぞ……

お前もあの人の噂を聞いた事あるだろ……

」

チンピラ其の壺と其の式が、僕の合図を待たずに勝手に寸劇を始めてしまったんだ。

「あいつが……？」

ツワモノだとか曲者だとか名高い、あのマクギブソン……？」

「ヤバいな……」

「でも、此方は三人も居るんだぜ？」

やる気があるのは良いんだけど、そんなの要らないよ。

「止めろ！ あの人と関わった人間がどうなったか知らない訳じゃないだろ！」

「ヤバいな……」

「ああ、ヤバイ……」

其の参も『ヤバイ』しか言わないんだよ。

彼は大根だね？

「もう良いかなあ？

早く始めたいんだけど？」

「「「うひいゝっ！」「」」

「んじゃあ、僕達は其処の影に隠れてるから、宜しく頼むよ」

これで準備は万端だ。

後は出番を待つ許り。

僕達の出番を今か今かと待ち詫びてたんだけど、なかなかやられ役の町人を殴らないんだ。

それどころか、また土下座し始めたんだよ。

あの野郎！ 一度ならず二度までも……

僕は気が付くと、身体が勝手に脱兎の如くあの野郎目掛けて駆け出していたよ。

「くろあああああああああああつ！」

「ひひひひ！」

「へっへっへっ、こいつは俺達の獲物だぜ？」

僕が硬く握り締めた拳を振り下ろそうとした時に、チンピラ其の壺が下卑な笑いを浮かべながら、僕に話し掛けて来てしまったんだ。

そんな事されたら、僕が間違えたみたいな雰囲気になってしまうじゃないか！

「へっへっへっ、こいつを助けてたければ、お前が代わりに金をよこすんだな……」

くそっ、僕の説明が悪かったのかチンピラ達の頭が悪かったのか分からないよ。

「ストップだよ！

歯抜け君、まず、あそこの町人を殴り飛ばしてもらわないと困るんだよ……」

「あ、あの……」

僕がチンピラ達に詳しく説明して上げてたのに、町人の野郎がそれ邪魔して来たんだよ。

「なんで僕は殴られないといけないんでしょうか……？」

「そんなの、困ってる人を演出する為に決まってるだろうっ！」

「そ、そんな事しなくても十分に困ってるんですけど……」

こいつは、僕の演出にケチを付けようってのか！？

此処まで僕を舐め腐ってくれた奴は君が初めてだよ……

面白い、君がどれ程の物なのか特別に試して上げるよ……

「……フゝ、フォアチャアアアアッ！ あたタタタタ………
………たタタタタタアタあ
あッ！ フォあちヨおオオオッ！ ファイアアアアアッ！ ボン
バアアアアッ！」

「うわッ!? やめ、痛い！ ちょ、なんで!? 何するんだ!」

僕の怒濤のコンビネーションを受けて、町人役の男もたじたじにな
ってしまってるんだよ。

僕の功夫は、達人の域を軽く越えてしまっている筈だからね。

なんてったって功夫映画をしこたま見て研究したからなんだよ。

此方で一悶着してる間に、向こうでもチンピラ共がチンピラ同士で
勝手に殴り合いを始めてたんだ。

「あああああッ！」

もうッ！ なんでこんなにも纏まらないんだよッ！

少し位、僕の注文通りにしてくれても良いじゃないかッ！」

何故こんなにも収まりの悪い話になってしまったんだ？

一人佇んで居たマークが僕の傍に寄って来て、僕の肩に手を置き、
この荒れ果ててしまった場を眺めながら呟いた。

「……マナブ君、一体いつになったらオネーさんが出てくるんだい？」

はアッ！　そうか！？　ヒロインが居なかったのがいけなかったんだね？

マーク、流石は僕が見込んだだけの事がある漢だね？

やっぱり、ツボを抑えとかないと巧くいかないもんなんだね？

マークは僕に大事な事を気付かせてくれたんだ……ぐすつ、泣けてくる程良い漢だよ。まったく……

僕が、感動の余りに黙り込んだのを見たマークは、僕を置いて町人と交渉し始めたんだ。

流石マーク、仕事が早いね？

「……おい、其処の君、君の家族に女の兄弟は居るのかね？」

「……へ？　あつ、はい、妹が一人居ますけど」

マークは少し残念そうな顔をしてたけど、まだ諦めた訳ではないみたいなんだ。

「妹か……」

妹さんは可愛いかな……？」

「え？　……まあ、僕は可愛いと思いますけど……」

男は少し考えてからマークにそう言ったんだ。

なんとなく言葉を濁してた様な気がするんだけど、マークは一人ほくそ笑んでしまったんだ。

それを見た男もまた怪しげに笑い始めたんだよ。

「そうか、可愛いのか？ ふふふ、因みに妹さんは何歳なんだ？」

「ええ、妹は十二歳です……」

どうもマークの様子が可笑しくなって来たんだ。

あれは危ういよ、僕が止めて上げないと！

「なんだとオウツ！

貴様は私を騙したのか？

この野郎ッ！」

「待って！？ マーク駄目だよ！

大丈夫だから……ねッ？」

「……マナブ君、大丈夫たって、少し若過ぎやしないかい？」

はあ、マークはちいとばかり焦り過ぎなんだよね。

まあ、怒れる位に元気が出てくれてるんだから別に良いんだけどさあ。

「……マーク。マークは少し早計過ぎるんだよ。

もう少し僕のように、長い目で物事を見ないと……

マークが若過ぎるって言いたいのも分かるよ。

でもね、五年十年経ってみたらどうなると思う？

分かるだろ、マーク？

今の内から懐柔しておかないと……」

「……五年後、まだ女子高生……良いなッ！
素敵だよマナブ君！」

ふう〜、マークも納得してくれて良かったよ。

これでヒロインも見付ける事が出来そうだし、万事巧く行きそうだよ。

「そうと分かれば、早速、妹さんを連れて来てくれ」

「へ？　なんでまた妹の奴なんかを？」

「良いから早くッ！」

「ひいひい！」

男には馬車馬の様に働いてもらわないとね？

なんてったって僕の事をコケにしてくれたんだから……

それにしても、マークが楽しそうにしてくれてて良かったよ。

「女子高生、若い、素晴らしい。

私、大人、遅い。

ハアハア、女子高生と……

はッ！ ままま、マナブ君！ く、クララが……」

……元気そうでなによりだよ。

続く

聞え マクギブソン！ 前編

僕は、やっとこの学園に通う事が出来るのか……

此処まで来るのに色々大変だったよ……

苦節一週間……どんなにこの時を待ち詫びた事か……嗚呼、長かった……

なんか疲れてるからこのまま帰りたい気分になってきたよ……

昨日だって凄く疲れたんだよ……

『妹を連れて来る』と言う男の言葉を信じて居た僕達はあの後、三時間も待ち惚けをくわされたんだ……

其処で初めて騙された事に気が付いたんだよ……

あの時のマークの怒り様って言ったらそりゃあもう……

僕は必死になって宥めてただけどさあ。

小学生にアレを止めるのなんて出来っこないんだよね。

まあ、被害者って言ったらあの場に居たチンピラの人達だけなんだけど……

でも、病院送りにする事はないじゃあ……

まあ良いか、僕には関係ないし。

それよりも、その後がもつと大変だったんだよ。

マークったら、女の人を見掛ける度に『アオーン！ アオーン！』とか発狂しながら飛び掛ろうとするんだよ。

あの時は僕が、暴走したマークの股間に後ろ回し蹴りを喰らわせてなんとか落ち着かせたけど……

ホント世話が焼けるね！

僕が丁度良く漫画喫茶で空手漫画を愛読しながら技を修得していなかったら、そりゃあもう大変な事になってたよ。

まあ、疲れた疲れたって言ってるんだけど、その時の僕はなんだかんだ言っても心の底では楽しんでたんだ。

マークだって元気になってたし、って言うかいつも以上に元気になってたから僕のテンションも知らず知らずの内にやたらとハイになってたんだよ……

今思うと、とんでもない事を仕出かしたもんだと少しだけ反省しちゃったよ……

今更だけどね。

後悔してるよ。

僕があんな事を言わなければ……本当は思い出すのも面倒なんだけど、過去の失敗をそのままにしておくのは気持ち悪いし、同じ失敗を繰り返さない為にも失敗を失敗として確りと受け止めないと……

まあ、本当は僕がどれだけ疲れてるかアピールする為に昨日の事を事細かく思い出そうとしてるんだ。

説明して上げないと僕が普通にサボリみたいに見られちゃうからね。

別に言い訳を考える為に思い出そうとしてる訳じゃないからね。

ちょっとやそつとの事じゃ、母さんが納得してくれないんだよ。

まあ良いや、あれは昨日の事なんだよ。

マークのテンションに呼応して僕のテンションもノリに乗ってしまっていたんだ――

――ふっふっふっ、凄いやマーク、いつもの三倍は元気じゃないか。

「……マナブ君、大変だよ。

治ったは良いんだけど、今度は治まらなくなってしまったよ……ふふふふ」

マークは困ってるというよりも寧ろ誇らしげに口元を歪めてるんだ。

マークは、さっきから私の『マグナム』とか『マシンガン』とか『ガトリング』とか『グレネード』とか『バズーカ』みたいなとにかく強そうな事を言いながら、眼を野獣みたいにギラつかせてるんだよ。

今のマークなら、誰にも負けそうにないね。

「ねえ、マーク？

マークってとっても強いんだよね？」

「まあ、強いと言うよりも凄いんだけどね。
何事に於いても……」

僕には、マークが身体に闘気を纏ってる様に見えるんだよ。

「……じゃあさあ、僕達を騙した奴なんか放つといて、もっと凄い人を倒しに行こうよ」

僕としては、僕が考えた大乱闘が巧くいかなかったから、少し不完全燃焼なんだよ。

取り敢えず、ド派手な殴り合いが見たくて堪らないんだ。

「……放つとくって言っても、ちゃんとケジメをつけさせないと私の腹の虫が治まらないんだよ」

「あの野郎に一泡吹かせてやろうって言うのは、僕も賛成だよ。
でも、わざわざ僕達が探してやる程の男なの？
あんな奴、適当に似顔絵を書いた張り紙でも張ついたら良いじゃないか。
そんな事よりも、もっと凄い人を倒さない？」

「凄い人って誰の事だい？
いくら私でも、本職の人を相手にするのは難しいよ……」

マークったら、謙遜しちゃって。

知ってるよ、マークの武勇伝をジョージから聴いちゃってるんだもん。

この街の人達の語り種になってるんでしょ？

「大丈夫だよ、マークにA子お姉様を倒してもらおうと思ってるだけだから」

A子お姉様の名前を出した途端に、マークが物凄く嫌そうな顔をしたんだ。

「……マナブ君、私と居る時はその名前を出さないでくれ……折角治ってたのに、萎えてしまったじゃないか……」

「何を言ってるんだよ！ マークだってヤラレっぱなしじゃ悔しいだろ！ A子お姉様を、マークが倒さなかったら一体誰が倒すって言うんだよ！」

「そう言われてもなあ……それにしてもマナブ君、随分とあの眼鏡にこだわるね？

何かあったのかい？」

マークがまた俯抜けに戻って、愚図り始めてしまったんだよ。

僕の将来にA子お姉様が邪魔になる可能性が高いから今の内に排除してもらおうと考えてたんだけど、マークにこの話をして納得してくれるのかな？

「……マーク、僕は将来、香港に行ってアクションスターになりた
いって話をしたよね？」

「それは聴いてるけど、それが一体なんの関係があるんだい？」

マークはまだ解っていないみたいなんだ。

出来ればマークには秘密にしようと思ってたんだけど……

この際、仕様がなのかなア……？

「……ふー、分かったよ、全部話すよ。

A子お姉様がマークの名前を使って好き勝手やってるのは知ってるよね？ その好き勝手の内の一つなんだけど、どうやら柄の悪い人達を捕まえては改造して真面目な人に作り変えて、自分の支配下に置いてるんだって。

なんでそんな事をするのかって話なんだけど、なんでも『自分好みの街にする』って言うてるみたいなんだ。

僕としても将来、この街を牛耳らなきゃいけないから、A子お姉様が邪魔で仕方ないんだよ……」

マークはまだ不思議そうな顔をしてるんだ。

あれだけ詳しく説明して上げたのに、何が気になるって言うんだよ！

「……マナブ君がこの街を牛耳りたいって言うのは分かったんだけど、それとアクションスターになるのと何が関係あるんだい？」

おっと、そこんとこの説明もしなくちゃ駄目なの？

「……うん、母さんが僕を政治家にするって煩いから、この街を置き土産にして行けば母さんも納得してくれるかなアって思ってたんだけど……」

マークが顎の先を右手の指先で掴みながら、唸ってるんだよ。

やっぱり駄目なのかな？

「……うゝむ、随分と回り諄い様な気もするけど、分かったよマナブ君。

マナブ君の為に一肌脱ぐよ」

やっぱりマークは僕に甘いんだね。

それでこそ僕のマークだよ。

「ホント？ それじゃ早速、宿敵A子お姉様を倒しに行こうよ！」

「ふふふふ、それにしてもマナブ君、随分と楽しそうだね？
それは良いんだけど、あの眼鏡が何処に居るのか知ってるのかい？」

全くもって頼もしい事を言ってくれるじゃないか。

やる気を出したマークに勝てる奴なんてこの街に居る訳がないんだ。

僕はそう信じてるよ……

「うん、そこら辺の事は抜かりないよ。

A子お姉様の居場所ならマスヨお姉さんが知ってる筈だよ」

マークはまた眉間に皺を寄せて明らかに嫌そうな顔をしだすんだ。

「……マナブ君、私と居る時はボンバーの名前なんて出さないでおくれ……私はボンバー也大嫌いなんだよ。

それにしたってボンバーの居場所も知らないんじゃないかい？」

「大丈夫だよ。」

その辺の事は調べてあるんだ。

マスヨお姉さんは部活をしてる筈だから、今なら学校に居る筈だよ」

「はぁ、分かったよ。」

準備が良いんだか悪いんだか……」

そんな事言われたって、A子お姉様ってば部活とかしてないんだもの……流石の僕でも知らない事だってあるんだよ……

マークに誉められたのか馬鹿にされたのか判断を揺らがせながらも、僕達は学校にはちゃんと着いたんだ。

僕は将棋部の部室を探してたんだけど、マークの話に困るとこの学校に将棋部なんてないって言われてしまったんだ。

僕はどうして良いものか考えあぐねてたんだけど、マークが手っ取り早く職員室に聴きに行ってしまったんだ。

……職員室の前で待機していたんだけど、余りにも暇なんで僕も職員室に乗り込んでやろうと画策していたら、職員室に侵入する前にマークが出て来てしまったんだ。

ちよつとだけ残念な気分だよ。

「……マナブ君、どうやら将棋部ではなくて将棋愛好会と言う非公式な活動を勝手にやってるみたいなんだよ。」

まあ、何処で活動しているのか場所を聴いて来たから安心しておく

れよ」

なんて分かり難い事してるんだ。

僕にはちゃんとした部活って言ってたのに……

まあ、どうでも良いや、そんな事よりもマークの後ろを着いてって
ただけど、マークが立ち止まって『着いた』とか言ってるんだけど、
此処って体育館裏じゃないか……

その時、階段の影にひっそり佇むマスヨお姉さんを見付けてしまっ
たんだよ。

寂しいって言うよりも侘しい？　みすぼらしい？　ひもじいの？

まあどれも似た様なもんだけど……取り敢えず見ると悲しくなっ
てくるんだ。

「……あ、あの、どうもマスヨお姉さん……」

「あらあらあら、誰かと思ったらマナブ君じゃないの？
どうしちやったの？

わざわざ私に会いに来ちゃってさあゝ。
一人で何しちやってるの？」

あれ？　マークは？

……どうやら僕がマスヨお姉さんに話し掛けるのと同時に影に隠れ
てしまったみたいなんだよ。

本当にマスヨお姉さんの事が苦手なんだね。

「……えーっと、マークと一緒に来てただけど……そんな事より、実は折り入って聴きたい事があるんだけど……」

マスヨお姉さんが眼を光らせ、ニタついてるんだけど、何がそんなに嬉しいのか僕には良く解らないよ。

「真久木君ねえ、うふふふふ、マナブ君、真久木君を連れてらっしやい。」

そしたら、私に今は残念な事に彼氏が居ない事や私のスリーサイズなんかや他にも色々と手取り足取り教えて上げようってもんじやないの」

別にそんな事は知りたくないんだけど、マークを呼ばないと何も教えてくれなさそうな気配がするから、仕方なくマークを呼ぶ事にしたよ。

「はア、マーク」。

大変なんだよ

助けて

僕が危ないよ」

僕の悲鳴を聞き付けて、マークが面倒臭いと言いたげな顔しながらのっそりと現れたんだ。

「……マナブ君、そんな事言われたら、例え本当は全然危険じゃなくともマナブ君のもとに駆け付けなければ仕方ないじゃないか……」

知ってるよ、そんな事は、だからこうやって助けを求めたんだよ。

マークの心情を知ってか知らずか、僕は輝く笑顔を浮かべ、純真無垢な子供を装ったんだ。

違うよ！

僕は子供だよ！

僕が葛藤に身を焦がしてる間に、マスヨお姉さんがマークに擦り寄ろうとしてたんだ。

だけど、マークがそれを許さず、二本の指でマスヨお姉さんの進行を食い止めてるんだよ。

「馴れ馴れしいな、おい……」

「何を言ってるんだい！ 私とあんたの仲じゃないか……」

マスヨお姉さんは怯むどころか益々激しく身を振じ込もうと身体を揺すり始めたんだ。

「……私とお前の仲って……私はお前なんか外国に売り飛ばされてしまえば良いと常々思っている程だぞ……」

「なにさぁーっ！」

「……分かったから、その身体をウネウネさせるのを止めてくれ。それを見terると吐き気がしてくるんだ……」

確かに気持ち悪かったけど……じゃなくて、早くA子お姉様の居場所を聴かないと、そんな事してたら日が暮れちゃうよ。

「……あの、A子お姉様の居場所が知りたいんだけど」

「あんでまたA子の奴なんかを……なにさぁーっ！ 皆してあたいを除け者にして！

将棋が趣味だって良いじゃないのさっ！」

激昂してしまったマスヨお姉さんは、段々と口調が昔のスケ番風味になってきてしまってるみたいなんだ。

このままじゃ不味い様な気がするよ……

なんとか僕の力で落ち着かせて上げないと……

「うん、将棋なんてまた随分と乙な趣味を持ってるんだね。僕のお祖父ちゃんも将棋が好きだって言ってたよ」

「……じゃあなんで、あたい以外に将棋をやろうって熱い気概を持った野郎が現れないのさ……

あたいは毎日此处で部員を募集してるって言うのに……」

なんだよ、部員を募集してるって……其処に座ってるだけじゃないか！

なんだかい加減に面倒臭くなって来たよ。

「だから……悪いのは将棋じゃなくてマスヨお姉さんだって言ってるんだよッ！」

「ま、マナブ君!？」

マスヨお姉さんは、僕の眼から見ても分かる程にうろたえてたのを一変させ、卑らしく笑い始めたんだ。

「A子の居場所が知りたいんだね？」

分かったわ、それならあたいと将棋で勝負をおし！

あたいの将棋を馬鹿にした事を心底後悔させて上げるわ……」

何を言ってるんだよ！

僕、将棋の事なんて一言も馬鹿にしてないじゃないか！
ちゃんと現実を見なよ！

「僕、将棋のルールなんて知らないよ！」

「なにさぁーっ！

じゃあ囲碁でもオセロでもチェスでももうトランプでもなんでも良いわ！

取り敢えずあたいに構ってよ！」

もうマスヨお姉さんの我が儘には、流石の僕もウンザリだよ。

「そんな事してる時間が勿体無いからさっさと教えてよ」

「……なにさっ、分かったわよ。

仕方ないから、マナブ君が持つてるその私に良く似合いそうなヌイグルミを、私にくれたら考えて上げても良いわ」

なんて図々しい事を……コレはナツちゃんへのお土産だぞッ！

「嫌だ！ 絶対嫌だ！ 死んでも嫌だッ！

マスヨお姉さんにはこのヌイグルミに指一本触れて欲しくないんだよッ！」

「なにさっ、可愛げのない……仕様がないわねえ。

それじゃあ、十万寄越しなさい。

そしたら教えて上げるから」

なんだよ！ 子供相手にぼったくり過ぎだよ！

勿論、僕には十万なんて大金を払える訳がないから、僕はマークに救いを求める為に視線を向けたんだよ。

マークも嫌だって言う視線を僕に返して来たんだけど、僕の助けてくれないと泣き叫ぶよって言う合図を見て、渋々だったけど頷いてくれたんだ。

「……おいボンバー、もう少し安くならないものなのかね？」

いくらなんでも十万は高過ぎだぞ」

「駄目よ、駄目。

此方だって商売でやってんのよ。

そんな簡単に安く出来るもんですか」

「……おい、私とお前の仲って言うのはどうなったんだ？」

マークが値切ろうにも、マスヨお姉さんは首を縦に振ってはくれないんだ。

「……マナブ君、後でそのヌイグルミよりもっと立派なヌイグルミを買って上げるから、そのヌイグルミをボンバーに渡してくれな

いかい？」

「えっ！？」

分かったよ……マークが其処まで言うならこのヌイグルミをマスヨお姉さんに上げるよ……」

僕はこのヌイグルミが良かったのに……恨むよ、マスヨお姉さん……

僕からヌイグルミを受け取ったマスヨお姉さんは喜色満面な笑みを浮かべ、その笑顔が何故だか僕を嘲笑ってる様に見えるんだ。

はっきし言ってかなりムカつくよッ！

僕の不快指数はメーターが振り切れる位に酷い事になってたけど、漸くA子お姉様の居場所を突き止める事が出来たんだ。

続く

聞え マクギブソン！ 前編の続き……

マスヨお姉さんに僕の大事なヌイグルミを渡す事で漸く、A子お姉様の情報を聞き出す事が出来ただけ、マスヨお姉さんの説明ってとっても大雑把なんだよっ！

なんでも駅前の方で『ズバーン！』とか『ドカーン！』とか『シャリバーン！？』みたいな事をボランティアでやってるんだって。

僕には難し過ぎるよ――

まあ此処でじっとしてても始まらないんで、僕達は取り敢えず駅前に行く事にしたんだけど、なぜかマスヨお姉さんが付いて来ようとしてるんだ。

「ねえ、マスヨお姉さんはなんで僕達に付いて来るの？」

僕の問掛けにも応えずに鼻で笑いながら付いて来るマスヨお姉さんに流石の僕も気分が悪いよ！

僕はさっきからマークに眼で合図を送ってるんだけど、マークは全然気付いてくれないんだ。

僕は仕方なくマークの袖を引っ張り、僕の意味に気付いてくれるように声を掛けることにしたよ。

「……ねえ、マーク。

アレなんとかしてよ」

僕はイライラのあまり、ついマスヨお姉さんの事を指差してしまっただけだ、『ムフツ』とか言いながらだらしなく涎をたらしてたもんで、僕はいよいよもってマスヨお姉さんもやつつける事に決めたんだ。

僕は硬く握り締めた拳を更に強く握りしめ、その拳に積年の恨みを集約して、マスヨお姉さんの持っているクマのヌイグルミに向かってそれを解き放とうとしたんだけど、マークに腕を捕まれ、マスヨお姉さんの方に向いてた体をマークの方へ向き直されてしまったんだ。

「なんだよマークっ！」

僕はイライラのままに少し荒い口調になってしまったんだけど、マークの顔を見たら僕のイライラを抑えないといけない位に真面目な顔をしていたんだよ。

「……マナブ君、あれは知らない人だ。
いいね？」

顔を合わせちゃいけないよ。

アレは特に質が悪そうだからね……」

マークは真面目な顔して僕にそんな事言うもんだから僕は反射的にこう言ってしまったんだ。

「何言ってるんだよ！」

マークッ！

知らない訳ないだろッ！

アイツは倒すべき敵だよッ！」

もうマークには任せておけないと僕は走り出した……

「な、何を!？」

ちよっ! マナブ君!？」

もう僕は誰にも止められない……

僕は星になるんだ……

続く

次回予告

僕はマスヨお姉さんからヌイグルミをひったくり、それを地面に叩き付けてやったんだ。

放心しちゃってるマークを置いて僕は一人でぶらりと旅にでる事にしたんだ。

ついでに宿敵A子お姉様もやっつけてやる！
って意気込んでたけど一人はやっぱり怖いよッ！

マークは一体何処で何してるんだよッ！

続く？

聞え マクギブソン！ 前編の続き……（後書き）

こんなものでも見て頂き誠に有り難うございます。次回は早くに続きを投稿したいと思っております……次回はもっと確りした物を……。ついでに左手の親指を骨折してしまいまして、左手なら大丈夫だと思ってたんですが結構不便なんですネ？トイレとかベルト外すの大変で……畜生！俺を急かすんじゃないやねー！ギブスにひっかけちまったら結構な事なんだよ！とかを日々思っております。長々と、しかもグチグチとすみませんでした。

聞え マクギブソン！ 中編

どうしよう、いよいよもって大変だ……

そう言えば僕ってここに越して来たばかりだったんだッ！

地理が全然分かんないんだよ。

どうやら住宅街から外れてしまったみたいで、見渡す限り田んぼしか無いんだ。

今さら来た道に戻るのも僕のけして少くないプライドが刺激されちゃうから嫌だし……

僕は十字路の目の前で立ち止まり少し考えたんだ。

ここは左に曲がるべきなのかな？

それからもう一回左に曲がればまた住宅街の方に戻れると思うし。

でも、この道を左に曲がった先が行き止まりになってたらどうしよう……

まあ、田んぼ道だからそれはなさそうなんだけど、やっぱり右の道もすて難いよ。

イヤっ！ 僕は男だ真っ直ぐ行こう。

「待てい！」

僕は決意と共に足を進め様としてたんだ。

なのに、後ろから僕に声を掛けて来る奴がいたんだよ。

「その道を通りたければ有り金、全部置いてきな！」

なんだ？ 僕の折角の決意を踏み躪ろうって言うのか？
何かを決意するって言うのは結構、精神擦り減らす事なんだよ？
分かってるの？

なんだかむかついて来たよ……

ド畜生っ！

こうなりゃ決闘だ！

僕は一言文句を言ってやろうかと後ろを振り向き、僕が出来る一番
険しい顔で睨み付けてやったんだ。

「どうした？ ボーズ、難しい顔して？

もしかしてお金持って無いのか？

それなら家から……」

なんだこいつは、勝手に一人で話して。

僕はまだ何も言っていないのに……

それにちよつとは怯んで欲しかったな……

なんだよ！

僕が睨みを効かせたらマークだってたじたじになっちゃうんだぞ！

こんなヘナチヨコ、僕がけちよんけちよんにしてやる！

ああっ！

……し、しまった！？

よくよく考えたら僕の方がヘナチヨコじゃないかぁ！

何時もマークと一緒に居たせいでみんなヘナチヨコに見えちゃうんだよ……

小学生の僕にどうしろって言うんだよ！

いくら僕が功夫の達人だからって、流石に体格の差があり過ぎて……

くそッ！ マークったら一体どこで何してるって言うんだよ！

それに小学生からお金を取ろうなんてコイツは何を考えてるんだよ。

「ねえ、なんで僕がお金を払わないといけないの？」

僕が問掛けると学生さんはさっきまでと違い、急に悲しそうな顔をしたんだ。

「なんでって……

通行料だよ……

俺だってホントはこんな事……だけど、俺んちは先祖代々これで飯喰ってんだよおおおお！」

普通に働きなよ、とはなんか可哀想だから言わないでおく事にしたんだ。

だけど、通行料って子供料金で半額とか無料にならないかな？

一応、聞いてみないとね、ここで恥ずかしがって何もしなかったら、安く出来る物も安くならないからね。

だって、一回や二回位じゃ大した事無いかもしれないけど、一生で考えたら、何百、何千、何万、果ては何億とかになるかもしれないからね。

流石僕だよ、皆が皆、僕みたいに確りしてたら怪しい宗教とかマルチ商法とかに引っ掛かる事も無いと思うね。

そんな事を思ってたなら何処からともなく拍手が聞こえて来たんだ……

ああ、なんだ幻聴か……良くある、良くある。

最近思うんだけど、これって幻聴なんかじゃなくて実は神様のお告げなんじゃないかな？　って考えてるんだよ。

この前だって僕が部屋で寝てる時に窓ガラスを誰かが軽くノックしてるみたいな音がしたんだよ。

僕は飛び起きて窓ガラスの外を見たんだ、だけど外には誰も居なかったんだよ。

とっても不思議でしょ？

僕は神様だって確信してるんだけど。

この話をみんなにしたんだよ。

そしたらみんながなんて言ったと思う？

奴ら全員が全員、僕を小馬鹿にしやがったんだよ！

畜生！　僕が子供だと思って見下して！

僕が政治家になったら消費税二百パーセント位にしてやるんだからな！

まあ、政治家になる気なんてないんだけどね。

それから、みんなが僕になんて言ったかなんだけど、まずマークに自慢したんだ。

そしたらマークはこう言ったんだ。

「……それって誰かの悪戯ではないのかい？　私も小さい時は良く民家に小石を投げ込んでいたよ」

だってさ、マークって本当にしようもないよ……

次にナツちゃんに自慢したんだ。ナツちゃんなら僕の事分かってくれる、そう信じてたんだ、だってたった一人の妹だもの、そして僕はお兄ちゃんだもの、なのにナツちゃんったらこんな事言うんだよ。

「ようせいさんがきたの〜？」

だってさ。

僕は、そんなメルヘン感じてる程、子供じゃないんだよ……

その後、このやるせなさを分かってもらおうと、ジョージに会いに

行っただけで、ジョージだったらうんともすんとも言わないんだ。
僕はジョージに遂にお迎えが来ちゃったのかと心配になったんだよ。
だから、ジョージの鼻に必殺パンチを叩き込んでジョージの事を起
こしてあげようとしたんだけど、思いの他に僕の必殺パンチが効き
過ぎちゃったみたいでジョージったら発狂する程に僕の氣遣いを喜
んだだよ。

でも、その後ジョージったら『鼻が、鼻が……』としか言わなくな
っちゃたんだよね。

ジョージってホントに肝心な時に頼り無いんだよ。

困ったもんだ。

でも、ジョージのおかげで少しだけスッキリする事が出来たんだ。

僕は気分良く家に帰って、この話を母さんにしてあげたんだ。

僕は選ばれた存在でとっても凄いんだって自慢して、母さんも鼻が
高いでしょ？ って教えてあげたんだけど、母さんったら……

「ただの風でしょ？」

だってさ。

うん、全く持ってその通りだね！

実は、僕も薄々気付いてたんだ。

だけど、僕だって少し位は夢見たって良いじゃないかつ！

酷いよ……

「おい、ポーズ。」

さっきから何をブツブツ言ってるんだ。
良いから早く金をだせ！」

あれ？ この人誰だっけ？

まあ、どっちにしろいきなし金出せなんて言われたら、流石の僕だってプツン来ちゃうよ。

「なんで!？」

だけでも、僕は紳士だから一応は理由を聞いてあげる事にしたよ。

「なんでって、さっきから通行料だって言ってるだろッ！」

なんだよ！

直ぐに怒鳴っちゃって、どんだけカルシウム足りてないんだよ！
僕だって怒る時は怒るんだぞ！

こいつにも、僕の凄さを解らせてあげなければ……

「うるさいッ！」

寧ろ貴様が払え！」

「なんで!？」

なんで俺がお前に金払わなきゃならんのだ！」

はあ、ホント面倒くさい人だね。
まだ解ってないみたいだよ。

「うるさい黙れ！」

そして良く聴けッ！」

「な、なんだ!？」

「……僕には、神のお告げが聞こえるんだ!」

僕が、余りに凄い人物だと言う事に気付いたのか、学生さんは大口を開けながら身体全体を使って驚きを表現してるんだ。

そんな事しなくたって僕の凄さに驚愕してるって事ぐらい、気付いてあげてるよ。

「……はあ？」

『はあ?』 ってなんなんだよ!

その『はあ?』に

「はあ?」 って感じだよ。

ちゃんと僕が予想した通りのリアクションしてくれないと。

「何かと思ったら、神のお告げが聞こえるだって?」

面白い事を言うポーズだなく、それじゃあ神様は今なんておっしゃってるんだあ?」

こ、こいつは、僕の事を小馬鹿にした喋り方して……

もう、ホントにムカッと来たよ!

解ったよ、そんなに知りたいなら教えてあげるよ。

「……神様は、こう言ってるよ……」

地獄に堕ちろ！ ツてね」

僕は人差し指を突き付けながらも、親切丁寧に教えてあげたよ。

「さあ、教えてあげたんだから有り金を全部置いて行ってもらおうか？」

「……な、何だと！
このクソ餓鬼があ！」

学生さんは、プルプル震えてたと思ったら次の瞬間に僕に襲いかかって来たんだよ。

ホントに、身の程知らずも此処まで来ると怒りを乗り越して逆に呆れてしまうツてもんだね。

「おっと、何すんの？
そんな事したら危ないだろ！？」

学生さんは僕に襲いかかって来たんだけど、ただ真っ直ぐに、しかも余りにもノロマ過ぎて、あくびが出ちゃう位に余裕で避ける事が出来たんだよ。

「おい！ クソ餓鬼！
避けんなよ！」

「避けるなって、避けないと危ないだろっ！」

ノロマなのは良いんだけど、捕まったら流石に体格の差が有るからね。

僕は右に左に学生さんの攻撃を避けてたんだけど、いい加減に嫌になって来たよ。

……ああ、本当に無駄な事が好きな人だね？
流石の僕でも疲れるものは疲れるんだよ……

……ああっ！？
良い事を思い付いちゃった！

僕は足を止めて、亥みたいに突っ込んで来る学生さんに声を掛ける事にしたんだ。

「ちょっと待った！」

僕は両手を前に出して止まれの合図を送ったんだ。
そしたら学生さんも律義に止まってくれたんだよ。

「……なんだ？」

学生さんは不機嫌そうに返事して来たんだけど、なんだかそんな風にされると僕もムカツと来るよね？

だけど、ここは僕が我慢してあげる事にしたよ。
だってそうしないと話が進まないんだもん……

「……お兄さん、お金が欲しいんだよね？」

「……ああ」

「……実は僕、一円も持って無いんだ」

学生さんの眼が陰しくなったんだけど、ホントにイラって来るよ。

……我慢、我慢。

「だけど、駅前に連れてってくれたら僕の代わりにお金を払ってくれる人を紹介してあげるよ……」

「……本当だな？」

解った。駅前に連れてってやるよ。
その代わりちゃんと金払うんだぞ」

学生さんは嫌な笑みを浮かべたんだ。

僕はそれを見て独りほくそ笑んでしまったよ……

憐れな子羊を思って……

続く

聞え マクギブソン！ 駅前編

歩きながら考える、僕はA子お姉様に本当に勝てるんだろうか……

学生さんに駅前まで連れて来て貰った僕は、比較的簡単にA子お姉様を見つける事が出来たんだ。

だって、あんな所で仁王立ちされたら目立ってしまっしょうがないよ。

僕は学生さんにA子お姉様に声を掛けて来る様に言ったんだよ。

学生さんは僕の指示通りにA子お姉様に声を掛けようと、A子お姉様の肩に手を置いたんだけど、手を置いた瞬間に強烈無比な張り手を喰らわされてたよ。

A子お姉様の場合、ビンタなんて可愛らしい物じゃなくて、相手の事なんかこれっぽっちも気にしない物凄い勢いで放つ張り手なんだよ。

何でもマスヨお姉さんの話に因ると、A子お姉様の張り手は音速を超えるらしいんだ……

実際にA子お姉様の張り手を喰らった事の有る僕だけど、少し離れた所から観てみると良くあんな物を喰らって無事だったなって、少しだけ怖くなって来ちゃったんだ。

張り手を喰らった学生さんは口の中が切れちゃったのか血をどぼどぼ吐きながら、そのまま動かなくなっちゃって、僕もこんな風になりたくないからA子お姉様に見つかる前にどこかに隠れようと思ってたんだけど、既にA子お姉様に気付かれてたのか、A子お姉様が僕の方に足早に歩いて来てしまったんだよ。

どうしよう……今、初めてA子お姉様に気付いたって風に行けば……

…嫌、やっぱり駄目か……正直に謝って許してもらおう……

「ちよっと、マナブ君じゃない！ 何してるのよこんな所で？ っ
て、そんな事より聞いてよ。今ナンパされそうになったのよ！ 嗚
呼、ホント私って罪な女だったのね！？ ちよっとビクリして
思わず叩いちゃったんだけど……まあ身の程知らずな馬鹿な男には
私のビンタだけで満足だったみたいね。だってあの人の、余りの嬉し
さにそのまま昇天してしまったんですもの。クスクスクス」

あれっ！？

もしかしてまだバレてないの？

僕がA子お姉様をやっつけようとしてた事や、学生さんを使ってA
子お姉様の体力が消耗した処で僕がトドメを刺そうとしてた事も、
まだバレてないの？

チャ、チャンスだ僕っ！

僕の持てる全ての力を使って誤魔化さなきゃ……

「ま、全くA子お姉様に声を掛けようなんてとんだ不屈き者です、
よね……？」

「……ホントよねえ。クスクスクス」

A子お姉様は、クスクスと笑いながら僕の肩に手をまわしてきたん
だ。

僕は怖くなって鳥肌が立ってきちゃったけど、必死に愛想を振り撒
く事に専念したんだ。

「ホントに、僕がたまたま駅前に来て、たまたまA子お姉様を見つ

けたら、たまたまA子お姉様が暴漢に襲われそうになってるじゃないですか!？ たまたま此処に居合わせた僕はもう必死になって叫びましたよ。

……まあ、慌てて駆け付けようとした時には既にA子お姉様がやっていていらっしまったので……。

ホント、たまたま居合わせた僕のナイスなアシストがなければA子お姉様も危ない処でしたよ。なんてったってA子お姉様がたまたまやつつけた奴は、そりゃあもうご近所さんで噂になってる程に有名な小悪党なんですから」

僕は、どんなに嫌いな相手にだって笑顔で胡麻すりが出来たる、そんな日本人なのさ……

「……全く、タマタマ、タマタマってホントに下品なガキンちよねえ？」

偶には私みたいに社会の役に立ってみようっていう熱い気概を持たないと良い大人に成れないわよ?」

クソっ!

なんで僕がこんな奴に怒られないといけないんだよ!

言い返したい……、でも駄目だ。僕はいつだって事なかれ主義で平和的に解決して来たんじゃないか、大人に成れ大人に成るんだ僕ッ!

「良し! ……えへへへへ、いやあ、それにしてもお強いんですね? 流石A子お姉様ですよ。やっぱり何かやられてるんですか?」

僕は気合を入れ直し、お説教を止める為にA子お姉様におべっかを使い始めた。

この手の人はたぶん自分大好きで自慢好きな人が多いから、適当に突けば勝手に自慢話を始めてくれる……はず、だと思う。

「ちょっと、何とち狂った事言ってるのよ。」

行き成り叫んだりして、頭が悪い事を全面に押し出しちゃったりしてんじゃないわよ。

それからあなた、私のファン倶楽部の名誉会員のくせにそんな事も知らないなんて……、マナブ君、あなた私の事をからかってんの？
だってそうでしょ？

仮にも私のファンだって公言してるんだから当然それ位は自分で調べてるわよね？

もし本気でそんな事を言ってるんだったら、私はマナブ君の舌をもう二度とふざけた事を吐かせないように引っこ抜かなきゃ、いけ……いけ、クスクスクスクスクス」

ヤバイよ、理不尽だよ、なんとか取り繕わないと。このままじゃ都市伝説のネタにされちゃいそうだな。

「あの、その、えっと、ほらアレですよ。」

ホントは知ってるんですけど、あの、ド忘れしちゃって……。でももう大丈夫、思い出しましたから、ほら、えっと、その、アレですよアレ、淑女のたしなみってやつです……よね？」

「ホントにねえ。本物の淑女ならこれ位は出来て当然ですよものねえ？
だってそうでしょ？」

今の世の中って物騒じゃない？
だから、いっつお腹を空かせた狼達に襲われても良いように小さい時から総合格闘技的な物をちよっとね……クスクスクスクス」

よ、良かった。なんとか誤魔化せたみたいだ。

僕はこの時、あからさまにほっとしてしまったんだ。

僕がしまったと思った時には既にA子お姉様に腕を掴まれて、逃げる事も叶わない状況に追い込まれてたよ。

「……マナブ君、あなたは何を安心していいのかしら？
あなたが私に何か隠してるって事はとっくにお見通しなんですからね！」

マズイ、僕の計画がバレてる！

僕は必死になって掴まれた腕を振り解こうとしたんだけど、ガツチリと掴まれた僕の腕はぴくりとも動かない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

落ち着け！

落ち着くんだ僕！

考えろ、考えろ、考えろ。よし、誤魔化そう！

「……い、嫌だなあ。僕がA子お姉様に隠し事なんて出来る訳ないじゃないですか？」

近年稀に見る程に心根の清らかなこの僕が隠し事！？

ハッ、ハッ、ハッ……、全く持って不愉快だ！

僕はもう帰らしてもらうよ」

そう言いながらも掴まれた腕を振り解こうとしたんだけど僕の腕は一向に動く気配を見せない。それ処か僕の腕を掴む力が段々と強くなってきたんだ。

「……マナブ君、何を隠してるの？」

「そんな、隠し事なんて……」

僕と目が合ったA子お姉様は僕に向かって微笑んでいたんだ。僕に

はその微笑みが悪魔の形相に見えるだよ。

僕はそのまま愛想笑いで誤魔化そうとしてたら、A子お姉様は徐に掴んでいた僕の腕を雑巾でも絞るように振じ切ろうとし始めたんだ。

「い、痛い、痛よ！

離してよ！

お願いだから、ちゃんと言う事聴くから、良い子になるから！

もうお家に帰してよ！」

ここは駅前、人は大勢いる。僕はわざと周囲の人に聞こえるように大声を出したんだ。

気にしろ気にしろ、世間体を気にするんだ。僕は幼気な少年を演じながらも心の中でそうほくそ笑んでいた。

案の定すぐに僕達の周りに人が集まり始めた。その中から一人、正義感の強そうなおじさんがA子お姉様に近づいてきた。

掛った！

僕はガッツポーズしたいのを必死に抑え込んだ。

「ちょっと君、こんな子供に可哀想じゃ……」

「だまらっしゃい！

部外者はすっ込んでなさい！

……クスクスクス」

言うが早いかA子お姉様は張り手を使っておじさんを黙らせていた。地面に平伏し沈黙するおじさんを蔑むように見下しながらクスクス笑っているA子お姉様を見て、僕は何故か少しほっとしてしまった。自分の作戦が失敗してしまったのにも関わらず。

やっぱりマークじゃないとA子お姉様は倒せないんだ、僕はそう思った。

「……全く、とんだ邪魔が入ったわね」

A子お姉様はそう言うとおじさんのお陰で有耶無耶になっていた腕絞りを再開させようと笑い始めた。

僕は焦った、僕の腕を絞ろうと微笑むA子お姉様は、綺麗だとはお世辞でも言えなかった。

「ま、待って！

全部白状するから！」

ここまで来たらしょうがない、僕だってこんな処で腕を再起不能にしたくないから少しだけ話そうと決めたんだ。

だって僕、こんな事でアクションスターに成る夢を諦めたくないもん。

「……？ そんな事もうどうでも良いのよ。クスクスクス」

僕がせっかく譲歩しようって言うのに、でもそれだけでは僕の腕を絞る事に夢中になってしまったA子お姉様を止める材料にはならなかったんだ。

僕はなんとかA子お姉様の気を逸らそうと必死になって叫んだ。

「クソっ！　なんで！　僕の演技は完璧だったはずだ！　どんな裏技を使ったんだ……。最期にそれだけ教えてよ！　イヤ、せめていつ気付いたかだけでも教えて下さい！」

お喋りなA子お姉様の事だからこう刺激すれば聴いてもいない事ま

で話してくれるはず……。だ。

「……フッフ、知りたい、知りたいの？」

A子お姉様の動きが止まったんだけど、表情は変わっていない。これじゃあ判断が付かない。よし、後押ししよう。

「えへへ、僕ってA子お姉様のお話って楽しいからとっても大好きなんだ！ だからお願いだよ、僕にお話を聴かせてよ」

「フッフッフ、マナブ君も偶には可愛らしい事を言うのね。しょうがないお姉さんが楽しい楽しいお話を聴かせてあげまぢゅからね、クスクス、バブバブ、クスクスクスクス」

助かった、助かったんだけどなんでこんなにムカつくんだ。赤ちゃん言葉なんて使って絶対に僕の事を馬鹿にしてるよ。でも助かったんだ、僕の作戦は上手くいったんだぞ、笑え、笑うんだ僕！

「えへへへへ、それでなんで解ったんですか？」

「もう、マナブ君はホントにせっかちさんねえ、クスクスクス。そんなの『ティーン』な乙女の勘に決まってるでしょ？ クスクスクス」

クソっ！　なんでわざわざティーンを強調して来るんだ。結局はただのあてずっぽうじゃないか。なんでなんだ解らない……

「あっ！　そう言えばマークがティーンを舐めちゃいけないよって言ってたような気がする……」

「マナブ君、漸く乙女心が解ってきたようね？」

僕は少し大人に成れたような気がしたんだ。

「……でも、今からそんなじゃ将来が心配だわ。仕方がないからマナブ君も私のお仕置き部屋に連れて行く事に決めたわ。今！ 決めたわ。そうと決まったらマナブ君、そこに倒れてる輩を連れて私の後に付いてらっしゃい」

僕はまだ気絶している学生さんとおじさんを引っ張っていかないといけないみたいなんだ。こんなに重そうな人達をどうやって……マーク、早く僕を助けてよ！

続く

聞え マクギブソン！ お仕置き編

この薄暗い室内で僕はなんと息を呑んだことだろう……

A子お姉様に連れられてきたこの場所は一体なんなんだろう。

辺りを見回してみただけど、窓がないみたいだし変な匂いがするし怪しげな機材が転がってるし、その機材にも埃が溜まっているから空気が濁ってるのか居心地が悪くて適わないんだよ。

ただでさえ薄気味悪いというのに、その上A子お姉様が薄く笑い声を溢したりするもんだから寒くもないのに僕の大事な処が身を寄せ合って今だけとっても仲良しさんなんだ。

違うよ！ 僕のは何時でも仲良しさんだよっ！

くそっ、僕が喘息にでもなったら訴えてやる……。

僕はそう思うことで平静を保つように努めるしかなかった……。

そう言えば、お仕置き部屋ってどういう事だろう……。

もしかして僕、お仕置きされちゃうの？

……大丈夫なはず。

だって僕、悪い事なんてしてないから。

あっ！ でもさっきA子お姉様の命令で人を運んでただけど、あんまり重いもんだから途中で捨ててきちゃったんだ。でもA子お姉様は此処まで一度も振り向かなかったからバレてないんだと思ってただけど……。

僕の葛藤なんてお構いなしにA子お姉様は肩で風を切りながら奥に進んで行くんだ。

見失っちゃったらお仕置きされちゃう。

そう思った僕は置いて行かれないように足早に後を追う事にしたん

だ。

奥に進むに連れて段々と臭いが強くなってる気がする。

これって、まさか……血の匂い？

でも、なんで……？

まさか！？ 僕を共犯にする積もりじゃあ？

……イヤ、違うっ！

A子お姉様は僕に罪を擦り付けて僕を犯人に仕立て上げるつもりなんだ！

まずい、まゝずいゝぞおゝっ！

このままでは僕の人生が台無しにされてしまう。なんとか逃げ出さない。僕は決意を胸にA子お姉様に話掛ける事にした。

「……あ、あの、僕、用事を……」

「マナブ君、もうすぐ着くわよ。うだうだ言っていないで着いてらっしゃい……」

振り向きもせずに僕の話を持ち捨ててA子お姉様を目の当たりにした僕の背中から嫌な汗が滲み出てくるのを感じながら、今の状況から抜け出す為に普段は余り使われていない脳細胞を酷使してまでも複雑な、それはもう近所の子供に指差されて下品な言葉を吐かれた時の心境よりも複雑な、打開策の構築作業をプラモデルを組上げる時よりも慎重で丁寧にピンセットを使って行う事にした。

僕がマークみたいに背中から毛が生えてなくて良かったと今はそう思ったよ。

初めてマークの背中の毛を見た時は余りの事に憧れてしまったけど、僕の背中からホントに毛が生えてたら、ただでさえ汗がベトついて気持ち悪いのに背中から毛なんか生えてたらそりゃあもう大変なんだ

よ。

僕だって将来はマークのように背中に立派な毛を生やしたいと思うんだ。けど、もし僕が大人に成っても背中から毛が生えてこなかったら、その時は恥ずかしいんだけどマークから分けて貰う事にするよ。

僕は作戦を考えながらも何か使える物がないかと注意深くそれでいて然り気なく、A子お姉様に気付かれないように周囲を見渡してたんだ。

周囲を見渡してみても気付いたんだけど、この建物の中には色々な物が落ちているんだよ。角材、木刀、鉄パイプ、ざっと見ただけでもこれだけの物を見つける事が出来たんだ。

探せばもっと出てきそうなんだけど、僕は見つけた物の中から取り敢えず角材を手に取り、これは僕の作戦に使えるかどうかを二秒くらい考える振りをしたんだ。

ホントは角材に手を伸ばした時に僕の心は決まってたんだけど、いざ作戦を実行しようとしたら少しだけ足がすくんでしまって、それを誤魔化す為に考える振りをしたんだ。

僕は昂る気持を落ち着ける為に一度大きく深呼吸をする事にした。

息を吸って息を吐く、それだけの事なのに不思議と落ち着いてきたような気がしたんだ。

肺に溜まった空気をゆっくり吐き出しながら、少し空気が悪いから換気して欲しいとそんな事を考えてしまった。

「……ちよつとマナブ君、変な所に息を吹き掛けなくてくれる？」

僕は何を言われのか良く解らなかったので少しだけ考えてしまった。

「……ご、ごめんなさい！」

何を言われたのかまだ解らなかったけど、この状況で振り向かれるとまずい事に気付いてしまった僕は、急いで角材を背中に隠しながらも取り繕う為だけに謝罪の言葉を述べた。

「ちょっとマナブ君、鼻息が荒いんだけど。まさか……、興奮しているの？」

訳の解らない事をほざいているA子お姉様に、このままでは非常に危険と思いながらも、それでも謝る事しか出来なかった。

「……ご、ごめんなさい！」

「ダメ、駄目なんだからねっ！」

こんなムードもへったくれも無いような処……、絶対ダメよ！

これだから最近のガキンちょは……、このドスケベっ！

ホント、油断も隙もないわ——」

好き勝手に宣うA子お姉様に頭を悩ませながらも、僕は言葉の意味を考えていた。

僕にはA子お姉様が何を言っているのか殆ど理解出来なかった。辛うじて、こんな場所では油断出来ないという事を読み取れた。

自分で僕をこんな処に連れて来たくせに、ついつい僕はそんな事を思ってしまうんだ。

それに、どうやらA子お姉様は一見すると隙だらけに見えてしまうんだけど、油断していなかったみたいなんだ。

そうすると僕の作戦が上手くいかないかも知れないんだ。

せめて油断くらいして欲しかったよ。

それでも僕は作戦を決行するしか助かる道は無いんだ。

僕はゆっくりと角材を握り締め直す。

この際、額を伝う汗を拭う手間さえ惜しい。時間が経つごとに僕の不安は大きく、重く、納豆のネバネバみたいに纏わり付いて来るんだ。

僕は角材を大きく振り上げる。これで作戦の準備は万端だ。

こうして僕の作戦は人知れず始動していった。

「あっ！ A子お姉様の後頭部に蚊がっ！」

僕の作戦は完璧だ。少しわざとらしかったけど、そんな贅沢を言ってる余裕はなかった。僕の台詞が決まった事で、後はやる事が一つしかない。

僕は振り上げて居た角材を、僕の体重を乗せ、A子お姉様の後頭部目掛けて鋭く振り下ろす。

「死ねええええええ！」

決まった……、僕はそう思っていた。僕の勇気ある行動に悪は滅びてハッピーエンドでこの物語も終わる筈だと。

「なっ！」

僕は余りの事に目を見開いて驚いた。

僕の渾身の一撃をあらう事か片手で、それも茶碗を持つ方の手で角材を受け取め、僕を見て笑っているA子お姉様が居たんだ。

角度、スピード、タイミング、そのどれもが申し分ない物だったのに。情けなくも、角材を掴んでいる手を振り払おうと力を込めても、ほんの少しでも動かす事は出来なかった。
はつきり言って、僕は完璧にブルってしまったんだ。

「う、うわあああっ！」

「煩いわよ、落ち着きなさい」

「わあああああっ！」

「煩いっ！」

気が付いたら僕は膝立ちになって頬を抑えて居た。

「……少しは落ち着いたかしら？」

意識がはつきりして来るのに連れて頬の痛みが増してくる。

僕は叩かれたのか？

「……あの、僕は、どうして？」

僕はまだ軽く混乱していたんだけど、取り敢えず状況の確認を行う為に目の前に居る眼鏡の人に話掛けた。

「クスクスクスクスクスクスクスクスクス……、うふふふふふふふふふふふふふふ……アハハハハハハハハハハハハッ」

可哀想に目の前に居る眼鏡の人も恐怖の余りに頭がやられてしまったみたいなんだ。

怖い？

何が？

……？

「わあっ！」

怖いのは目の前の眼鏡の人だ！

今の状況を把握して行くに連れて段々と恐怖も甦ってくる。
僕はまた情けなくも叫び声を上げてしまいそうになった。

なんでっ！？

僕は生きてるっ！？

僕を叩いたのは目の前の眼鏡の人……、でも僕は生きてる。
そう言えば、前の時も口の中は切れなかったし、気絶もしてない。
大人の人だって一撃で粉碎していたのに……。

僕はここに来て、一度頭の中を真っ白にする事で初めて気が付く事が出来た。

別に僕が凄かった訳じゃないんだ……。目の前の眼鏡の人が手加減していただけなんだ。

なんで手加減を……？

それは、僕が子供だからだ……。。

続く

聞え マクギブソン！ 決着編

無い、無い、何処にも……、なんで、なんで無いんだ。なんで僕が大事にしていた角材が無いんだよっ！

幾ら探したって見つからないんだ……。

あんなに大事にしてたのに……。

あんなに僕の手に馴染んでいたのに……。

僕の目の前で笑っている眼鏡の人を倒す為に色々と画策していたんだ。

その時に僕はあの子を、あの角材を選んだ筈なんだ。なのに、どうして僕の近くにないんだ……。

僕はまだ恐怖に身体を縮ませて居ただけど、この恐怖を少しでも紛らわそうと角材を探してるんだ。

例え角材攻撃が効かないとしても、自分を安心させる為に何か武器になる物を手に持っていたかったんだ。

このまま手ぶらで居ると、恐怖の余りに下呂ってしまいそうで……。

「……マナブ君」

ただ名前を呼ばただけなのに金縛りにあつたみたいに身体が動かなくなってしまうんだ。一度身に巣くってしまった恐怖は簡単には取り除く事は出来ないんだ。

仕様がなから明日にでもカウンセラーの御厄介になるよ。

そんな事よりも身体が動かないんだ。こんな時せめて角材があれば

……。

「……そんなに怖がらなくても良いのよ……」

僕の恐怖対象、その最たる人からそんな事言われても余計に怖いんだ。

僕を怖がらせたくなかったら、僕に近づいて来ないでよ……。

そう声を大にして叫びたかったけど、そんな事を言ったらまた叩かれてしまいそうで怖いんだ。

決して叩かれる事だけが怖い訳じゃないんだよ。

それよりも僕がビビっちゃった事を皆にバラされてしまう事の方がどうしようもなく怖いんだ。

僕は皆の憧れ、スーパーなヒーローのアクションスターに成らなきゃいけないのに、僕が叩かれてビビってたなんて言われると僕のイメージって言う物が大幅に下がってしまう。その事で僕に付き纏って僕の夢の実現を邪魔されるかも知れない。そう考えてしまうだけで今夜は眠れそうにないよ。

「……まずはお友達から始めましょう？」

なんでっ！

どうしてっ！

散々僕に酷い事したくせに今更お友達だって!？

そんなの虫が良すぎるよ……。

「……だから怖がらなくても良いのよ？」

「……どうして？」

怖くってまだ相手の顔を見る事は出来ないけど、俯きながらもなんとか返事を返す事が出来た。

「……私がマナブ君とお友達に成りたいからよ。それじゃ駄目かしら？」

怖くってまだ相手の顔を見る事は出来ない。

「……私がマナブ君とお友達に成りたいからよ。それじゃ駄目なのかしらっ!？」

それでも怖くってまだ相手の顔を見る事は出来ない。

「……私があっ！ マナブ君とおっ！ お友達に成ってやるって言ってるのよおっ！ 良いから顔を上げてこっちを見なさいいいいっ！ キイイイイッ！」

僕は余りの禍禍しさに両手で耳を塞ぎ、まるで念仏でも唱えているかのようにただごめんなさい、ごめんなさい、と言い続けた。

それでも耳に残る奇声を打ち払う事は出来なかったけど、何もしてないと本当に胃の内容物を床にぶち撒けてしまいそうで、実を言うのと今直ぐにでも気絶してしまいたかったんだ。

僕はこの怖いと思う気持ちを紛らす為に両目をきつく閉じて、なるべく楽しかった事を思い出そうと思ったんだ。

もう少しで頭の中が幸せで一杯になると、もう僕は何も怖くないそう思い込もうとした矢先に誰かが僕を抱締めて来た感触があったんだ。何事か？　と思った僕は直ぐに目を見開いたら、眼鏡の人が凄い形相で僕にしがみ着いて居たんだ。

「……可哀想なマナブ君。こんなにブルっちゃって。大丈夫よ、お姉さんが付いてあげてるんだから何も怖い事なんて無いのよ。うふふふふ」

僕は余りのおぞましさに少しの間だけ身体が硬直してたみたいなんだ。それをどう受け取ったのか眼鏡の人が僕の頭を眼鏡の人の胸元に押し付けながら、僕の背中を撫で廻して来たんだ。

喰われるっ！　そう思った僕は眼鏡の人を押し返そうと身体の動かせる場所の全部を使って必死に抵抗したんだ。

「ヤダよっ！　止めてよっ！　誰かつ！　マークっ！　マークっ！　助けてっ！」

「……大丈夫よマナブ君。そんなに暴れないで、何も取って喰おうって訳じゃないのよ。これはハグよ、ハグなのよ。」

そんな事を言われても僕は抵抗を止めなかったんだ。

でも僕の抵抗は眼鏡の人のハグ、と言うよりはさば折りに近い物に直ぐに潰されてしまったんだ。

まるで万力のように力強い締め付けに僕の背骨は早々にギブアップを宣言してしまったんだ。

「フウ………。漸く落ち着いてくれたみたいね」

「……ご、ごめんなさいい」

僕の謝罪の言葉を聴いてやっと締め付けを緩くしてくれたんだ。

僕は乱れた呼吸を整え、締め付けが最大限に緩まったのを見計らってまた抵抗を再開しようと決めた。

僕は相手が油断した隙について身体を引き剥がす積もりだったんだけど、相手の方が一枚上手だったんだ。

僕が抵抗を始めるより先に締め付けを強くして来たんだ。

「うふ、うふふふ、アハハハハッ！ ……これで、これでもうマナブ君は私のお友達よっ！」

余りの強引なやり方に僕は呆氣に取られてしまい、抵抗する機会を自分から手放してしまったんだ。

「マナブ君嬉しい？ 嬉しいんでしょ？ だったら嬉しいって言いなさいっ！」

もう僕には抵抗する気力なんて残ってなかったんだ。それなのに締め付けの力強さは緩まる処かより一層に強力な物に変わっていったんだ。

「さあマナブ君嬉しいって言うのよ！ マナブ君が嬉しいって言うまで離してあげないんですからねっ！」

「……る、しい」

僕は余りの締め付けの強さにそう口するのがやっとだった。

「……聴いたわよっ！ 今嬉しいって、確かに聴いたわよっ！ 私聴いちゃったんだからねっ！ もう取り消しだって言っても遅いわよっ！ クククククッ」

まるで僕の言質を取ったと許にぬか喜びし始めたんだ。そのお陰で僕の事を離してくれたから別に良いんだけど、僕は苦しいって言いたかったんだよ。

なんで僕のお友達に成りたいのか解らないんだけど、お友達に成る事で僕に酷い事をしなくなるって言うならこれで良いのかも知れない。

「さあマナブ君。私とお友達に成った、此処までは良いわね？」

僕はもう酷い事をされなくなかったから、頷く事で返事をした。

僕が頷いたのを見て取った眼鏡の人も気を良くしたのか僕に頷き返してた。

「それじゃあマナブ君。次は私の事を紹介をする練習をするわよ」

「な、なんでそんな事するの……？」

今まで眼鏡の人に気を使っていた僕は折角お友達に成ったって言うんだから早速、気安い感じで返事をしたよ。

「……何を言っているのマナブ君？ 私が友達に成ってやったって言うのよっ！ そしたら自慢したいに決まってるでしょ？」

僕はゆっくりと首を横に振った。

「……マナブ君は私がお友達に成った事が自慢したいの、理解出来た？」

眼鏡の人が真剣な顔をしながら僕の胸ぐらを掴んで僕の身体を持ち上げて来たんだ。

どうやら僕は答えを間違ってたみたいなんだ。僕は完全な無抵抗主義に成ってしまったから、ここは僕が譲って上げる事にしたよ。

僕は横に振っていた首を縦に向きを変える事で、僕が無抵抗主義だと言う事を伝えた。

「……それじゃあマナブ君、まず私をどう紹介するかやってみなさい」

僕はこう見えても一応役者志望なんだよ。だからこれ位は簡単だと余裕の表情で軽く頷いてみせた。

「こっちの人は僕のお友達の眼鏡の人だよ」

僕は一仕事やり終えたと笑顔をみせたんだけど、眼鏡の人は何が気に入らないのか顎先を指で擦りながら何やら思案顔で佇んで居るんだ。

「……マナブ君、眼鏡の人って……。一体どうしちゃったの？ いつもみたいに呼んで頂戴」

紹介しろって言うから僕が一番解りやすい形で言って上げたのに……。

まあ僕がここで愚図ってても仕様がなからやる事はやるけど。

「……えっと、ここに居る人は僕のお友達の眼鏡お姉さんだよ」

僕は自分でも巧くいったと思ったよ。だからこれ以上は無いと言わん許に胸を張ってみせたよ。

「……ちよつと待ってマナブ君。眼鏡お姉さんって……、私の事を何時もそんな風に言ってたの？」

「……えっ？　だって僕達ってお友達に成ったんでしょ？　だから気安い感じに変えたんだよ」

僕の何が気に入らないって言うのか理解に苦しむ処なんだけど、僕は一人の役者として難しい要求にも全て応えて魅せる積もりだよ。なんてったって毎日を努力の精神で精進している僕の探求心は収まる事を知らないんだ。

「私と言ったら眼鏡の事を連想させてしまうのは仕方のない事だけれども……。まあ、呼び方はそれで良いわ。それからなんだけど、もう少し私の魅力を説明してくれても良いんじゃない？」

うーん、確かに紹介するって事は初対面って事だもんね。それならその人の人となりって物を説明しといた方が馴染みやすいかもね。成程！　って感じで納得出来たよ。こういった事の一つ一つの出来事が芸の肥やしに成って行くんだって感じがするよ。
ビビビッ！　って感じがね……。

僕は紹介の練習を再開する前に今迄のやるせない気持ちを切り替え

る手段として一つ咳払いしてみせた。

「……この人は僕のお友達の眼鏡お姉さんって言うんだよ。眼鏡お姉さんって、僕なんかじゃその価値がまるで理解出来ない位にとっても良い眼鏡を掛けてるんだ。凄いでしょ！」

完璧だ……。僕は余りの出来の良さに今迄の物は何だったんだと思ってしまう程に今の自分に満足して悦に浸って居た。

僕は更なる高みに登る事が出来た。その事で僕は眼鏡に感謝してるんだ。眼鏡の人、じゃなくて眼鏡その物になんだけどね。僕はもう眼鏡に足を向けて眠れないよ。
ハッハッハッ！ 冗談だよ。そんな事したら僕の寝る場所が無くなってしまうもんね。

「……マナブ君？」

「んふふ、僕って凄いでしょ？」

僕は鼻を高くしてもっと誉めろと言わん許に胸を張ったんだけど、眼鏡の人は一向に誉めてはくれないんだ。それ処か眉間に皺を寄せて何やら難しい顔をして僕を見てるんだ。

「……マナブ君、私の眼鏡がスンバラしいって事は理解出来たわ。私の眼鏡が高価な物だって事が良く伝わって来てそれはそれで嬉しいんだけどほら、解るでしょ？ 何を遠慮してるのか私には解らないんだけど、もっと私自身の良い処を言ってくれても何も問題なんて無いのよ」

今度は僕の顔が難しい物に変わってしまったよ。

「眼鏡お姉さんの良い処って言われても……。僕、眼鏡お姉さんの事って殆ど良く知らないんだけど……」

「そんな訳無いでしょっ！ 私の事を調べる時間なんて一杯あったじゃないっ！ 何でも良いから私を誉めなさいっ！」

なんで僕が眼鏡お姉さんの事を調べてるって前提で話が進んでしまってるんだけど、僕そんな事して無いし……。それでも眼鏡お姉さんのどこぞを誉めないといけないって事は十分に理解出来たよ。

「うーん……」

僕は余りの難しさに頭を抱えて考えてしまったよ。

「……マナブ君、そんなに深く考える必要なんて無いのよ。別に一つしか言っちゃ駄目って訳じゃ無いんだから。良いから私の美点で気付いた事をポンポン言って頂戴」

僕が気付いた眼鏡お姉さんの良い処？

「……えっと、何時如何なる時でもすこぶる食欲だ！」

「惜しいっ！ って違うでしょっ！？ それって誉めてるの？」

僕は爽やかさと言う物を意識しながら頷いた。

「っ！ 次よっ！ 次いいいっ！」

ホントに貪欲な人だと思いながら頷いた。

「眼鏡の趣味が良い！」

眼鏡お姉さんは目を瞑り一頻り頷いた後に懐疑的な眼差しを僕に向けてきた。

「……それは私の事を誉めてるの？ それとも眼鏡の事を誉めてるの？」

「えっ？ 眼鏡お姉さんの事だよ」

眼鏡お姉さんは満足したのかまた頷き始めた。

「そうね、私の方が眼鏡と言う単語に敏感に成ってたみたいだわ……。言うなれば私のセンスが良いって事だもね？ でも次からは私に眼鏡を意識させない様に誉めなさい」

色々細かいなと思いつつもそんな事はおくびにも出さずに頷いてみせる。

「常に前向きだ！ と思う……」

僕は言ってしまったから後悔したよ。だって眼鏡お姉さんは前向きと言うよりもただ図々しいだけって感じがするんだもん。

それでも眼鏡お姉さんが余りにも嬉しそうな顔をしてたもんだからさっきの取り消しって言えなかったんだ。

「……マナブ君、その調子でどんどん私を誉めなさいっ！」

僕は今迄の人生でこんなに人を誉めようとした事なんて無かったから、人を誉める事がこんなに難しいって初めて気付く事が出来たんだ。何事も経験だって言うけれど、ホントにその通りだね。これで僕は突然に自分の事を誉めろと言う人が来てもとっさに誉めてあげることが出来る様になったと思うよ。

僕はとても貴重な経験が出来たと感謝の気持ちで頷いた。

「……えーっとねー、眼鏡お姉さんは達筆だ！」

「ちょっと待ってマナブ君っ！？ 私は別に達筆じゃないわよ？ それは私が細部にまで細やかな気配りが行き届いているみたいな気立ての良さそうな顔をしていると、そう受け取って良いのかしら？」

ホントに頭の中がお目出度い人だね。僕は別に人の顔を見て達筆だなんて言ったりしないよ。だから慌てて首を横に振ったんだ。

「違うよ。僕はマスヨお姉さんがそう言ってたのを覚えてただけだよ。眼鏡お姉さんは綺麗な字を書くんだってね」

「マスヨが！？ 成程ね、確かにマスヨから見たら私の字は綺麗に見えるのかもしれないわね……。マスヨの字ってまるで小学生が書いたんじゃないかしらっと思ってしまいうくらい酷い字なんですもの……。だから私が達筆だって言うのは無しにして頂戴」

……マスヨお姉さんは僕に嘘吐いてたんだ。まあ別にマスヨお姉さんの話なんて集中して聞いてなかったんだけど、と言うよりもマスヨお姉さんが役に立つからって聞いてもいい事を教えてくれたんだ。

「処でマナブ君。私の知る限りではマナブ君とマスヨって学校での時の事しか話してる処を見た事が無かったんだけど、いつの間にマスヨと仲良しに成ったのかしら？」

僕はコレッぽっちもマスヨお姉さんと仲良く成った覚えなんて無いんだけど、そういう風に見えちゃうなら気を付けとこう。

眼鏡お姉さんとお友達だっただけで僕の手に残ってるのに、その上マスヨお姉さんと仲良しだなんて言われたら僕にはもうどうする事も出来なくなってしまうよ。

知らない人に指差されたり、ヒソヒソと影で笑う者にされたりとか、それ位で済めばまだ我慢出来るんだけど一番最悪な場合は僕が世界的なアクションスターに成った時に週刊誌とかに僕の交友関係とかを調べられたりしてその時に眼鏡お姉さんの事とかマスヨお姉さんの事とかが書かれたりしちゃって最後にはもう世界的なアクションスターとして再起不能にされちゃったりするんだよ。

我ながら空恐ろしい事を考えてしまった。

僕の妄想を掻き消す手段として慌てて首を振り、僕にとっての不幸の芽を摘む為なら何だってやってやるっ！　そう腹を据える。

「……僕はマスヨお姉さんとなんて仲良く成った覚えは無いよ。僕がジョージのお見舞いに行った時に偶然マスヨお姉さんが病院で情報収集してたみたいなんだ。その時にちょっと顔を合わたただけよ……。僕は見なかった振りをしようと思ったのに……。話掛けられちゃったんだから仕様が無いじゃないかっ！」

眼鏡お姉さんは僕の話の胸に手を置きどこか悲痛な面持ちで上の方向を見ながら聴いてたんだ。

「……そう。確かに私がマスヨに情報収集を頼んでたから解らない話ではないわね。でもねマナブ君、それじゃあもうあなたはマスヨと仲良しよっ!」

「……ええええっ!?!」

そりゃあもう驚いたよ。宝くじが当たったと言われるよりも驚きだよ。

「マスヨはあれでなかなか用心深いのよ。それなのにマナブ君に話掛けて来たなんて、もう既にマスヨに気に入られてたみたいね。それにマナブ君が何を言った処で私とお友達に成ったんだら必然的にマスヨともお友達に成ったって事よ。……だってマスヨは私の親友なんですからね」

眼鏡お姉さんがやついた顔して僕を見下してくるんだ。

僕の知らぬ間に話がどんどん悪い方向に流れて行ってしまったみたいなんだよ。少し気を許したら直ぐこれだ。

「違うよっ! 眼鏡お姉さんとはお友達に成ったけど、マスヨお姉さんとはお友達に成った覚えは無いよっ! そんなのいい所でも友達の友達ってやつじゃないかっ!」

「駄目よ! マナブ君とマスヨはお友達に成ったのよ! マナブ君……、マスヨの何が気に入らないって言うの?」

眼鏡お姉さんが返す刀で僕に喰らい付いてきたんだけど、マスヨお姉さんの何処を気に入れって言うんだよ……。

「取り敢えず髪形かな……」

「マスヨは私の眼から見ても良い女よ……、私の次くらいにね。そうね、私が男だったら放つとかないでしょうね」

眼鏡お姉さんは僕を無視してマスヨお姉さんの事を嬉しそうに褒めちぎるんだ。

眼鏡お姉さんとマスヨお姉さんって仲悪いんじゃないかって思ったのに。親友って言える位に仲良しさんって事なんだね。

「……そんなに言うなら、眼鏡お姉さんがマスヨお姉さんと結婚してしまえば良いじゃないかつ！ 二人で勝手にヨロシクやってたら良いじゃないかつ！ それから宇宙の彼方に消えてしまえば良いじゃないか……」

僕はつい本音も溢してしまっただけど、眼鏡お姉さんはそんな事なんて少しも意に介したりしないんだ。

「結婚……？ そうねマナブ君、マスヨと結婚なさい！」

「いっ、嫌だよっ！ 絶対ヤダ！ 小学生になんて事を言うだよ！ 小学生の僕にまだ結婚なんて出来る訳ないじゃないかつ！」

「駄目よ！ もう文句は受付ませうん。残念ねこの話はこれで終わり。良いから早く私を誉め称えなさい！」

なんてズルイんだ、身体ばっかしデカイくせに僕よりも子供みたいな事を言うんだね。

いつの間にやら僕の頭の中から綺麗サッパリ無抵抗主義って考えが消え失せてしまったよ。

「……そうだね。眼鏡お姉さんよりもマスヨお姉さんの方がまだ優しいもんね。それにマスヨお姉さんって物知りで活動的でしかもカッチョイイ髪形してるもんね。やっぱり結婚するなら眼鏡お姉さんよりもマスヨお姉さんの方が断然お得って事だよね？」

僕はもう眼鏡お姉さんをギャフンと言わせる事に手段は選ばないよ……。

それが僕としても不本意な事だとしてもね……。

「ちよつとっ!？」 待ちなさいマナブ君……。私よりマスヨの方が良いですって……。 マナブ君はどうやら勘違いしているみたいね。そんなの私の方が断然良いに決まってるでしょ?」

「……えっ!？ どの辺が……?」

眼鏡お姉さんは言葉だけ聞くと優しく言い聞かせる様に言ってるんだけど、その姿は拳を握り締め肩を震わせてながら禍禍しい瘴気の様な物を漂わてるんだよ。

これ以上に刺激してしまうと眼鏡お姉さんにグーで殴られてしまいそうなんだけど、今更引き返す事なんて出来ないし、僕はもう突き進むしか道は無いんだ。

「どの辺って? まず私とマスヨを比べるって前提の時点で間違ってるのよ? マスヨとなんて……、烏澁がましい事この上ないのよっ! マスヨが優しい!？ 小虫を素手で握り潰すようなマスヨが!？ マスヨが物知り!？ あんな成績しかとれないマスヨが!？ マスヨの頭がカッチョイイ!？ 鳥の巣みたいな頭のマスヨが!？ マスヨが? マスヨが? マアアスウウヨオオオがあああああっ!？ 烏澁がまじいいいいいいわああああああっ!」

さっきまであんなに仲良しさんを気取ってたのにこんなに取り乱すなんて……。

「……クスクス、うふふふふふ。その点私は完璧よ。自分で言うのも何なんだけど、知らない人にも親切でことなく気品に満ち溢れてるし成績だってすこぶる良くって仕事も速い、その上に素敵な眼鏡を掛けてるときたもう結婚するしかないわね」

眼鏡お姉さんは自画自賛して一人で勝手に悦に浸っているんだ。ここまで来れば後は簡単だよ。眼鏡お姉さんが勝手に盛り上がってるときに適当な処で話掛けるだけだもんね。

「……眼鏡お姉さん？」

「どうかしたかしらマナブ君？ うっふっふっふっふっふっ」

「……やっぱりマスヨお姉さんってダメダメだったんだ？ 僕そんなダメダメな人と結婚なんてしたくないよ。だからマスヨお姉さんと結婚って話は無しだよな？」

眼鏡お姉さんは怪しげに笑いながらも一応は頷いてくれたんだ。これで僕も一安心だよ。

「……そう、そうだったのね。マナブ君ったらさっきから私に意地悪な事ばかり言って、小さい子が好きな子に意地悪してしまうってこういう事だったのね。お姉さんこんな経験した事なかったから全く気付けなかったんだけどね。そう、マナブ君は私と結婚したかったのね？ でも、ご免なさい。私はマナブ君と結婚してあげる事は出来ないの、でも安心してマナブ君。マナブ君なら特別に愛人に

してあげるから、それで我慢してね？」

眼鏡お姉さんってどんな思考回路してるんだろうか。あんなのには成りたくないんだけど、あんなに頭がおかしかったら毎日がお祭りみたいで楽しいのかも知れないね。

フゥ、ここで眼鏡お姉さんに言い返すのは簡単なんだけど、そんな事してしまうとまた不毛な言い争いになる事だろうから、ここは僕が大人に成って話題を変える事にするよ。

「……ねえ、眼鏡お姉さん。ところでなんだけど、僕の角材を知らないかな？ 実を言うときつきから探してるんだけど全然見つからないんだ」

話題を変えるのが目的ではあるんだけど、角材を探してるのも本当の事なんだよ。無くした場所からは離れてないからここいら返に在ると思うんだけど……。

「……角材？ ああ、あれね？ あの角材には遠い世界に行ってもらったわ……」

「……遠い世界に行ってもらったって、具体的にはどうしたの……？」

「それはね……」

眼鏡お姉さんは足下に落ちてる木製バットを拾い、その両端を掴んで良く見える様に僕の前に突き出して来たんだ。

僕が探してるのは角材なんだけど、眼鏡お姉さんには角材とバットの違いも解らないのかな？

「こうしたのよおっ！」

言うが早いのか、眼鏡お姉さんは嬉しそうに木製のバットを膝でへし折り、折れてしまったバットを遠くの方に投げ飛ばしてしまったんだ……。

「うふふふふ。アツハツハツハツハツ！」

何が可笑しいのか眼鏡お姉さんは腹を抱えて笑っているんだ……。僕は余りにも衝撃的な事に茫然と立ち尽くし、何も考える事の出来ない状態に陥ってしまったんだ。それでもなんでこんなに酷い事をしたのか、それだけは知りたかった。

「なんで、なんで……、どうしてそんな事……」

「……どうしてですかっ？ 私はマナブ君の為にあの角材を粉微塵にしたのよ？ だってそうでしょ？ あの角材はマナブ君に悪い影響しか与えないのよ？ だから感謝される覚えは在るけどそんな責める様な眼で見られる覚えはないわっ！」

責めてるって!？

僕が眼鏡お姉さんを？

そうだよ。責めてるんだよ。怒ってるんだよっ！

僕の中から沸々と怒りの感情が湧き上がって来るのがハッキリと自覚出来るよ。

「……っただ」

「何よ、言いたい事があるならハッキリ言ってしまいなさい」

「大事な……、大事な友達だったんだぞおおおおおつ！」

眼鏡お姉さんは、僕の魂の叫びを聞いても怯む処か逆に僕を鼻で笑
い、僕の事を怯ませるんだ。

「……角材がお友達ですって？」

眼鏡お姉さんの何処を見て取つても僕を馬鹿にしてるのは確実なんだ。だけど僕はこんな事で負ける訳にはいかない……。

「六法全書の次くらいになっ！」

「アハハハハハッ！」

僕は怒ってるのに眼鏡お姉さんは遠慮も無しで大口開けて笑う事を止めないんだ。

「笑うな！　笑うなっ　笑うなっ　笑うなっ　笑うなっ　笑うな　あああああ
っ！」

「うふふ、これが笑わずにいられますかっ！ マナブ君たらホントに間抜けなのね？ そんなのボールは友達って言ってる奴より間抜けなのよ！ うっふっふっふっふっ」

「僕は友達を蹴り飛ばしたりしないよっ！」

……解ったよ。そっちがその気ならこっちにだって考えが在るよ。

僕は奥歯を噛み締めながらもそう考えた。

「もういいよ、眼鏡お姉さんとは絶交だっ！」

「ちょ、ちよつとマナブ君っ！ 駄目よっ！ 言い過ぎよっ！ そんなの取り消しよっ！」

「ダメだよ……。謝ったってもう遅いからね」

予想以上に効果を発揮したんだけど、僕はこれっぽっちで済ませてあげる積もりなんて更々ないよ。寧ろこれはチャンスなんだ。目に見えてうろたえてる眼鏡お姉さんは酷く隙だらけに見えるんだ。

僕は眼鏡お姉さんがうろたえている隙に手近に在った木刀を拾った。

こいつは、こいつはなんて……。なんて握り心地が良いんだ。この握り易さは角材の比じゃないんだよ。こいつは正に僕の為の木刀と言っても過言ではないね。

先端部分に少し赤黒い染みみたいな物が付着しているんだけど、そんな事を気にしていたらこの世の中を生きてはいけないよ。

「あっ！ 眼鏡お姉さんのおへその辺りにギャランドウがっ！」

「なんですってっ!？」

眼鏡お姉さんはお辞儀をしてるみたいに僕の方に頭を差し出してるんだ。これで準備は完璧だよ。

僕はもう失敗を恐れていないんだ。もし失敗してしまった僕も僕は子供だからね。眼鏡お姉さんも子供のちよつとした悪戯としか受け取

らないと思うよ。

「くたばれええっ！」

僕の渾身の一撃が確実に眼鏡お姉さんの顔面を捉えた。流石は木刀、角材とは訳が違うのだよ……。

僕は眼鏡お姉さんの後頭部を狙ってただけど、眼鏡お姉さんは僕の掛け声に反応したのか後頭部ではなく顔面に直撃してしまったんだ。

確実に顔面を捉えた筈なんだ。なのに……。

「メ、メガネで受け止めている……!?!？」

次の瞬間、僕の頬に激しい衝撃が走り抜けた。

「マナブ君、今のは仲直りの握手よ」

余りの衝撃に尻餅を着いてしまった僕に、眼鏡お姉さんはそう吐き捨てていた。

「な、なんで、どうして平気なの？」

叩かれたのに仲直りしている……。そんな事よりもメガネにすら傷一つ付ける事なく何事も無かったかの様に普通に佇んでいる眼鏡お姉さんの方が不思議でなかった。

僕は決して非力では無いと思うんだけど……。

幾ら僕が小学生だからって道具を使えばガラスぐらいなら割れると

思ってたんだけど、メガネのレンズすら割れないのは絶対におかしい……。

「平気っ！？ 平気な訳ないでしょっ！ 絶交なんて言われて……、お姉さんとおおつても傷ついたのよおおっ！？

……言っときまずけど、また絶交なんて言っても直ぐに仲直りさせてもらうんですからねっ！」

眼鏡お姉さんは右手を構えて僕を威嚇しているんだけど、僕は既に絶交は諦めてるよ。

寧ろ僕の為に役立ってもらう事を考えた方が堅実なやり方だと気付いてしまったからね。

ただ僕は眼鏡お姉さんが心理的に傷ついたとか聴きたかった訳じゃなくて、肉体的になんで無事なのかを聴きたかったんだけどね。

「……絶交はもう言わないから、だから、なんで怪我してないか聴きたいんだけど」

「何を言ってるの！ 私の純情だった心はもうぐちゃぐちゃのによにちよに磨り潰されてしまったのよ！ トラウマよ、トラウマ物なのよ！」

「……僕の方がね」

仲直りしたって言うのに何時までもネチネチと言わないで欲しいよ。仲直りしたんじゃないかったの？

その後もネチネチと言われた上に僕の木刀まで取り上げられてしまったんだけど、漸く眼鏡お姉さんが言う処のお仕置き部屋に到着したんだ。と言うよりも眼鏡お姉さんに叩かれたりした場所からホン

トに目と鼻の先だったんだ……。

「あの……、何なのこれは……？」

僕達が居るのは、この広い建物の中のホントに端っこの方で、そこに所狭しと上半身裸の男の人達が大きな十字架に縛り付けられているんだ。

その中でも気になったのが男の人達の眼が死んでいる事、布団が敷いて在る事、その中でも一番気になったのが子供用とも言える小さな十字架が置いて在る事だよ……。

「あの小さな十字架は僕に使う訳じゃないよね？」

僕にとっては死活問題なんだ……、本当に……。

あんなに眼が死んでいる人達を見せられては嫌な事を考えてしまうってもんだよ。絶対にあんな風には成りたくない……。

「ああ、それね？ それはもう良いの。それを使う前にマナブ君とお友達に成れたからね……」

「あははは、それなら僕は大丈夫なんだ……」

眼鏡お姉さんとお友達に成れて良かったと、ここに来て初めて思う事が出来た。

「大丈夫？ そんな訳ないでしょ！ マナブ君にはたっぷりとお仕置きを——」

「待った！ ちょっと待ってよ。僕達はお友達でしょ？ だったらお仕置きなんて無しだよ！ 絶対反対、断固拒否だよ！」

「……それもそうね。お友達ですものね？　だったらマナブ君にはお仕置きの手伝いをしてもらおうかしら？　なんてったってお友達なんですよものね……」

手伝うって何をするんだろうか？

何故だか犯罪の匂いがプンプンするんだ。

それは良いんだけど、ホントは良くはないんだけど、眼鏡お姉さんのお仕置きと言う言葉に、縛られてる男の人達が目に見えて反応したんだ。

「嫌だああああっ！」

「助けてくれえええ！」

「俺達もお友達に成るから！　お仕置きだけはやだああああああっ！」

男の人達は涙と涎と少量の鼻水をだらしなく垂れ流しながら、眼鏡お姉さんに哀願してるんだ。だけど眼鏡お姉さんは男の人達を鼻であしらい、汚い物でも見るみたいに冷たい眼差しで睨み付け、背中から取り出したムチを一度だけ唸らせて男の人達を黙らせたんだ。

「……お友達？　あなた達みたいなゴミ虫なんか？　私を馬鹿にしてるのっ！？　あなた達とお友達に成っても私にメリットなんて在る訳ないでしょうがあああっ！」

眼鏡お姉さんは男の人達をそう罵ると、奇声とムチで一人一人を震え上げさせていた。

ムチは当たるか当たらないかと言う微妙な処で戻してるんだけど、何人かの人達には普通に当たってたよ……。そのせいなのか解らないんだけど、気絶してしまった人もいるんだ。

男の人達には、よくっく見なくても解ってしまうぐらいに綺麗なミズ腫れが見て取れてしまったよ。

「なっさけないっ！　あなた達、少しはマナブ君を見習いなさい！」

眼鏡お姉さんは気絶してしまった人をムチで叩き起こし、そう説教してるんだけど、そのうち僕に見本を見せろとか言いだしかねないので、眼鏡お姉さんに解る様に首を横に振って見せた。

「……そう、マナブ君もやってみたいのね？」

僕の思いはこれっぽっちも眼鏡お姉さんに伝わっていなかった……。僕は男の人達を見せられた時から、なるべくこの場所に指紋を残さない様に細心の注意を払っていたのに……。だのにさっきまで使かわれていた凶器が僕に手渡されてしまっ……。一番に気を付けなければいけない凶器に僕の指紋が……。

「……どうしたのマナブ君？　さっさとやりなさい！」

「いやっ、あのっ、そのムチが……。そう！　ムチが汗ばんでて滑るんだよ！」

僕はムチに付いてしまった指紋を、自分の服で一生懸命に拭いていたんだけど、眼鏡お姉さんに怪しまれてしまったんだ。だけど僕は機転を利かせる事で何とか回避出来たよ。

「何よっ！　私の手がベト付いてるとでも言いたいのか？　マナ

ブ君はまた、私の心に傷を付けたいのっ!? こんな人前で私の事を辱めて! マナブ君はサドね、サドなのねっ!? キイイイイ、恥ずかしいっ! マナブ君の変態! 変態よ! 変態なのよおおっ! こうなったらお仕置きよおおおおっ!」

「ち、違うよ! 僕の手だよ! 眼鏡お姉さんの手はスベスベだから、大丈夫だから、お願いだから落ち着いてよ……」

ホントは眼鏡お姉さんの手がスベスベかどうかなんて解らないんだけど、こうでも言わないとお仕置きされてしまう。それに僕は指紋を拭ってただけで別にムチがベト付いてた訳じゃないし。

「ちよっ、ちよっとマナブ君、確かに私は毎日のお手入れが行き届いていて手だけと言わずスベスベなんだけど、何もこんな人前で、ちよっと待って、心の準備が――」

眼鏡お姉さんって子供の僕の目から見ても情緒不安定で、とっても危険な匂いがプンプンするんだよ。だからこそ怖いと感じてしまうんだ。だっていつ手の平を返して、お仕置きだなんて言い出すか解らないんだもの。

でも大丈夫、眼鏡お姉さんの対処の仕方は解ってるから。ここは一つ、眼鏡お姉さんを誉めて誉めて誉め称えて誤魔化してしまおう、と考えているんだ。

「流石だね。眼鏡お姉さんのメガネは今日も輝いているよ!」

「えっ? やっぱり解っちゃう? そうなのよ。私のメガネはピカ一なのよ! 至宝のメガネなのよ!」

僕は更に拍手で眼鏡お姉さんの気分を持ち上げて行く。

「ブラボーメガネ！」

「うふふ、うふふふふっ」

僕の煽てに眼鏡お姉さんもご満悦なんだ。
これで僕も一安心だよ。

「……」

「……」

「……」

僕の手腕に周りの人達も啞然としてるんだけど、それから自然と僕に尊敬の眼差しが降り注いで来たから僕は笑顔で応える。

僕の微笑みに魅了された人達が、僕の偉業に皆が便乗し様と期待に眼を輝かせ、口々に眼鏡お姉さんを誉め始めんだ。

「メ、メガネー！」

「メ、メガネ最高！」

「あんたのメガネは日本一だ〜！」

この空間が熱狂的な迄に野太い声のメガネコールで埋め尽くされて行くんだ。

「……お黙りなさい！」

あなた達みたいなカス共に私のメガネの素晴らしさが解る訳ないでしょ！ 私のメガネはそんなにも底が浅いって……？ 馬鹿にしないでっ！

お仕置きよお仕置き！ お仕置きイイイイイイイイイイッ！」

「あわわわっ！？ ちょっと待って！ 落ち着いて！ 眼鏡お姉さんのメガネは日本一なんかじゃないよねっ？ 世界一、いや、宇宙一だよ！」

「うふふふ、宇宙一？ うふふふ、そうなの？ 私のメガネは宇宙一？ 嫌だわマナブ君たらっ、少し言い過ぎよ！」

なんで僕が尻拭いみたいな事をしなきゃならないんだよ。だからって放っておくと僕に被害が飛火してきそうだし……。

僕は決してここに居る怯えてしまった人達を可哀想とは思わないよ。だって僕の手間を増やしてくれたんだもん。

「……そうよね、マナブ君。マナブ君は私のお友達よね？ だって私の事を馬鹿にした奴らにお仕置きして！ そう、そのムチでっ！」

丁度良く僕が持っていたムチ、と言うよりも押し付けられた物なんだけど、これを使って友人としての義理を果たせと言う事らしいんだ。

義理とか人情とかを持ち出されると僕も断り辛いんだけど、僕には無理だよ……。

「で、出来ないよ。僕には荷が重過ぎるよ……。」

「駄目よ！ お殺りなさい！ 私の為にそいつらを皆殺しにするの！」

「……無理だよ。出来ないよ。そんな酷い事なんて……」

僕の言葉も頭に血が登ってしまった眼鏡お姉さんには届かない。

それでも男の人達が僕に縋り付く様な視線を投げ掛けてくる。僕は正に板挟みな状態で決断を迫られているんだ。

よし、彼等は見捨ててしまおう！

僕は非情とも取れる決断をしたんだけど、元々彼等と知り合いでも何でもないし、ただ僕が自分で酷い事をしたくないだけだから彼等がどうなってしまうてもそれは僕の預かり知る事じゃないし。

「……さあ、お殺りなさい」

「ま、待って！ こういうのは自分でやった方が良いよ。うん、絶対そうだよ。そうしよう」

僕は名案と許にムチを眼鏡お姉さんに返そうとしたんだけど、眼鏡お姉さんは全然ムチを受け取ろうとはしないんだ。

「マナブ君が殺るのよ。そう、私の為にね……。これは言わばお友達としての義務よ。マナブ君、殺らないって言うなら、ぜ、絶交よっ！」

「うん、良いよ！」

絶交する積もりなんて全然なかったんだけど、僕にとっては正に渡り船だっと思ってしまつて、僕とした事がつい返事をしてしまつたんだ。

道端で五百円玉を拾つた時と同じ位に嬉しいと思つてしまつたんだけど、良く考えるとここで絶交してしまつたら僕が危険だつんだ。

「駄目よ！ 絶交は嘘なのよ、冗談なのよ！ 何よ！ ちょっとしたお茶目じゃない！ 本気にしないで！」

「解つたから落ち着いてよ。僕も絶交する気ないから……。だけど、お仕置きも嫌なんだ……」

「……駄目よ！ そんな事を言うマナブ君にもお仕置きよ！ もう駄目！ お仕置きしちゃうわ……」

……その後、僕はムチをひつたくられ、もう少しで叩かれちゃうつて時に、何処からともなくマークの声が聞こえて来て僕を助けてくれたり、マークがそのまま眼鏡お姉さんと勝負したり、マークが負けそうになったりと色々あったけど、僕は何時の間にか眠つてしまつて気付いたら自分のベットに居たんだ。それで僕はそのまま学校に行つて良いつて言われたから学校に行つたんだけど疲れてたから言い訳を考えながら学校を後にしたんだ――

「――と言う訳で僕はとっても疲れてるんだ！」

「そいつは大変だったんだねマナブ君？ でも何で病院に？」

「お見舞いのついでにジョージに言い訳を考えてもらおうと思つたんだ」

「それなら話は簡単だ。マナブ君はお見舞いする為に学校を抜け出した、理由はこれで十分だよ」

ジョージって意外と頼りになるんだ。お見舞いに来たって良かった！

続く

お山でお稽古!

僕は今、山に来ているんだ。なんで山に来たのか……、たぶんマークが怒っているのとか関係があると思うんだけど……。

「ねえマーク、なんで怒ってるの？」

「……なんでって、解らないのかい？ マナブ君、この前のはなんだ！ あの体たらくはなんだ！ おかげで私は警察に御厄介になってきたんだぞ！」

マークは拳を握り、身体を震わせているんだ。

この前って言うのと眼鏡お姉さんのお仕置き部屋での事かな？

確かに僕も少し情けなかったと思うけど、マークだって十分に情けなかったと思うよ。

「……警察って？ なんでマークが捕まるの？ 眼鏡お姉さんの方じゃないの？」

実を言うと、僕は最後の方の記憶があやふやなんだ。それでも僕はマークがやられそうになったから警察を呼んだ事は何となく覚えているような気がするよ。それでも僕は警察の人を見た記憶が無い……、どういう事なんだ？

「……マナブ君はどこまで覚えているんだ？」

「いやそれが、マークが助けに来てくれた時の事まではハッキリ覚えてるんだけど、その後の事があやふやなんだよ」

「……」

……マークはしばらく僕を放置して考えているみたいんだけど、僕なにかマークに酷い事でもしちゃったのかな？

「……マナブ君。すると君はなんで山に連れて来られたかも解らないと？」

「えっ！？ 気分転換に遊びに来たんじゃなかったの！？」

「違う！ 修行だ！ そんなだからボンバーなんか遅れをとってしまっんだ！」

僕は面白そうだったから学校を休んでまでマークについて来たんだけど、確かにマークは怒ってるみたいだったし、だから僕は気晴らしに空気の良い山に来たんだと思ってたのに修行……？

それに、ボンバー？

って言うത്マスヨお姉さんの事だと思うけど、僕がマスヨお姉さんになにかされて、それを見たマークが僕の事を情けないと思ったのかな……？

「……マナブ君はいつ、どこで目が覚めた？」

「……どこでって、家のベッドの上だけ……。マークが僕を運んでくれたんじゃないの？」

マークは僕に向かい、否定の意味を込めて首を振ってみせた。

「……それはおそらくボンバーの仕業だろう。解ったよマナブ君、

あの時なにかあったのか、話してあげよう……。少し長くなるけど良いかい？」

僕は長くなるなら別に聞きたくなかったんだけど、マークが折角話してくれるって言うなら聞く事にしたんだ。それでもマークには悪いんだけど、絶対に僕の為になる話じゃないだろうなと少しだけ考えてしまったよ。

だって、眼鏡お姉さんとマスヨお姉さんが関わってるんだもん……。

「……まず、実を言うと私はマナブ君の後をずっとつけていたのだよ。最初からね……。

だからマナブ君に何があったのか私は全部把握している……。だからあの時に絶妙な瞬間にマナブ君を助けてあげる事が出来た訳なのだよ……。」

最初からって言うと、僕がマーク達の前から走って行った時からって事なの？

だったらなんで……？

「……なんでもっと早く助けてくれなかったんだよっ！？僕は、僕は……。」

「……いやマナブ君、なんだね、私が助けに行った時に感動しただろ！ヒーローみたいで良いと……、

マナブ君が自分で言ってただろう……。」

「……確かに、マークが助けてくれた時、僕はマークにシビレたよ！カッコ良かったよ！

でももっと早くに助けられたんじゃないかっ！

ヒーローみたいにしたいて言うなら、その事を僕に言うなよ！

折角の感動が台無しだよ……。
知りたくなかったよ、そんな事は……」

僕は少しだけ出てきた涙を拭った。
本当に悲しかった。

僕は本当に怖かったのに、あんなに助けを求めてたのに、それなのにマークはずっと見てただけなんだ……、気が付くと僕はマークの事を少しだけ冷たい目で見てしまっていた。

「いやまあ、それはスマナイ事をした……。

それで、なんだ、マナブ君を私が助けてあげたまでは良かったんだ……、

だけどマナブ君が眼鏡なんかとお友達になってしまったから……。

そのせいで増長した眼鏡が私に抱き付いてきたんじゃないか……。

いや、そうじゃない、それだけならまだ良かったんだ……。

私の首筋に鼻をグリグリとこう……、

いや、なんでもない。今のは忘れてくれ……。」

「それがどうしたって言うんだよ！

そんなのマークの腕力なら直ぐに引き剥がせるじゃないか！

そんな事まで僕のせいにしないでよっ！

だいたい僕が眼鏡お姉さんに目を付けられたのはマークのせいじゃないか……。」

僕はあんなに辛い目にあっただって言うのに、マークったら僕だけが悪いみたいな言い方をしてくるんだ。流石の僕でもムツとしてしまふよ。だからつい強い口調で言ってしまったけど、僕だってマークに悪い事してしまったなって思ってるんだ。

「……いや、それはそうなんだが……、

確かに私の腕力を持ってすれば眼鏡を引き剥がす事は簡単だ。
だがあの時あの場所でそれが出来なかったんだよ……。

あの暗がりの血生臭い場所であの眼鏡から少しだけ良いにおいがしたんだ……。

それにあの眼鏡、普通に柔らかい身体してたんだよ……。

プニプニで！

ポヨンポヨンだぞっ！

あの眼鏡っ、無駄に良いスタイルしやがって！

だから私はあの時、アリかナシで言ったらアリなんじゃないか？
と思っってしまったんだよ……。」

「良いにおいがした、だからなに？

プニプニでポヨンポヨン？

僕には意味がわかんないんだけど……。

マークは僕に何を求めているの？

アリって言われても、そんなの知らないんよ……。」

「馬鹿野郎！

貴様も漢だろ！

漢だったらムチムチのプリンプリンに憧れたって良いじゃないか！
あんな顔も良く見えない場所であんな事されてしまったら誰だって
期待しちゃうだろ！

例えば相手が眼鏡だって、こいつアリなんじゃないか？　って思った
って良いじゃないか……。

ただ少しだけそう考えただけなんだよ……。

実際に眼鏡に手を出そうとした訳じゃない。

それは断じてない！

本当だ信じてくれ……。」

僕にはなんであんなに必死になってるのか理解出来なかったんだ。

だけでもマークは僕に信じて欲しいって……

マークにそんな事言われたら僕は嫌だなんて言えないよ。だから、どこかせっぱ詰まった様子が見え隠れしているマークの事を信じてあげようと思ったんだ。

「……大丈夫。僕はマークの味方だよ……」

追い詰められた人間と言うのは得てして暴走してしまいがちだから、なるべく刺激しないように優しくそつと言い聞かせてみた。

「あう、あう……」

僕の余りの優しさに触れたマークは、言葉を詰まらせているみたいだ。

これが俗に言うお涙頂戴と言う物なのかな……？

「……マーク、大丈夫だから話を続けて」

「だ、だから、違うんだよマナブ君……」

眼鏡なんて全然——」

「良いからさっさと話を進めてよっ！

ちよつと優しい顔したら直ぐに付け上がった！

流石の僕だっていい加減にうんざりだよっ！

眼鏡お姉さんなんてどうでも良いから、なんで僕が修行しなきゃいけないのか、それを早く教えてよ……」

僕はマークを甘やかすだけのそんな、なあなあの関係に甘んじる積もりはないんだよ。

何時までうだうだ言ってるマークを慰めるのは簡単だよ。だけど折

角こんな大自然が広がる山に来たんだ。僕は今直ぐにでもこの大自然の中に溶け込んでしまいたいんだ。つまり虫取りとかそんなところから始めたいんだよね。

僕としてはカブトムシとかクワガタを取ってみたいんだよ。なんてったってお店でしか見た事がないような物を自分が山で捕まえる。つまりは天然物だよ。それ相応に高く売れる事だろうね。

そうだ、近所のガキンチョ共に割高で売り付けよう。

どうせ物の価値も解らない子供、僕に掛ればちよいってもんだよ。

「ち、違うんだよマナブ君……」

「何が違うんだよ。良いからさっさと修行を始めようよ？」

僕は早く修行を終わらせて天然物を捕まえないといけないんだ。

ところで修行って、僕は何をすれば良いの？」

「だからそれが違うんだよマナブ君。修行をするのは私だけだ……。ただ、一人だと寂しいからマナブ君を連れて来ただけだ！」

ええっ！　なんで僕をなの？

別に僕じゃなくても良かったじゃないか。僕にだって学校とか色々あるのに……。

修行と言う言葉にほんの少しだけ胸を踊らせていたのに……。

くそっ！　マークめえ！

僕の胸のドキドキを返せよっ！

心の中で握り拳を作り、呪詛の言葉を呟いてみた。

……まあ、仕方ない。マークが山に連れて来てくれた事には感謝し

てるからね。

本当はちゃんと僕を助けてくれなかったマークに仕返しを考えていたんだけど、この山に免じてマークの事を許してあげるよ。

「……………じゃあ修行はマークに任せるから、僕は勝手に天然物でも探させてもらうよ」

「…………駄目だ！

私を一人にするな！

マナブ君は私の修行を見ているんだ！」

マークに背を向けて、早速にでも虫取りに励もうとしていたところを呼び止められてしまった。

「…………どうして？」

「…………だ、だから寂しいからだと言っているだろう！」

マークったら高校生にもなって寂しいだなんて…………。

泣かしてくれるじゃないか…………。

もう僕には、いくらマークが声を張り上げようとも子供のわがままにしか聞こえなかった。

「…………分かったよマーク。僕の代わりにジョージでも連れて——」

「駄目だ！ ジョージじゃ駄目だ！

マナブ君が見ている！」

僕を見るマークの眼が本気だったんだ。

逆らったら悪戯でもされてしまいそうな、そんな眼だよ。

マークが言うに世の中にはいろんな変態さんがいるみたいなんだ。

マークが僕に気を付けるように言ってくれてたのに、まさかマーク自身がその変態さんの一味だったなんて……。

こいつはとんだスクープだ。早速マスヨお姉さんに教えてあげないと。

「……べ、別にジョージでも良いじゃないか！
な、なんで僕なの？」

ま、まあ良いや。僕、忙しいから帰るね？

じゃあまたね」

「……だ、駄目だ！
帰っちゃ駄目だ！

落ち着けマナブ君、ジョージは入院してるじゃないか。だからマナブ君は私が良いと言うまでジョージに会ったら駄目なんだ！

だからまず私の話を聴いてくれ……」

マークがじりじりと僕に近寄って来るんだ。

どことなく怪しげな手付きで近寄って来るんだ。

マークの視線が僕を捕えて離さない。

僕の第六感が頭の中で囁いている。あの顔は犯罪者の顔だ！

「ジョ、ジョージにはもう毎日会ってるからそんなの今更だよ。
昨日だって——」

「な、なにいいいっ！
な、何を喋った！？」

ジョージに何を話したんだ!?

言え! イヤ言うな!

誰にも言うな!

マークが僕の肩に掴み掛かり、ゴリラのような腕で僕の身体を前後に揺さぶる。

意識が薄れて逝く中で僕は最後の抵抗に出た……。

「……ぼ、僕に、さ、触るな。変態……」

「だから違うんだあああああっ!

眼鏡とは断じてなにもないんだ————」

続く

お山でお稽古！ 2

僕が山に来てからもう既に一週間。

いつの間にかマークに言いくるめられてしまったんだけど、修行を見てるだけってとっても暇なんだ……。

僕にもなにか手伝える事がないか、と言う名目でこっそりと色々な物を探し回ってみたんだ。主に昆虫をなんだけど三日と立たずに見切りをつけてやったよ。

どうやら僕に昆虫採集は向いてなかったみたいなんだ。なんてたってイモイモとムシムシした奴が僕に無許可で、僕の腕の上を、僕の了承を得ていないにも関わらず、勝手にウネウネと悍ましくも蠢いて居たんだ。

だらしなくも悲鳴を上げそうになったんだけど、僕は意地でも悲鳴は上げなかったよ。

本当は直ぐにでも泣き叫んでしまいたかったんだけど、僕はあくまでも冷静さを装う事に徹したんだ。

僕が隙を見せた瞬間にイモイモ君が僕の腕に寄生でもしそうな雰囲気だ。僕は瞬きもせずイモイモ君に睨みを効かせ、心の中でこう呟いたんだ。

あと一うねりでもしてみろ……、そんな事したらお前の脳天に必殺のデコピンをお見舞いしてやるぜ……。

ってね……。

本当は声に出したかったんだけど、そんな事して僕がカウボーイかなにかと勘違いされてしまったら困るからね。

それは良いんだけど、問題はイモイモ君だよ。あいつは一うねりと言わず三うねり半はうねったんだ。

勿論、この僕の腕の上でねっ！

あいつはそれだけでは飽きたらず更に自分の身体に捻りを加えるんだ。思い出しただけでも鳥肌が立つよ。あいつのその姿はそう、まるで荒れ狂う獅子舞のように……。

か、下等生物の分際でこの僕を威嚇するなんてえええっ！

許せんっ！

そう思った僕は高ぶる気持ちを抑えきれず、溢れる思いを中指に込めて、瞬きする間も与えずに渾身のデコピンをお見舞いしてやったんだ。

あいつの相手をしてやったのがたまたま僕だったから良かったもののこれがただの一般市民ならちよい、だったね。

僕もギリギリのところデコピンをお見舞いしてやる事が出来たけど、あと数瞬だけでも僕の冷静な情報分析と的確な判断が遅れていたら倒れていたのは僕の方だったろうね……。

僕は倒されてしまった時の事を想像し、今更ながらに冷や汗が溢れ出していた。

あのムシを退治したまでは良かったんだけど、一つ問題があったんだ。

もしかしたらあのムシ毒とか持ってたかもしれない……。

一度その考えが浮かんでしまうと流石の僕でも不安に感じてしまっ
てしょうがない。

あのムシに噛み付かれたとかそんなヘマをした覚えはないんだけど僕の皮膚に直接、謎のエキスを塗り込んだ可能性も否定は出来ない。考えれば考えるほど僕は不安になってしまったんだ。

昆虫学者でもない僕がああムシが毒を持っていたかなんて知る訳がない……。

ここで考えているだけでは何も解決しないと思い立った僕は直ぐにでも行動する事に決めたんだ。

幸いな事に直ぐ近くにマークがいたのを思い出した僕は、あのムシに汚染されてしまった可能性がある部分をマークに擦り付けてその部分を拭ってしまう事を思い付いたんだ。

思い付いてからは早かったよ。修行に集中しているマークに腕を擦り付けるなんて僕には造作も無い事なんだよ。

日長一日なぜか木に抱き付いてるマークに僕は、何度となく腕を擦り付けていたんだけど、運が悪い事にマークが丁度良く休憩に入ろうとしていたところだったみたいなんだ。

だけでも僕は焦る訳でもなくマークに話し掛けたよ。

「マーク、一体なにをしているの？」

マークが修行を始めてから何度となく聴いてみた事をまた聴いてみただけなんだけど、その度にマークはこう言うんだ。

「……子供にはまだ早い」

このやりとりだけでもうマークには、僕はただマークが何をしているのかを知りたがってるようにしか見えない筈だね。いや、実際にマークが何をしているのかは物凄く気になるんだけど、その時はマ

ークを誤魔化す事に専念したんだ。

これでマークにバレずに毒とかを押し付ける事に成功したんだけど、この秘密はお墓にまで持って行かないかと思っただよ。

この出来事で虫取りを諦めてしまった僕は、もっぱらマークが何をしてるのか調査していたんだけどそれもなんだか飽きてきたんだ。そこで一つ、僕も修行でも始めようと取り敢えず走る事にした。

——それから一週間。

走り始めてもう一週間は立ったと言うのに僕の胸のモヤモヤは晴れない。やっぱりマークみたいにしてみないと駄目なんだろうか？

マークが修行している隣の本を確保した僕はマークの真似をしていた。この行為に何か意味があるのだろうか？

僕には良く分からなかった……。

マークと僕のやり方にどこか違いがあるんだろうか……？

僕は注意深くマークを観察してみる事にした。

マークに顔を向けるとマークもまた僕を見ているようだった……。修行を始めてからこのところ、余り周りに気を払う事のなかったマークが僕に注目している。少し恥ずかしかった。

「……子供にはまだ早い」

ただ一言そう言うとマークはまた修行に没頭し始めてしまった。

「……なんで？」

「……………」

それから何度もマークに問掛けてみたんだけど、まるで僕から興味が失せたと言わん許に無視されてしまったよ……。

「……」

「……………」

「……あの、暇なんだけど……」

「……………」

僕はマークに見切りをつけてまた走る事にした。

——マークに見切りをつけてから更に一週間たった。

だいぶこの山に慣れてきた僕だけど、やっぱり時間を持て余してるんだ。だから取り敢えず、木に抱き付いてるマークのお尻にパンチを試してみた。

「……子供にはまだ早い」

「……」

マークが僕に構ってくれないと言う事はわかっていたけど、少しだけムカついたんだ。

僕はそんなマークを放ってまた走る事にした。

——それから一週間。

そろそろ家に帰りたくなってきた。僕は何をしているんだろう……？

何故だか無性に走りたくなった……。

——あれから一週間。

マークの修行に付き合ってた僕だけど、最近になって僕がいなくても大丈夫なんじゃないか？　と思い始めた。

「……ねえマーク、僕そろそろ家に帰りたいんだけど……」

「……駄目だ！

子供にはまだ早い」

「……」

これも最近になって気付いたんだけどマークは僕の話を全く聞いてないみたいなんだ。

勝手に帰って良いものなのか僕には判断が付かないんだ。

僕は夕日に向かって走りだし……、やっぱり気分が乗らないから止めておこう。それに夕日もまだ出ていない。

鬱な気分を紛らわす為に僕は少し歩く事にした。

暫く歩いていたらふと気付いてしまった。そこは見た事のない場所だった。

気付かない内に随分と遠くまで来てしまったみたいだった。

このままでは迷子になってしまうと思い、来た道を引き返す事にしたよ。

引き返そうと後ろを振り向きかけた時にどこからか物音が聞こえてきたんだ。

何かが擦れるような……、決して風が強い訳ではないんだけど葉っぱが擦れ合うかのようにガサガサゴソゴソと聞こえてくるんだ……。

注意深く辺りを見渡してみる。

特に変わった様子はなかった。やっぱり気のせいなのかと思い、来た道を戻ろうとしたら、またガサガサゴソゴソとどこからか音がするんだ。

「誰だっ！」

特に誰かに追われているとかそんな覚えはないし物音の発生原が人間とも限らないんだけど、ついついノリでそう叫んでしまった。

「た、助けて！」

どうやら誰かが僕に助けを求めているみたいなんだ。

暇だ暇だと言っていたけど面倒事はご免だよ。

僕は聞こえなかった振りをしてその場を後にする事にした。

「助けてっっ！」

誰かいるんでしょ!？」

「……」

聞こえない、聞こえない、僕は耳を塞ぎ幻聴と戦っていたんだけど、声の主は諦めてはくれないんだ。

「わたし知ってるんだから！」

「……」

「君の名前を知ってるんだから！ マ、マノブ君なんでしょ！？
助けてマノブ君！」

「僕はマノブじゃないよっ！ マナブだよっ！」

「やっぱりいるんじゃない！ 助けてー！」

しまった、そう思った時にはもう既に遅かったんだ。僕とした事がこんな簡単な誘導尋問に引っかかってしまうなんて……。

それにしても名前までばれてしまっはここで助けてあげないと後々で面倒な事になってしまいそうだね。

しょうがないから助けてあげる事にしたんだ。僕は声が聞こえてくる方を注意深く見てみた。先程は気付かなかったけど、あからさまに揺れている不自然な木が一本あったんだ。

木、木のお化け……？

怪しげに揺れている木の枝が、まるで僕を手招きしているようだった。

今更ながらに気付いた事があるんだけど、それはあの木が女の人だと言う事だった。声の感じから言ってまず間違いないと思う。声は女の人なのに身体の大きさは僕の何倍もあるんだ。戦ってもまず勝てないと思う……。

助けてと言いなから手招きしている怪しげな木にこのまま近づいても大丈夫なんだろうか、と少し思うんだ。なんか近づいた瞬間に足でも引っ張って行かれそうな不穏な空気が漂っているんだよ。

マークでもいればまた違うんだけど……。

マーク……？

そうだ！ マークだよ！

マークじゃないか！

僕は気付いてしまった。最近マークが僕と遊んでくれなかったのはこんな理由があったのか。

多分これはマークの悪戯なんじゃないかと言う訳だよ。実はマークってばこう言う悪戯が大好きなんだ。なんで声が女の人なのかは解らないけどマークの事だから相当なお金を掛けた仕掛けなんだろうね。

マークの悪戯だって気付いちやったら怖い事なんてコレッぽっちもないし。

僕は足取りも軽く、怪しげな木に向かって歩きながらに声を掛けてみた。

「マークでしょ？」

「ち、違う！

わたしあんなオジサンじゃない！」

オジサン……？

マーク、もしくはマークが雇った人が僕に悪戯してると思ってただけど、今の一言でよくわかんなくなっちゃったよ。

マークってオジサンって言われるのを嫌がるんだ。だからマークを少なからず知っている人なら絶対にマークの事をオジサンなんて言わないと思うんだ。

不安になった僕は少し後退り、足元に落ちている小石を拾いそれを木に向かい少し強めに投げてみた。

「……」

僕の投げた石が確実に木のお化けに命中していた。けどどなんの反応もない、木のお化けは相当な耐久力の持ち主のようだ。

「……痛くないの？」

「……へっ？」

「……僕の投げた石に当たったよね？」

「そ、そんな事したんですか！？」

どうやら木のお化けはかなり鈍感みたいだね。少しでも親しみやすい奴だと思ったよ。ちょっとだけ用心してたのにいつの間にか言葉まで交しているし、ついでだからマークの事も聞いてみるよ。

「あの、マークに雇われた訳じゃないの？」

「あ、あんなオジサンなんてしりません！

そ、そんな事より早く助けてください！」

助けて……？

僕の目の前には先程まで揺れていた木が普通にそびえている。

「……えっと、助けてって言うてるからにはそれなりに困ってるって事だと思うんだ……。

でも君は僕が目から見て、あんまり困ってるように見えないんだだけ

ど、特に鳥に突かれてる訳でもないし……」

「と、鳥!？」

な、何を言ってるんですか!

わたしは足をが絡まってて動けないんです!」

この木って動けるの!？」

見てみたい……。こいつは僕の好奇心をビンビンと刺激してくれるね!

それじゃあ早速この木を助けてあげよう……。でも足が絡まったって事は根っこが絡まったって事なのかな……?

「……えと、助けるって、君の周りの土でも掘り返したらいいの?」

「えっ!？」

あ、あの、普通に引っこ抜いてください……」

普通に……?

引っこ抜く……?

この木を……?

僕が……?

普通に無理に決まってるじゃないか……。

自慢じゃないけど、僕って非力なんだよね。

なんてったって木刀を使ったってメガネのレンズさえ壊せないのに、

僕の何倍も大きい木を引っこ抜くだなんて……。

「……子供の僕にはとても出来そうにないんだけど……」

「で、出来ますよ。」

だってわたしの方が小さいと思いますから……。

それに子供って、わたしと同じくらいなのに……？」

へえー、この大きさと僕と同じくらいなんだ。確かに声の感じは子供っぽいような気もしてたんだけど、あれで子供なんだね。

僕の見立てだと樹齢何十年とかいってると思ったんだけどね。

「……君が子供でも無理だよな？」

それがわかったところで大きさ変わってないし……。

しょうがないからマークでも呼んで——」

「待って！　お願い！」

この辺ってクマがでるんです！

お願いわたし置いて行かないで！

一人じゃ怖いんです！」

「……一人じゃ怖いって、何処を見渡しても周りは君のお仲間じゃないか……。」

それにクマが怖いって、君ならガリガリされたりよじ登られたりしても平気なんじゃないの……？」

「そ、そんな事されたら死んじゃいます！」

さっき石ぶつけたのは気付かなかったのに、クマにガリガリされたら死んじゃうんだ……。

もう僕にはこの木が強いのか弱いのかわかんないよ。

違うね……、やっぱり僕が非力なだけなんだね。かなり強めに投げた筈なのに気付かれないんだから……。

僕は自分の駄目さ加減に嫌気がさして、少しだけ憂鬱な気分浸ってしまった。

「……やっぱりマークを呼んでくるよ。非力な僕には荷が重いと思うからね……」

「ま、待ってください！

クマが出たらどうするんですか!？」

「……大丈夫だよ。早めに戻ってくるから。それにそう都合よくクマが出てくるとも限らないし……」

「こ、この返はクマの縄張りなんです！

助けてくださいお願いだからー！」

クマの縄張りって言われても、僕この山に入ってからクマなんて見たことないし、それにこの返がクマの縄張りだって知ってたんならここに来なきやいいのって少なからず考えてしまったよ。

ただそれを顔に出すようなヘマはやらかしてないけどね。

でも、あんなに必死にお願いされたらここに置いていきにくいし、ホントにどうしよう。

「それじゃあここで僕も一緒に誰か来ないか待っててあげるから。それが僕に出来るギリギリのところだよ……」

「え、えーっ!？」

なんで!?

そんな事してくれなくていいですから普通に助けてください!」

「……君の巨体を引っこ抜く事は僕には無理だからね」

「なにを言うんですか!

わたしそんなに大きくありませんよ!

そんなのやる前から勝手に一人で諦めないでください!」

目の前の木が僕を励ます為なのか、ただもがいている為なのか、激しく揺れ始めた。

激しく揺れている木を見た僕は心に熱い物が込み上げてくるのを感じていた。

どうやら僕は、いつの間にか諦め癖がついてみたいだね。少し前までは僕もこんなじゃなかったはずだよ。

少し気合いを入れたら僕にも出来るはずだよ。

僕は両手で頬を叩き自分を奮い起こした。

高ぶる気持ちをどうしようかと少し悩んだけど、僕はそのまま木にタックルしてぶつける事を思いついたんだ。

「ド畜生っ!

あっっーっ!」

「え!?! なに!?! なにが? え? なに!?!

なにがあつたのー!?!」

「ど、どすこーい!」

僕は全速力で肩口から木にぶつかってみたんだけど、予想以上の衝撃と痛みに一度怯みかけてしまった気持ちをどすこいと言う言葉で必死に誤魔化したんだ。

僕はこの木に弱味を見せちゃいけないとそれは必死に踏ん張ったんだ。

「どすこい……」

「え!?! どうして?」

なにが!?! え!?! なにがあつたの!?! クマが来たの!?! イヤ! 助けて! ヤダヤダヤダ! まだ死にたくない!」

木のお化けがうるさくて集中出来ないんだけど、少なからずこの木に傷を負わせる事が出来たみたいだ。

その証拠に目の前の木が激しく揺れ動いているんだ。

僕はこの流れに乗って勢い良くこの木を引っこ抜いてやろうと中腰になり木に抱き付いた。足腰、腕、背中、僕は自分の持てる全ての力を使い、それはもうバックドロップでも決める勢いで力を込めたんだ。

踏ん張り過ぎてなのか木に抱き付いている自分が恥ずかしかったかなのか、僕の顔は遠目から見ても真っ赤になっていたことだろうね。

そうだねよく考えてみるとこの木のお化けって、喋り方とか声の感じが明らかに女の子なんだよね。

そう考えると僕は白昼堂々と女の子に抱き付いている事になるんだ……。

まずいよっ! こんなところマークに見られたら怒られちゃう!

いくら不可抗力だからって、マークに破廉恥だってなじられちゃうじゃないかっ!

変な噂でも流されたら大変だよ。

僕はとっさに辺りを見渡した。

誰もいなかったんだけど、僕はもうこの木を助けてあげることよりもマークに対する言い訳を、それと同時にこの木のお化けの要望を上手く断る方法を考えていたんだ。

「……はあ、頑張ってみたけどダメだったよ。じゃあまたね」

「えええっ！？　まだなにもしてないから！

諦めるの早いから！

お願いだから見捨てないで」

僕はついさっきまでは本気でこの木のお化けを助けてあげようと頑張っていたのに、なんにもしてないなんて言われるのは流石の僕でも面白くないよ。

僕が頑張ったって事は何よりもこの僕自信がよく知っているし、証拠だってあるんだ。

ホントは直ぐにでもこの場を離れてしまいたかったんだけど、最後にそれだけバシッと見せつけてから去る事にしたよ。

「僕がなにもしてないだって？

そんな事はある得ないんだよ。

その証拠に見ろ！

この赤くなった僕の肩を！」

僕は袖口から肩をだけさせこれでもかと僕の赤らんだ肩を見せつけてやったんだ。

それもポーズまで決めて恥ずかしげもなく見せつけてやったよ。

「見えないところでそんなこと言われたって分かりません！

それに引っこ抜くのになんで肩が赤くなるんですか！？」

そんな意味ない嘔吐かないでください！

いくらわたしがとろくたって誰かがわたしのこと持ち上げようとしたら流石に分かります！」

「い、言ったなっ！

僕を嘔吐きだって言ったなっ！

僕程の真人間が嘔吐きだって！？

いいさ、特別に見せてあげるよ。

真正面からこの僕の非力さ加減をなっ！」

全く持って不愉快だよ。僕を嘔吐き呼ばわりするなんてまず助けてもらう時の態度がなってないんだよ。それよりなにより僕が話し掛けていた場所が正面じゃなかったって事がまず不愉快だ。あんなに真剣に話してたのに、もしかしたら僕は背中とかに向かって真剣な顔をしてポーズまで決めていたんだ。とっても恥ずかしいよ。

僕がいた場所の反対側くらいにぐると周りこんだんだ。この木のお化けの面でも拝んでやろうと鼻歌混じりに周り込んだんだ。

それなのに、ああそれなのに、なんでだろう。木の根っこに足を取られている、僕と同じくらいか少し下くらいの女の子が両手を使い足元をもぞもぞしていたんだ。

その女の子が足元をもぞもぞする度に木が揺れているんだ。

よくよく見ると足だけと言わず、手の裾とか色々引っかかっているみたいなんだ。

本当にただそれだけだったんだ。

僕はマークの悪戯なんじゃないかと、木の動きに一喜一憂していたのに、こんなくだらない悪戯だったなんて……。

僕は……、もっとダイナミックでお金をかけたのが見たかったんだ。僕にはもう怒ったらいいのか悲しんだらいいのかわかんないんだよ。

……ただ、悔しいんだ。

「……なにしてるの、こんなところで？」

僕は彼女を発見してからそれはもう一目見ただけでわかるぐらいに不機嫌を気取っていたんだ。

だってそれはしょうがない事なんだ。マークが僕と遊んでくれない事もそうだし、悪戯の犯人だって僕の知らない人だったんだ。

まだ、マークとかジョージとかならそうゆう遊びなんだって理解出来るんだ。

だけど知らない人に悪戯されるなんて僕の事を馬鹿にするのもいい加減にして欲しいもんだね。

だから自然と口調がきつくなっていたとしても少しぐらい許して欲しいよ。

「なにしてるって見て分からないんですか!？」

彼女もまた少し口調をきつく、僕に言い放ったんだ。

彼女の口調からは焦りと少しの侮辱みたいな物を感じるよ。なんでそんなに察しが悪いんだ、とでも言いたげにね。

全く持って理不尽だと思ったよ。

僕は悪くないっ！

って声を大にして言いたいよ。

ただ僕はこんな事で怒ったりはしないよ。

こんな時こそ冷静にならないと、また眼鏡お姉さんの時みたいに失敗してしまう。

紳士な僕は当然の選択として気の利いた事でも言っただけよと思っただけなんだよ。

ただ僕は実際に紳士な人がこういう時になんて言えばいいのか知ら

なかったんだ。

そこで僕はマークならなんて言うだろうと、マークならどんな気の利いた事を言ってくれるだろうと考えたんだ。

マークを一言で説明すると紳士らしいんだ。だから僕も当然のように紳士を名乗ってただけど、紳士って具体的によくわかんないし、マークの真似をしてたら紳士なんだろうって勝手に解釈する事で自分を納得させないと頭の中の妖精さんが非行に走ってしまう。そんな気がする。

ただ問題なのがもしかしたらマークは自分の事を紳士じゃなくて戦士と言っていたのではないか？

って思えて来たんだ。

自分の事を紳士と言ってるのはまだ許せるけど、自分の事を戦士と言っていたならば、マークって可哀想な人に見えなくもないんじゃないのか？

僕がそう悩んでいる隙に頭の中の妖精さんは既に手遅れな状態になっていた……。

続く

「やあ、お嬢さん。そんな木偶の坊なんてほっというて僕と踊ろうよ？」

卑らしい腰付きで怪しげにリズムを取りながら、なぜ僕はこんな事をしているんだろうと、自分でも不思議に思わずには居られなかった。

そもそも僕は何をしていたのか良く分からないんだ。

僕の目の前に居る、僕と同じ位か少し下くらいに見える女の子に、優しい僕が女の子に不安を感じさせないようにと気さくな感じで声を掛けたんじゃないかと思えなくもないんだけど、目の前の女の子は僕に差別的な視線を向けてきてるんだ。

「……わたし、別に踊ってる訳じゃありません！」

もうふざけないでください！

なんなんですか、さっきから！」

怒鳴られてしまった。

僕だってこんな事がやりたかった訳じゃないんだよ。ただ気付いたらこうしていただけなんだ。

むしろ被害者は僕の方だよ！

そう思うとなんだか腹が立ってきた！

「なんだよ！　僕をそんな目で見るなよっ！」

僕の優しさを踏みにじるなよっ！

僕は紳士だよっ！」

「……」

彼女の視線がより冷たい物になっていくのを肌に感じた。

「……」

僕も彼女に睨みを効かせてみた。

「……」

「……」

「……」

彼女からは手足が自由になった瞬間にでも僕に飛び掛って来そうなくらいの気迫を感じた。だけど今の彼女は身動きがとれない状態なんだ。つまり僕は絶対的な優位に立ってるって事だよ。

勝てる！

僕は……、そう思った。

だけど僕の心の中でそれは何かが違っていると告げているんだ。
何が違うんだ？ と心の中に問い返しても答えは出ない。

僕の方が優位に立っているのに、僕は今ひとつ攻めきる事が出来ない。

僕は考えた……。

なぜ無防備な彼女をこんなにも警戒しなければいけないのかを。

「……っ！」

そうか……、僕が不用意に近づいて来た所に騙し打ちを喰らわそう
って魂胆なんだね？

危うく引っ掛かるところだったよ。

「……ふう〜」

僕は特に額に汗をかいた訳でもないのに、手の甲で額を拭ってみせた。

「……？」

その僕の仕草を見た彼女は、懐疑的な表情を浮かべて何か言いたそう
な雰囲気醸し出しながらも黙って僕を見ていた。

「危ない危ない、危うく君の作戦に引っ掛かるところだったよ。
全く、油断も隙もないよ……、でも残念な事に僕にその手は効かない
よ」

「……へ？」

彼女は余計に分からないんですけど？ とその眼で語っていたんだ。全く、とんだ女優さんだよ。ここまで来てまだ演技を続けるなんて……。

「……すつとぼけたって無駄だよ。」

もう君の考えなんて僕にバレバレなんだから……」

「……な！？」

もういい！

わたし帰る！」

怒った彼女は、こんな場所には居られないとばかりに立ち去ろうと
していたんだ。

だけでも彼女は木の根っこに手足をとられていた事を忘れていたの
か、勢いよく身体を起こそうとして足首を捻ってしまったみたい
な
んだ。

「っ！ た〜！」

彼女は恥ずかしかったのか、顔を真っ赤に染めてその目には涙さえ
滲ませていたんだ。

「もういや！」

見ないでよ！

見ないでったら！

……わたしなんか見ないでよ……、うつ、うつ……」

何やら彼女は本格的に泣き出してしまったんだ。

どうにも僕が彼女の事をジロジロと見すぎた事が原因みたいなんだよ。

いや、僕としても何か見てはいけない物を見てしまったと思ったんだよ。

彼女は泣き顔を見られたくないのか、顔を隠そうとしていたんだけど、手足が木の根っこに引っ掛かっているから、手で顔を隠そうとしても悪戯に木を揺らすだけで、結局彼女は自分自身の肩の方に顔を俯けていたんだ。

そしたら急に申し訳ないような気になってきて、つつい謝ってしまいう事にしたよ。

「……あ、あの、その、ごめんなさい！」

いや、あの、ホントにごめんなさい！」

「……なんで、なんで、わたしに意地悪するんですか？」

彼女の突拍子もない質問に僕もたじたじになってしまって、ホントに困っちゃうよ。

まず僕は意地悪なんてした覚えなんてないし、言い掛かりもいいとこだよ。

もしかして……、僕の持つ癒し系のオーラが効いていないのか？

ご近所のマダム達だって僕に骨抜きなんだぞっ！

「……僕は、意地悪なんかしてない……」

「だって！ さっきからわたしの事、からかってる……」

僕は強くでようと思ったんだけど、こっちに向けられた彼女の泣き腫らした顔を見たら強くは言えないよ。

僕は木の根っこに引っ掛かっている彼女の手足を外してあげながら理由を説明し始めた。

「ち、違うよ。からかってないよ。ただ、ぼ、僕の名前を知ってたから、そ、その……、スパイなんじゃないかな？　なんて考えちゃっただけなんだよ……」

「スパイ……？」

なんで？　と彼女の顔が物語っていた。

僕としても木を揺らしていたのがこの女の子と分かった瞬間にもしかしたら？　ってちよつとだけね。

「いや、あの、マークに雇われた訳じゃなさそうだったから……。マークじゃないなら、じゃあ誰なんだ？　って思って、そしたら、もしかして眼鏡お姉さんかマスヨお姉さんの差し金なんじゃないかな？　って……」

「……眼鏡お姉さん？」

「あ、眼鏡お姉さんって言うのは、一応は僕のお友達なんだけど、いっつも僕に酷い事するとっても意地悪な人なんだ……」

「と、友達なのに!？」

彼女はひどく驚いているようだったけど、僕だって友達なのについて

そう思ってるよ……。

僕は曖昧に笑いながら頷いてみせた。

「ははは……、でも友達にならないともっと酷い事してくるんだ。だから君も僕に酷い事するんじゃないか？　って警戒しちゃって……」

「そうだったんだ……」

どうやら彼女も納得してくれたみたいだ。
これで僕も一安心だよ。

「……マスヨお姉さんって人も……？」

「へっ!？」

納得してくれたんじゃないの……？
彼女も結構に食い下がってくるね。

まさか、スパイ……？

僕は彼女の引っ掛かっていた手だけを解放してあげると、いったん作業を止めて彼女を観察する事に決めたんだ。

「あ、マスヨお姉さんも僕に酷い事するけど、友達じゃないし、眼鏡お姉さんよりはいくらかマシだから……」

あっ！　でも、マスヨお姉さんは頭の上に鳥の巣を搭載してるんだ
!」

「鳥の巣……？」

食い付いてきた！

じゃあやっぱり、マスヨお姉さんの事を探っている……？

いや、まだそうと決まった訳じゃない……。

第一マスヨお姉さんなんて調べても大した物は出てこないし、マスヨお姉さんを調べようなんて思う奇特な人はいないだろうし。

でも、もしマスヨお姉さんを調べようって人が居るなら、それってやっぱり眼鏡お姉さんぐらいしか……。

いやでも眼鏡お姉さんはマスヨお姉さんの事を親友って言ってたし、いまさら調べるような事なんて……、まさか、眼鏡軍団で内部抗争が……？

分からない、けど、探ってみないと。

「……メ、メガネ」

「メガネ!？」

予想以上の反応だ……。

やっぱり眼鏡お姉さんの手の者なのか……？

「……その、鳥の巣でメガネなの？」

「なに言ってるんだよ！

鳥の巣は鳥の巣でメガネはメガネだよっ！

鳥の巣は鳥の住処でメガネは視力を補強する物だよっ！」

僕は思ったよ。この子は何も分かってない、こんな常識も知らない

って、なんて可哀想な人なんだろう、ってね。

「なっ!? それくらい知ってます!」

またしても僕の優しさが踏みにじられたんだ。

折角に僕が教えてあげたのに怒鳴らないで欲しいよ。

僕だって優しいだけの男じゃないんだぞ!

仏の顔も何とやらだよ。

もう僕の中では彼女はスパイ確定としといたよ。

「嘘吐くなよっ!

スパイのくせにっ!

どうせ君も眼鏡軍団の手の者なんだ!

だったら僕の方が偉いんだよ!

もっと僕を敬えよっ!

だって、僕は眼鏡軍団の副首領なんだ……。

くそっ! なんで僕がそんなことしなきゃ……。

……仕事はちゃんとしてるから、だから僕の事はほっといてよ……。

僕は眼鏡派でも鳥の巣派でもない、僕は僕のやりたいことをしてたいだけなんだ!

……僕は忙しいんだ、もう帰ってよ」

くそっ!

なんだよ眼鏡軍団って!

名前からして悪役じゃないか!

なんで僕が副首領なんてしなくちゃいけないんだよ!

なんでそのことでマスヨお姉さんに恨まれなくちゃいけないんだよ!

思い出さないようにしてたのに、思い出さないようにしてたのにーっ!

僕は痛む頭を両手で抑えて、その場にしゃがみ込んでしまった。

「なんなの！ さっきから！ やっぱりわたしの事からかって面白
がってるんでしょ！」

「からかってないっ！ いいからもう僕の事はほっというてよっ！」

僕はつい彼女の声に反応してそちらの方を向いてしまったんだけど、ふと見た彼女の顔はこれ以上ない程に怒っていたんだ。

僕も怒ってるのに、それ以上に彼女は怒ってるんだ。

僕が怒ってる理由は分かっているんだ。なんてったって自分の事だからね。でも彼女が怒っている理由が全くもって分からないんだ。

自暴自棄になってしまった僕を奮い起こす為に僕の事を怒っているんだろうか……？

いや、違うね。マークがいないと何も出来ない情けない僕に愛想をつかしたんだ……。

もうこの世に僕程の情けない人間は必要ない、僕なんて要らないって僕の事を責めてるんだ。

きつとそうだ、肩書きだけは偉そうなのに、いざ蓋を開けてみたら期待外れもいいとこだったんだろうね……。

でも、そんなの自分勝手過ぎるよっ！

そっちが勝手に僕をスパイして来ただけなのに、勝手にガッカリして勝手に怒って……。いや、もし僕もスパイだったとしたらそうなるのかな……？

多分……、いや絶対に！

そうだね、僕は僕を求めてくれる人の期待に応えないと、立派なアクシヨンスターになんて成れないよ！

やるんだ、僕！

「——っと、聞いてるんですか！？
ちゃんとわたしの質問に答えて下さい！」

ふと気が付くと何やら彼女は僕に熱心に語り掛けてきてたんだ。

僕には何のことやらさっぱりわからなかったんだけど、未来のアクシヨンスターたる僕にやってやれない事はないよ。

「ハッハッハッ！」

僕に任せてくれたらもう何も問題ないよ。どんと来いてもんだよ」

「？ いや、あの、だから、どうしてわたしをからかったりするんですか……？」

「……からかう？」

誰だ、そんな酷い事をしたのは……？ おぜうさん、もう安心するんだ。そんな奴は僕がやつつけてあげるよっ！」

「え！？ あの……、えええっ！？」

なんなの！？ まだ、わたしの事をからかっているの？ わからない、わからないの……、わたしはどうしたら……」

僕の眼から見てもわかるくらいに彼女は取り乱していたんだ。

彼女は何かを否定するように首を横に振り、わからない、わからないと呟いているんだ。

可哀想に……、彼女は相当におつむが弱いみたいなんだ。だから僕は彼女に優しく、語るように説明してあげることにしたんだ。

「……おぜうさん。

メガネは視力を補強する物で、鳥の巣は鳥の住処の事を言うんだよ」

小刻みに震えている彼女にこれ以上いらぬ警戒心を与えない為に、僕は両手を軽くあげ、手に何も持っていない事を示しながらゆっくりと彼女に忍び足で近づいて行った。

僕は彼女の肩にそっと左手を置こうとしたんだ。その瞬間、彼女の右腕が僕の顔面を目掛けて飛んで来たんだ。

僕は咄嗟の事に反応が遅れてしまった。

いつもの僕ならば、常日頃から神経をシャーペンの芯のように尖らせていた僕ならば……、決して避けられない物ではない、筈だったんだけど、彼女に警戒心を抱かせてはいけないと無防備に彼女に近づいてしまったばかりに、しかも彼女の肩に手を置こうとしたその僕の勢いすらをも利用されて、自分の勢いが自分自身に倍以上になって帰ってくると思うとぞッとしてしまうよ。

ただ何故かとてもゆっくり……、まるで草むらで虫を捕獲しようとしている子供のようにゆっくりと彼女の右腕が向かって来るんだ。これなら僕の左手の方が先に彼女を捉える事が出来る。そう思った。だけでも僕の身体は思うように動かない、いや、動けないんだ。重いんだよ身体が。

そのせいで僕の左手も彼女と同じかそれ以上にゆっくりとした動き
なってしまうてんだ。

それでも僕にはまだ勝算があったんだ。

なんてったって僕の方が先に手を出したんだ。それなら僕の左手が
先に当たるのが当然なんだよ。

……ただ、今気付いた事なんだけど、彼女の右腕には確りとした握
り拳が作られていたんだ。更には、僕の弧状な線を描くような動き
に対して、彼女の右腕は直線的な動きで、ぶれる事なく真っ直ぐに
僕に向かっていているんだ。

いや、それでも僕の方が素早い筈だ！

集中しろ、僕はこんな所でやられる訳にはいかないんだ！

思い出せっ、ただひたすらに思い出すんだっ！

スルメの匂いに惑わされちゃダメなんだ！

噛めば噛むほど味が出てくるんだよっ！

だからイカ臭いなんて言っちゃいけないんだっ！

マークは……、マークは美味しそうに食べてたんだよ————っ！！

イカ臭い——

「ぬぼお——っ!!」

いたたた——って、そりゃあ痛い痛くないのって、僕の頬骨が削られるような痛みがゆっくりと僕に襲い掛かって来たんだ。

そりゃあ怖い怖くないのって、ただ僕が一つ言えるのは歯医者さんよりは——怖くないってことだね……。

僕だって漢の子なんだ、それくらいのことはい慢慢出来るよ……。

ただガツンとは言ってやりたくなつたよ。

「ったいじゃないかっ!
なんてことすんだよっ!

僕が功夫の達人じゃなかったら五割の確率で死んでたところぞっ!
裁判沙汰になってたところなんだぞっ!

僕がどうなってもいいのかっ!」

「えっ!? わたし、なんで、なんで!?
どうしてこんなこと!?!」

「そんなこと知らないよっ!」

彼女は擦り剥けてしまった拳と僕の顔を交互に見ているんだ。

「……違う、わたし、こんなつもりじゃ、ただ知りたくて、わたしと同じだって、仲間だって、話してみたくて、追いかけて、仲良くなりたくって……」

「……同じって言われても、僕と君は全然違うじゃないかっ!？
似てるところなんてないし……。」

もしかして、僕と同じで眼鏡軍団だってこと?」

「違うっ! そんなの知らない……」

「じゃあなんなのっ!？」

目の前に居る彼女は、俯いて、震えてて、たぶん泣いているんだろう
うと思った。

だけど、なんで僕のことを追いかけて来たのかわからなかった。

やっぱりスパイなのか？

もしかしたら、今も声を殺して笑ってるのかもしれない。

僕のことをちよろい奴だと笑ってるのかもしれない。

ここで彼女に近づいてしまったら、またさっきの二の舞になりそう
で、僕は少し距離をあけたこの場所で彼女の様子を窺うことにした
んだ。

「……」

「……」

「……」

いつまで経っても彼女は何も言ってはくれないんだ。

僕は待つことを諦めて、少し攻め方を変えることにしたんだよ。

「……あの、僕を追いかけ回してたって、君はやっぱりスパイなの？
あ、いや、言いたくないならいいんだよ。
言わなくていいから。」

言わなくていいけど、首の動きで教えてくれないかな？
ハイなら首を縦に、イイエなら首を横に、わかった？」

彼女はゆっくりと一度だけ頷いてくれた。

「……君は、スパイなんだね？」

彼女は首を横に振った。

つまりは彼女はスパイじゃないと、そういう事みたいなんだ。
ただ、スパイの人に貴方はスパイですか？ って尋ねた時に、スパ
イの人は正直に教えてくれるのかどうか、僕にはわからなかった。

「……そう言えば、僕と同じだって言ってたけど、それって君もア
クシヨンスターになりたいってこと？」

彼女は首を横に振った。

彼女はかなりの演技派だと睨んでたんだけど、これも違うと……。

「えーっと、それじゃあ君もマークの後継者ってこと？」

彼女はまたしても首を横に振った。

「……じゃあ、君もマークにここに連れて来られたのかな？」

彼女の首は横に動いていた。

ここまで否定されると、彼女は僕の話を聞いていないんじゃないか？　って疑心暗鬼に駆られて来たんだよ。

僕は試しに簡単な質問を試してみることにした。

「……わかってるよ、君も小学生なんだね？」

彼女はゆっくりと、だけでも確実に首を縦に振った。

僕はひとまず安心した。一応は彼女と意志疎通がはかれるみたいだ。見た目から判断できる事から確認してよかった。僕って天才だ！

……ただ僕と彼女の共通項が同じ小学生っていうのは理由として薄すぎる気がする。

果たしてそれだけで自分と同じだと言えるのか？

言える訳がない！

それだけの事なら他にも小学生は一杯いる……。

自分と同じだというからには、彼女は僕に対してそれなりの親近感をおぼえてるという事だと思うんだ。

だけでも僕は彼女に親しまれるような事をしていないし……

……それだけ僕が親しみやすい奴って事なのか？
なるほど、だからご近所のマダム達も僕をちゃほやとしてくれてる

のか……。

何もしてないのに親しまれるなんて流石だよ僕は。

……このスター性にアクション要素が加わればまさに無敵だ！

最強のアクションスターの誕生だッ！

僕は神だッ！

僕の顔は喜びと自信に満ち溢れ、身体からはみなぎる生命力をこの世界に少しでも還元しようと天を仰いだ。

「……僕は神ですかッ!？」

「……っ!？」

「……」

「……」

僕の余りの神々しさに呆気にとられたのか、彼女はまばたき、いや呼吸する事さえも忘れて茫然と僕を眺めていた。

人の視線を集めるのはそう嫌いな訳じゃない。

だけでもそんなに見つめられると少し恥ずかしいような……違うな、恐ろしいんだ。僕の魅力ってやつがねッ！

「……フッフッフッ、恐ろしいかい？」

この僕がッ!!!!」

彼女は激しく首を縦に振っていた。

可哀想に、僕の余りの神々しさに当てられたのか、彼女は小刻みに震えてるんだ。

勿論の事とびつかり優しい僕は彼女を安心させてあげるのに労力は惜しまない。

ただ簡単に安心させてあげると言ってもどうしたらいのか検討がつかない。

なにせさつきも彼女を安心させようとしたけど、手酷い反撃を受けているからね。

あの痛みは一生忘れないよ。なにせ僕は意外に根に持つ方だからね……。

それは別にいいんだけど問題は彼女だよ。おそらくだけど、彼女は人一倍に警戒心が強いんだろうね。

そんな彼女を安心させてあげる為に一体何をしたら……。

とりあえず僕は重低音を効かせた渋い声で語り掛ける事にした……。

「みんなアフロにな〜あれッ！」

そう言いながら彼女に向けて人差し指を突き付けた。

「……」

「……三、二、一」

「イヤア〜！！！！」

突然に彼女は発狂し始めたんだ。

当たり前の事なんだけど別に彼女はアフロになった訳じゃない。

なにせ彼女を和ませようとした、ちよつとした冗談だもの……。

むしろ、本当にアフロになられたら僕が発狂しちゃうよ。

「く、クマあ——っ!!!!」

「えッ！」

彼女の声に反応して僕は後ろを振り向いた。

「……くまあくではない、私はマークだ！」

そこにはマークと呼ばれる漢がたっていた。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1560c/>

教えて！マクギブソン

2010年10月10日00時31分発行